

# 市立函館博物館 研究紀要

## 第36号

---

- 新田 紀敏・大矢 京右  
市立函館博物館所蔵維管束植物標本の整理状況と菅原繁蔵コレクションについて - 1 -
- 川井 唯史・大矢 京右・篠原 陽・伊木 亜子  
市立函館博物館が所蔵するウップルイノリ *Pyropia pseudolinerares* (Bangiales, Rhodophyta) 標本と食文化 - 21 -
- 平野 千枝  
国宝「土偶（中空土偶）」50年のあゆみ－活用の記録を中心に－ - 30 -
- 田原 良信  
奉納御役所棟札と松前奉行所 - 42 -
- 飯塚 義之・柳瀬 由佳  
函館市所蔵の石製・金属製装身具の化学組成とその解釈 - 50 -
- 算用子 眞充  
サイベ沢遺跡出土骨角器の製作と利用－市立函館博物館所蔵資料に基づいた検討－ - 62 -
- 高柳 美咲  
〈資料紹介〉蠣崎波響筆「牡丹睡猫図」考 - 81 -

# 市立函館博物館所蔵維管束植物標本の整理状況と 菅原繁蔵コレクションについて

新田 紀敏・大矢 京右

## 1. はじめに

市立函館博物館（以下「函博」とする）が所蔵する維管束植物標本群（以下「函博標本」とする）は、北海道、東北、日本領時代の樺太を中心に、四国・九州を除く国内、千島列島、中国、ヨーロッパで1900年代初頭から<sup>(1)</sup>半世紀以上にわたって収集された約11,700点<sup>(2)</sup>の腊葉標本からなる。今後のさらなる精査により変動の余地はあるが、栽培植物も含めて科数は159（北海道で知られる168科のうち、90%以上に当たる152科を含む）におよび、2,256の分類群（種、亜種、変種、品種、雑種、未記載種）を含んでいる。そのほとんどは収集者の没後、遺族から寄贈されたもので、函博職員が採集したものをわずかに含んでいる。

本稿は、2023年から25年にかけて実施した函博標本全体の整理過程を記録し、その内容や特徴などについて述べるものである。また、函博標本中最も点数が多い菅原繁蔵収集の標本群については特に、本整理作業およびそれに伴う情報収集などで得られたことについて紹介するものである。

なお本稿3-1については大矢が、それ以外の部分については新田が執筆し、全体の編集は大矢が行った。また、関係する採集者、研究者等の敬称は省略している。

## 2. 函博標本の概要と整理状況

### 2-1. 収集者別の標本群の概要

函博標本の構成をコレクション別の概要とともに表1に示した。本稿では以降、表1の標本群を標本収集者の姓にコレクシ

ョンを付して呼ぶこととする。

13のコレクションから成る函博標本の採集者は、確認できただけで106名に達し、中には牧野富太郎標本の整理に当たったことで知られる水島正美（東京都立大学助教授・牧野標本館）といった著名な植物研究者も含まれる。そのほかにも記録になかったため名前はわからないが手紙や採集場所・時期から、上記106名に含まれないとわかる採集者もいる。函博標本は、このように多くの人たちが、50年以上にわたって採集した10,000点を超える貴重な学術資料である。

この函博標本の大宗を成すのは、樺太の植物研究や『函館山植物誌』（菅原・小松1959）の著者として知られる菅原繁蔵の9,000点を超える「菅原コレクション」と、旧制函館中学校～東京帝国大学の学生で函館植物志（山本・塚本1932）の著者である塚本角次郎の2,000点近い「塚本コレクション」である。菅原には多くの協力者や同定依頼者があり、菅原コレクションは道内や日本各地から送られて来た標本を含んでいる。塚本コレクションには指導者・共同研究者であった山本岩亀<sup>いわひさ</sup>の採集標本や山本が函館市内等の学校に保管されているのを見出した標本、その他の協力者が採集した標本が含まれる。

これらに次ぐのは、高山植物が中心の「森武コレクション」142点（新田・大矢2025）である。なお、収集者が不明で山越工作所製台紙を使用しているコレクションを「山越台紙コレクション」、同じく収集

表 1. 函博標本のコレクション (2025 年 3 月現在)

コレクション名	標本点数	主な採集地	採集年代
菅原繁蔵	9,138	樺太、北海道、山形県など本州	1909～1963
塚本角次郎	1,978	北海道、青森県、東京	1904～1931
森武寅雄	142	北海道と千島の高山植物	1929～1934
丸山雅子	123	函館近郊	1957
田村三代司	72	千島	1916～1917
黒澤美房	70	函館近郊	1940～1942
松本勝美	54	北千島	1944
松川準吉	51	中国旧満州	1933
山越台紙	50	関東、東海	1911～1914
舟根昇	23	北海道	1954～1956
室蘭	11	室蘭市	1914
中村ほか	7	函館近郊	1941～1942
函館博物館	5	函館公園	1995～1996
合計	11,724		

者不明で室蘭産の標本のみであるものを「室蘭コレクション」としている。菅原、塚本、森武以外のコレクションは、標本ラベルや関係資料からほぼ本人（同一人）による採集と考えられた。

採集地は北海道が多いが、菅原コレクションを反映して樺太や山形県も多い。数は少ないが、関東地方など本州や千島、中国旧満州のものもある。ヨーロッパのものは1点のみである。

採集年代は、塚本コレクションの山本が採集した1900年代から始まり、はっきりとしたものでは1904年が最も古い。全体としては、1920～60年代が多くなっている。一方、1970年代以降の採集標本はほとんどない。

## 2-2. 函博標本のこれまでの整理状況

今回の整理以前の標本整理は、宗像和彦らによって1996年までに行われた大掛かりなものがあり、結果は蔵品目録（以下目録とする、市立函館博物館編1996）としてまとめられ、出版されている。この時の主たる作業として、菅原コレクションのうち新聞紙にはさまれたままだった1950、60年代採集の標本をA3サイズ二つ折り台紙に

貼り、菅原の樺太標本や塚本コレクションを含めて函博所蔵であることを示す手書きラベル（函博ラベル、写真1）の貼付と博物館資料登録、エクセルへのデータ入力が行われた。函博ラベルの内容は科和名、種和名、採集地、採集日、採集者名、収集者が付した整理番号で、ラベル下部に市立函館博物館と印刷されている。採集者欄は、菅原、塚本、山本と考えられたものは空欄である。塚本、山本採集のものはラベルの右下隅にイニシャルが記入されている（写真1）が、菅原のものは何も記されていないのは目録の記載と同じである。この時の整理の結果は菅原・塚本コレクション合計で10,040点<sup>(3)</sup>であった。両コレクションについては、目録刊行後に発見されたものも存

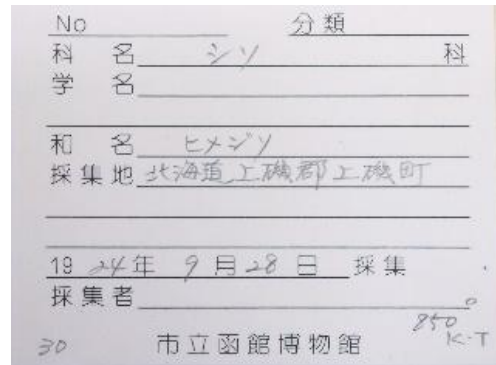


写真1. 函博ラベル データは最小限で右下のK.Tは塚本角次郎を表している。

在しており、令和6年度まで適宜博物館資料として追加登録されている。（表2）

その他のコレクションについては、台紙に貼られ、オリジナルラベルが貼付された状態（寄贈された時の状態）のままコレクションごとに保管されていた。これらは登録番号を付してエクセルヘデータを入力し、撮影して博物館資料として新規登録した。博物館資料として登録されていなかった一部のコレクションは、台紙に貼られていない寄贈された状態のまま保管されていたが、その点数は多くはなかった。

### 2-3. 今回の整理前の標本の状態

標本の状態はコレクションにより、また菅原コレクションでは採集年代により異なっていた。

菅原コレクションは大きく分けると1930年代を中心とした樺太標本、1950年以降を中心とした北海道標本、1960年代の本州標本がある。樺太標本の大部分は菅原の手によって整理されたと思われ、A3台紙に貼られ、手書きのオリジナルラベルを貼付されていた。台紙に傷みがあるものや、虫害により植物がほぼなくなったもの、粉碎されたものもあったが、概ね良好な保存状

態であった。1996年までの整理作業で函博ラベルを貼ったA3二つ折り台紙の間にオリジナル台紙が挟みこまれていた。一方、北海道標本と本州標本は台紙に貼られることなく新聞紙に挟んだまま寄贈されたらしく、オリジナルラベルもほとんど添付されていなかった。1996年までの整理作業ではA3二つ折り台紙に貼られ、函博ラベルが貼られたうえで、多くは元の新聞紙に挟みこまれていた。これらの標本は虫害もほとんどなく良好な保存状態であった。

塚本コレクションは大別して塚本、山本が採集した標本と彼ら以外の採集による標本がある。塚本、山本が採集した標本は筆跡から主に塚本が整理したようで、A3台紙に貼られ、ほとんどは手書きまたは英字スタンプによるオリジナルラベルが貼られていた。ラベル内容は、整理番号、同定者名、科名（ないものも多い）、種名（学名または和名）、採集地、採集日、採集者名で、記載は英語・ラテン語が多いが日本語、各言語混合など様々であった。古いものは100年以上を経過しているが、虫害も少なく、良好な保存状態であった。

点数が多い菅原、塚本コレクションはおおよそ科ごとにまとめられ、さらに100～200点程度を一束にして紐で縛られ、専用

表2. 蔵品目録刊行以降に資料登録されたコレクション一覧（2026年3月現在）

資料名	資料番号	資料件数	資料点数	概要	経過
森武コレクション海藻標本	S62-0059-001 ～S62-0059-130	130	169	森武寅雄が函館湾沿岸等で採取した標本等。	1987年受入、2023年資料整理・変更登録。
森武コレクション植物標本	S62-0060-001 ～S62-0060-123	123	142	森武寅雄が北海道で採集した標本等。	1987年受入、2023年資料整理・変更登録。
森武寅雄研究資料	H28-0077-001 ～H28-0077-005	19	19	森武寅雄旧蔵の書籍類、標本収納箱、その他関連資料。	1987年受入、2017年資料登録、2023年資料整理・変更登録。
菅原繁蔵研究資料	H28-0078	1	1	菅原繁蔵旧蔵の日記、研究書、その他関連資料一括。	1969年受入、2017年資料登録、2023年資料整理。
市立函館図書館旧蔵植物標本	R05-0082-001 ～R05-0082-008	406	406	市立函館図書館から移管された標本等。	受入経緯不明、2023年資料整理・資料登録。
市立函館図書館旧蔵海藻標本	R05-0082-009 ～R05-0082-010	118	118	市立函館図書館から移管された標本等。	受入経緯不明、2023年資料整理・資料登録。
菅原コレクション植物標本	R05-0091-001 ～R05-0091-255	255	255	菅原繁蔵が樺太・北海道・山形県で採集した標本等。	1969年受入、2023年資料整理・資料登録。
菅原コレクション植物標本	R06-0040-001 ～R06-0040-060	60	60	菅原繁蔵が樺太・北海道・山形県で採集した標本等。	1969年受入、2024年資料整理・資料登録。
塚本コレクション植物標本	R06-0041-001 ～R06-0041-141	141	141	塚本角次郎が函館市内やその近郊、大雪山で採集した標本等。	1980年代市立函館図書館移管、2024年資料整理・資料登録。
塚本コレクション植物標本	R06-0194-001 ～R06-0194-013	13	13	塚本角次郎が函館市内やその近郊で採集した標本。	2024年函館市中央図書館移管・資料登録。
塚本コレクション海藻標本	R06-0195-001 ～R06-0195-002	2	2	塚本角次郎が函館市大森浜で採集した標本。	1980年代市立函館図書館移管、2024年資料整理・資料登録。
市立函館博物館旧蔵植物標本	R07-0004-001 ～R07-0004-016	16	16	菅原コレクション5点、塚本コレクション5点、函博職員採集5点、その他1点。	2024年資料整理で見、資料登録。

1, 284 1, 342

の標本棚もしくは段ボール箱の中に保管されていた。

その他のコレクションは、A3 かそれよりも小さな台紙に貼られ、オリジナルラベルが貼られていた。舟根コレクションだけは A3 よりも大きな台紙に貼られており、松本コレクションは A4 程度の和綴じ冊子となっていた。これらのコレクションも保存状態は良好であり、コレクションごとに保存箱などに保管されていた。

函博標本は閲覧に適した保管状態ではなかったが、全体として破損や虫害が少なく、乾燥状態が保たれたきれいな標本群であると評価できる。

#### 2-4. 今回の整理の概要

標本整理作業は 2023 年 5 月に始め、終了したのは 2025 年 3 月であった。概ね 10 日/月のペースで 7 時間/日程度の作業を行った。この間、直接の作業は新田 1 人で行い、大矢が情報収集や資料登録などを行った。

函博には植物標本の扱いに精通した学芸員が配置されていないため、最終的な収蔵形態は目的の標本が誰にでも見つけやすいよう、標本のエクセルデータを整備したうえで全標本を標本棚にオープンな形で分類順に配架することとした。標本検索のキーとして函博の登録番号と学名が記入されたラベルを貼ることが必要なため、既に作成されていたエクセルデータを加工して新造ラベル(写真 2)を作成した。ラベルの内容は、函博の収蔵標本であることを示す Herbarium of Hakodate City Museum のタイトルの下に、登録番号、科名(和名、学名)、種和名、種学名、採集地、標高(一部のみ)、採集日、採集者、個人の整理番号、備考とした。右下には、ラベル作成情報として作成者の名前: 新田紀敏とプリント時の西暦年を記し、整理作業を行った年

代がわかるようにした。整理後の収蔵には、幸い 1 万余点を配架するのに十分なスペースがある既存の標本棚を用いた。

台紙まで原形をとどめないほどに傷んだ標本が稀にあり、研究資料としての用をなさないことと、虫菌害の拡大防止を考慮して廃棄したが、虫害で台紙のみの状態に近くなったものも不明データの類推に役立つ可能性を考えて保管した。



写真 2. 新造ラベル 学名が入り、登録番号と個人番号の関係も分かるようになった。

#### 2-4-1. 菅原コレクションの整理手順

整理の手順はコレクションにより保管形態が異なるため、コレクションごとに述べる。菅原コレクションは点数の多さと梱包の厳重さ、データの不備によって整理に最も時間を要した。まず保管状態であるが、段ボール箱、荷造り紐、包装紙、まとまりごとの荷造り紐、標本作成時の新聞紙、二つ折り台紙の表紙、保護用グラシン紙、一部は花などの部分を保護しているグラシン紙と最大 8 重のバリアを取り除かないと標本を見ることができない状態だった。梱包も科で分けられていたようであったが、順序は乱れており端から開いて確認していくという作業になった。

菅原コレクションの整理で梱包の厳重さ以上に大きな障害になったのは、北海道・本州標本のオリジナルラベル(データ)がほとんどないことである。菅原自ら台紙に貼り整理された状態の樺太標本(写真 3)



写真3. 菅原繁蔵の樺太標本 菅原自身が貼付したと思われる。左下が菅原のオリジナルラベル。

から察すると、菅原は、標本を台紙に貼り、整理ができた段階で初めてラベルを作成し貼っていたようで、整理前の標本にはほぼラベルが添付されていない。この点については、菅原がヤナギの同定を東北大学の木村有香に依頼した際、木村が返信で標本1点ずつにラベルを添付するよう助言している。しかしこの点は最後まで改められることはなく、のみならず菅原の指導を受けて標本を送っていた協力者たちも、オリジナルラベルやラベル作成に十分な記録を付しておらず、結果として採集データ不備の標本が多くある。また、採集データは新聞紙上に様々な形でメモされているが、省略などにより不正確で字も読みにくい（新田 2025b）、1996年までの整理では新聞紙上にデータが書かれているにもかかわらず、不明と記録された事項が多く見られた。今回の整理では、極力注意深くメモを読み取ってラベルに反映するとともに、文字、意味が不明な書き込みや分類の解釈などを示すような書き込みは切り取って台紙に貼付した（写真4）。また、菅原は新聞紙を再利用していることがあるため、1枚の新聞紙に新旧2つ以上の書き込みがあり、その標

本を指するのがどちらの書き込みであるか判然としないこともあった（写真5）ので細心の注意を払った。一部の新聞紙は整理過程ですでに廃棄されていたため、判読できない、気が付かないがために失われたオリジナルデータがあったであろうことは残念であった。菅原の標本データは、採集地、採集日を欠いているものが多い。これは、いずれか片方がわかっているならば、日記等から菅原の行動を調べることによって判明するものも多かった。そこで、函博に残されている日記、手紙、採集記録等の菅原繁蔵研究資料から年譜を作成し、一方のデータが欠けたものは年譜と照合して特定してい

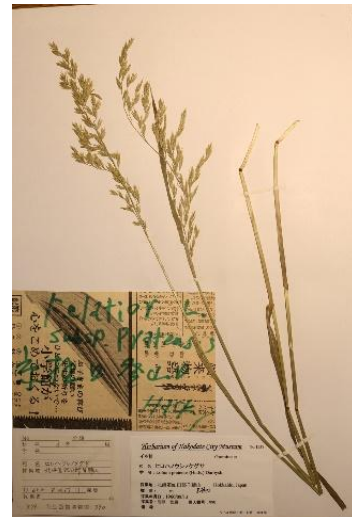


写真4. 新聞メモの貼付け 学名が書かれていると分類の考え方がわかるが、多くはない。



写真5. 新聞紙使い回しの例 黒字で1963.5.24 スズメノヒエ 大森山と書かれているが、裏側に赤字で1962.7.31 鳥海山 オオバノヤエムグラと書かれているの見える。

った。菅原は各地の採集者から送られてきた標本が誰の採集かほとんど記録していない。前述のようにオリジナルラベルもほとんど付されていないため、採集者を知る手掛かりは少ない。しかし、ある採集者は特定の時期に特定の地域で採集した標本を送っていたことが新聞紙に残されたメモから判明したため、年譜から菅原が行っていたはずのない採集地、採集日の標本は、その時期、その地域の標本を多数送っていた採集者のものであると推定した。なお、少数ではあるが標本が紛失し、新聞紙または貼った跡のない台紙のみが残されていることがあった。その場合は新聞紙や台紙のみを標本同様に保存した。

具体的な整理作業の手順は、以下のとおりである。標本棚（写真6）または段ボール箱に入った標本を取り出し（写真7）、紐を解いて包装紙をめくると再びいくつかの科毎に括られているのでその紐を解いた。新聞紙の書き込みを確認しながらめくるとA2を二つ折りにした台紙が現れる（写真8）。樺太標本は新聞紙はなく、菅原が貼付したと思われるオリジナル台紙が二つ折り台紙に挟まれただけなのでオリジナル台紙を取り出し、二つ折り台紙に貼られた函博ラベルをはがして、新造ラベルとともにオリジナル台紙に貼付した。北海道・本州標本は、中の状態を簡単に確認して表紙を切断し、グラシン紙を取り除いた（写真9）。



写真6. 今回整理前の菅原・塚本コレクション



写真7. 整理前の標本の包み

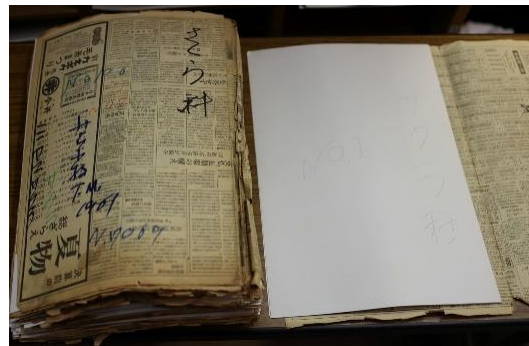


写真8. 台紙が新聞紙に挟まれた状態（左）とそれをめくった状態（右）



写真9. 表紙とグラシン紙を切り取った状態

種名や採集場所、採集日、個人の整理番号を頼りに目録から標本を特定し、新造ラベルを貼付した。同時に保存が必要と考えたメモを切り取って貼付した。この時、明

らかに整理時の間違いにより標本とデータが合致しない場合は新造ラベルとデータを修正した。

#### 2-4-2. その他のコレクションの整理手順

塚本コレクションの保管状態は菅原コレクションの樺太標本とほぼ同じであった。梱包を解くと新聞紙に挟まれていたが、新聞紙上のメモはほぼなく、データはオリジナルラベルないしは小紙片に書き込んで貼付されていた。一部の標本ではラベルの裏にも書き込みがあった。点数は多いが整理状態が良いため、多くは目録から標本を特定し、二つ折り台紙からはがした函博ラベルと新造ラベルをオリジナル台紙に貼付するだけであった。

舟根コレクションは最大 A2 という大型台紙に貼られている点で特異であった。しかし、多くは余白が大きく、周囲を切り取る、または A3 台紙に貼り替えることで配架可能であった。

松本コレクションは通常の標本とは異なり、「昭和 19 年 7 月採取 北千島植物集 陸軍上等兵松本勝美」と書かれた表紙の付いた和綴りの冊子になっていた。各ページには 1~数種の植物が貼られ、説明は何もなかった。また同じ植物が複数のページに貼られている場合もあったが、その意図は不明である。おそらく任地はパラムシル島であり、その周辺で採集されたものと思われる。このコレクションの扱いを函館市教育委員会内で協議した結果、同定が可能で採集データもほぼそろっていることから通常の標本として扱うこととし、現状を画像データとして残した後、植物を種ごとに別台紙に貼り直して新造ラベルを貼付した。

その他のコレクションはラベルが添付されており、補足できるデータもなかったことから新造ラベルの貼付のみを行った。

#### 2-4-3. 共通作業内容

全コレクションに共通した作業として、紙テープが剥がれた、あるいは植物が断片化するなどで台紙からはがれた標本は適宜標本貼付け器を使って補修し、破片は小袋などに入れて貼付した。台紙に 2 種以上の植物が貼られていた標本があり、意図して貼られたもの、誤同定で同種と考えられたもの、採集時に混入したものがあつたが、標本として保存する価値があると判断したものは別台紙に移して 1 点とした。作業全体を通して分類の間違いを発見した場合は逐次アノテーションカード<sup>(4)</sup>を付して訂正した。分類が困難な一部の標本は分類群毎の専門研究者等に依頼して同定した。分類は基本的に大橋他編(2015-2017)を参照し、学名も原則これに従った。樺太産の植物については高橋(2024)を参照した。また、必要に応じて北海道大学総合博物館標本庫(以下 SAPS とする)所蔵の標本との照合を行った。学名・和名の確認にはウェブサイト、米倉浩司・梶田忠(2003-)「BG Plants 和名 - 学名インデックス」(YList), <http://ylist.info> および Board of Trustees of the Royal Botanic Gardens, Kew, Plants of the World Online, <https://powo.science.kew.org> を参照した(2023~2024年にアクセス)。

完成した標本は扱いやすさを考えて OPP フィルム製の保存袋へ入れた。配架は科名・属名を記したカバーを作成して学名アルファベット順にカバーに挟み、科は APG 分類順、属はアルファベット順に配列して標本棚へ収納した(写真 10・11)。棚には科名(和名、学名)を表記した見出しを挟み、見出しとカバーの科名の前には松井・高橋(2015)で用いられている整理番号を付して、科の APG 配列がわからなくても間違いなく標本を出し入れしやすいよう配慮した。



写真 10. ジーナスカバーに収納された標本



写真 11. 整理後配架された標本棚

### 3. 菅原コレクション

#### 3-1. 菅原繁蔵のライフヒストリー

本項においては、函博標本の約 78% を占める菅原コレクションの特徴等について述べるが、それに先立ち、菅原コレクションの旧蔵者である菅原繁蔵（1876～1967）のライフヒストリーについて記載する。菅原のライフヒストリーについては宗像（1998）においてその概要が紹介されているが、菅原の記憶を元にした聞き取り調査に基づくために情報が十分ではないのはもとより、事実誤認や前後関係の逆転等の誤りが各所に散見される<sup>(5)</sup>。菅原のライフヒストリーはその調査・研究動向にも直結することから、本稿に係る調査<sup>(6)</sup>で明らかになった事実等を元に、以下に述べる。

##### 3-1-1. 出生から北海道移住まで

菅原繁蔵は 1876 年 7 月 17 日、山形県北村山郡沢渡村（現在の山形県東根市泉郷）

で菅原保蔵・テツ夫婦の長男として出生した。1883 年 3 月に山形県北村山郡白川尋常小学校に入学し、1889 年 7 月 16 日に同校を卒業した後、東根尋常高等小学校に進学して 1891 年 7 月 25 日に同校を卒業した。高等小学校卒業後に白水尋常小学校で「授業傭」（無資格教員）として働き始めた菅原は、野川尋常小学校や本道寺尋常小学校で授業傭や準訓導として勤務した後、1898 年 12 月 23 日に教員免許を取得してからは「訓導」として児童の教育に当たった。この本道寺尋常小学校勤務時（1898 年～1899 年）にモウセンゴケを発見した経験から、菅原は植物への興味を深めたという。菅原はその後も山形県内で谷地尋常高等小学校尋常科、東根尋常高等小学校尋常科で訓導を務めるが 1901 年 4 月 15 日に依願退職し、一家で北海道紋別郡湧別村（現湧別町）に移住する。

なお湧別村移住のきっかけについてはこれまで、現地での薄荷栽培従事のためとされていたが、菅原自身は移住直後の 1901 年 5 月 1 日に湧別尋常小学校代用教員（無資格教員）として辞令を受け、同年 6 月 28 日には北海道における尋常小学校本科正教員の免許も取得していることから、当初薄荷栽培にはもっぱら父保蔵が従事していたものと考えられる。

##### 3-1-2. 北海道時代から樺太移住まで

湧別村移住後、前述の通り菅原は再度教員として働き始め、1902 年 5 月 17 日からは紋別尋常高等小学校で訓導として勤務したが、1903 年 2 月 27 日に依願退職している。そして 1905 年に一家は苫前郡羽幌村（現羽幌町）に転居し、再度薄荷栽培に従事したようである。このときには菅原も家族とともに薄荷栽培に専念したようで、1905 年 9 月には「北洋子」というペンネームで『薄荷栽培及製造法』という書籍を出

版している。その一方で1908年3月31日から1909年2月12日までは、一級町村制施行を控えた羽幌村役場から頼まれ、役場の書記として一時的に勤務した記録も残っている。

1909年3月31日、菅原は三度教員としての辞令を受け、上築別教育所（羽幌村）の代用教員を務め始めた。1909年9月6日からは似軽巣教育所（羽幌村）、1912年4月31日からは安平志内尋常小学校（中川郡中川村、現在の中川町）で代用教員を務める間（1911年10月から1912年3月まで一時的に札幌区中央創成尋常高等小学校で代用教員）、北海道内各地の教育会で講習を受けてキャリアアップし、1912年7月6日付けで安平志内尋常小学校訓導兼校長となった。この安平志内尋常小学校在籍時（写真12）に菅原の植物研究への情熱が高まったようであり、1915年の菅原の記録には「植物採集ノ趣味益々高潮」と書かれている。1918年8月には旧制上川中学校の教師であった小泉秀雄と地元中川村の植物採集調査を行い<sup>(7)</sup>、個人としても稚内や札幌までも足を運ぶとともに、遠く富士山でも植物を採集している。



写真12. 1915年安平志内尋常小学校校舎改築記念写真(前列左から2人目菅原繁蔵)

菅原は1917年11月21日から安平志内実業補習学校校長を兼務し、1902年7月に結婚していた妻すえも同日付けで同校代用教員として勤務しており、一家で地域の教育

に尽力していた。菅原は樺太に職を得て1921年3月に教職を辞すが、このときに安平志内住民一同から感謝状（写真13）が贈られている。

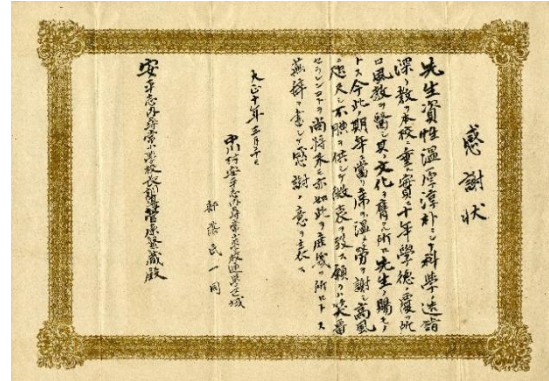


写真13. 1921年3月20日付けの感謝状

### 3-1-3. 樺太時代から本州引き揚げまで

1921年5月19日、菅原は樺太庁出向の辞令を受け、同年6月2日から樺太公立深草尋常小学校に校長として赴任した。翌年から早速夏季休業を利用して樺太各地で植物採集に着手し、豊原町（現在のサハリン州ユジノサハリンスク市）郊外で発見したエフデタンポポとオクエゾガラガラは宮部金吾によって学会に報告された。また樺太各地の講習会で講師を務めるとともに、1925年10月に樺太日日新聞に「日本海の孤島海馬島の高山植物に就て」を連載、1926年に野田教育会から『尋常小学校理科書に於ける植物教材の郷土科研究』を刊行するなど、教育者のみならずいよいよ研究者としての側面も発露していく。（写真14）

1928年、豊原第一尋常高等小学校の訓導であった菅原は、樺太庁博物館の委員嘱託を受ける。以降、樺太庁博物館事務嘱託（1931年4月～）や樺太庁博物館主事兼学芸主事（1939年5月～、写真15）、樺太庁師範学校教授嘱託（1939年6月～）など立場は変化しつつも、植物標本の採集や各種論文の執筆を進めるなど、充実した研究生を送った。なかでも1937年12月から



写真 14. 1926 年 3 月 24 日撮影家族写真  
(前列中央菅原繁蔵)



写真 15. 樺太庁博物館時代の菅原繁蔵 (右端)

1940 年 11 月にかけて刊行した大著『樺太植物図誌』全 4 巻は高い評価を受け、「北海道樺太の文化に貢献すること大なり」として 1941 年 4 月 18 日に北海タイムス文化賞 (写真 16) を受賞している。

菅原の約 20 年にわたる樺太時代に積み上げた成果は大きかったが、プライベートでは立て続けに不幸に見舞われた。幼いころから菅原の理解者であった母テツが 1924 年 1 月に、長女倫子が 1930 年 11 月に、糟糠の妻であるすえが 1944 年 1 月にこの世を去った。そして戦局も深まり 1944 年 2 月に職を辞した菅原は、自ら収集した植物標本約 15,000 点を樺太庁博物館に託し、神奈川県に住む長男憲光宅に身を寄せ

た。この時菅原は 68 歳であった。

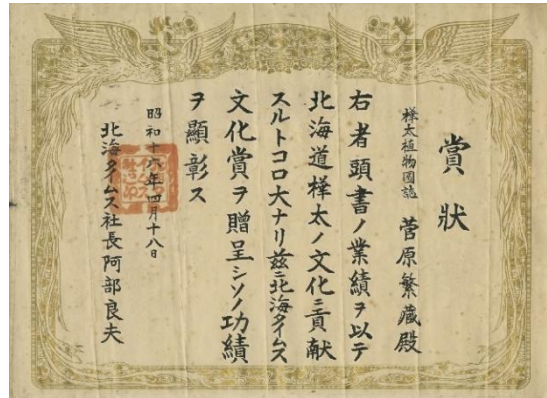


写真 16. 北海タイムス文化賞の賞状

### 3-1-4. 北海道から山形へ転居、死去まで

菅原は長男宅に一時的に身を寄せた後、北海道檜山郡江差町に転居し、1945 年 6 月 15 日付けで旧制江差中学校嘱託教師の辞令を受けた。そして 1948 年 4 月の学制改正後も新制江差高等学校で講師として引き続き勤務し、1949 年 9 月 1 日には高等学校教員臨時免許状 (理科) を授与されている。また同校在勤中には、約 5,000 点の植物標本を同校に寄贈した。

菅原は 1951 年 8 月 1 日に文部省から文部教官に任命され、1951 年 9 月 1 日付で北海道学芸大学 (現在の北海道教育大学教育学部函館校) 講師に任じられた。同学では学生の指導のかたわら植物研究を継続し (写真 17)、その成果を日本植物学会等で発表するとともに、地元函館では 1953 年 6 月に函館植物研究会を立ち上げ、学習会で



写真 17. 渡島大島で植物調査を行う菅原繁蔵  
(1952 年 7 月撮影)

の普及啓発や報告書の刊行等を積極的に行った。菅原は1956年12月31日付けで北海道学芸大学を退職するが、自ら採集した標本類約24,000点を同校に寄贈し、また自らの植物研究を総括する『樺太の植物 総括篇』(1956年)や『北海道植物銘鑑』(1958年)等の重要な成果を函館植物研究会から刊行した。これらの成果により菅原は1958年10月3日に函館市文化賞(写真18)を、1959年11月3日には北海道文化奨励賞(写真19)を受賞し、これを区切りとして同月8日に故郷である山形県東根市に転居していった。<sup>(8)</sup>

山形県転居後も菅原は山形県内で精力的に植物採集を継続し、時には北海道の羊蹄山や日高地方、青森県の岩木山にも足を延ばしている。菅原は1967年7月に満91歳でこの世を去るが、函博所蔵菅原コレクションで採集年代のわかる最後の標本は1966年7月31日に山形県東根市大森山で採集されたナンブアザミであり、卒寿を迎えても衰えを知らなかった菅原の植物に対する強い熱意を感じさせられる。

### 3-2. 菅原コレクションについて

函博所蔵の菅原コレクションは、菅原繁蔵没後の1969年に遺族の菅原憲明氏によって寄贈された9,000点を超える標本群である。この中には菅原自身が採集したものが6,300点ほど含まれている。標本産地は北海道4,520点、本州3,392点、樺太577

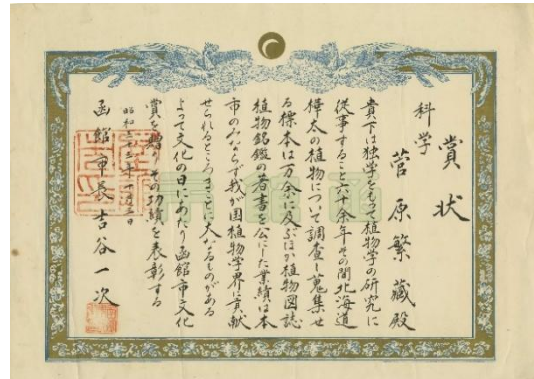


写真18. 函館市文化賞の賞状

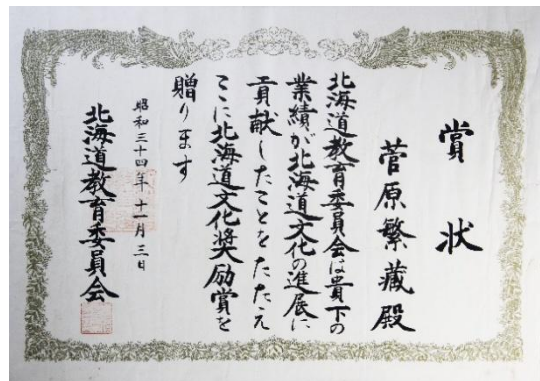


写真19. 北海道文化奨励賞の賞状

点などである(表3)。コレクションには菌類やコケ類がわずかに含まれるが、ここでは維管束植物についてのみ触れる。

#### 3-2-1. 年代別の採集地

同コレクションに含まれる標本は1891年から1964年にわたる期間に採集された。菅原自身の採集では1918年6月20日、42歳の時に道北の中川村で採集したミヤマジュズスゲが最も古く、最後は1965年7月30日、89歳の時に山形県東根市大森山で採

表3. 菅原コレクションの年代別、採集地別内訳

時代区分	採集地					合計
	北海道	樺太	本州	千島	不明	
羽幌・中川時代 (1909~1921)	4					4
樺太時代 (1922~1944)	57	577		2		636
江差時代 (1945~1951)	93					93
函館時代 (1952~1959)	2,460		39			2,499
山形時代 (1960~1963)	1,153		3,353			4,506
年代不明	753				647	1,400
合計	4,520	577	3,392	2	647	9,138

※居住地により時代区分とし、採集地が不明な標本は時代区分を分けていない。

集したトラノオシダ 1 点、そして前述した 1966 年、90 歳の時のナンブアザミ 1 点である。同コレクションは採集時期により 3 大別されると前述したが、加えるならば樺太へ渡る前の羽幌・中川村時代のものがわずかにある。さらに 1940、50 年代を居住地により江差時代と函館時代に分けると標本点数は表 3 のとおりである。データ不明な標本も多く、採集地、採集年は推定を含むため概数である。多くはないが譲り受けたと思われる時代区分に合わない標本を含ん

でいるが、状況から考えて入手したと考えられる時代に整理している。樺太時代のものは、新分類群の研究等で最後まで手元に置いた標本と、各地で寄贈した標本の残りと思われる。江差時代の標本があるが、これも大部分は生前に大学などに寄贈したとのこと（宗像 1998）なので、未整理標本など菅原の手元に残っていたものと思われる。標本の点数が増えるのは、函館へ転居し 77 歳になる 1952 年以降である。この時期以降の採集旅行等の主なものを表 4 にまとめた。

表 4. 菅原繁蔵の主な採集旅行（講演や学会出席を含む）

年月	主な行先など
1950年	この年はあまり出歩していない
7~8月	瀬棚→狩場山→余市→札幌→ニセコ→熊石
1951年	この年は利尻調査以外目立ったものはない
7~8月	利尻（34日間）
1952年	この年は函館、八雲方面へも出かけている
6月	渡島大島
7月	渡島小島→渡島大島
8月	奥尻島（18日間）
1953年	この年函館方面に出かけているが通院が多く体調がすぐれなかったかもしれない
1954年	この年函館周辺の調査は少ない
4月	渡島大島
5月	渡島小島2回
7月	長万部→瀬棚→狩場山
7月	妹背牛→礼文→利尻→下川
10~11月	京都→金沢→秋田
1955年	この年道南では函館山、大沼、江差へ数回出向いている
7~8月	北湯沢→伊達→室蘭→倶知安→羊蹄山→天売（12日間）→焼尻（7日間）→羽幌→北湯沢
10月	広島→下関→出雲→鳥取→京都→名古屋
1956年	この年道南では函館山や大沼へわずかに行った程度
7月	札幌→芦別→芽室→釧路→根室→網走→襟裳岬→様似
8月	東京→三浦半島
8~9月	長万部→余市→札幌→芽室→釧路→長万部
9月	奥尻島
1957年	この年道南では函館、大沼方面へ何度か出かけている
9月	遠軽→佐呂間→湧別→帯広→小樽
1958年	この年江差へ数回、松前、駒ヶ岳、戸井などへ出向いている
5~6月	札幌→帯広→釧路→芽室→札幌→倶知安
7月	静内→浦河→平取
8月	帯広→湧洞沼
9月	瀬棚→札幌
10月	山形県東根市→仙台
1959年	この年駒ヶ岳など道南地域で活発に調査を行っている
5~6月	東京→山形（家探し）
7~8月	駒ヶ岳→美唄→浦河→アポイ岳→襟裳岬→本別→帯広→大津→羅臼岳→清水→札幌
10月	名寄→喜茂別→長万部
11月7日	夜、大雪丸で函館を離れ、翌日山形県東根市へ転居
1960年	この年春、東根市の若木山へ頻繁に出かけている
7月	森→千歳→札幌→小樽→札幌→森
8月	喜茂別→比羅夫、喜茂別、京極、真狩から羊蹄山へ登る→中山峠→倶知安
1961年	この年東根市大森山、天竜市舞鶴公園に数回出向いている
7月	山形県米沢市白布高湯温泉→新高湯→西吾妻→硫黄岳
1962年	この年東根市、天童市などで活発に採集を行っている
7月	函館→長万部→苫小牧→利尻→礼文→天塩→佐久→下川→士別
8月	鳥海山
1963年	この年東根市、天童市などで採集を行っている
8月	青森県岩木山

体調がすぐれなかった年もあったようだが、70、80歳代という高齢にもかかわらず、当時各地を結んでいた夜行列車を多用したかなりの強行軍で精力的に各地を回っていたことがわかる。特に山形時代は自由な時間が増えたためか、本州のみならず北海道でも多数の標本を採集している。

### 3-2-2. 標本の採集者

菅原の元には共同研究者や大学の教え子、各地の講演会や採集会で交流があった人など多くの採集者が寄贈や同定依頼などで標本を送っている。多くの方は1～数点にとどまり、人数も多いので確認が困難であった採集者もあったが、多くの標本を送っていた採集者もおそらく確認できる限りで表5にまとめた。本州産、樺太産標本はほとんどが菅原本人の採集であり、水島正美との交換標本が目立つ程度である。それに対して北海道産標本は多数の標本を送っている採集者を確認できた。しかし、菅原は採集者をしっかりと記録しておらず、表5は確認できた範囲の数字であり、確認しきれなかったものがあるとすれば菅原の数字に含まれている。

標本点数が最も多い採集者は菅原自身であるが、北海道産標本に限っては2,410点

で53%に過ぎず、それほど多くない印象である。

菅原以外で最も点数が多い森本忠夫(1,033点)は、菅原と同じく樺太で教鞭をとりながら植物を研究していた昔からの仲間だったようであり、海馬島産の標本が1点ある。新聞紙上のメモで主にT. M.と書かれ(写真20)、まれに森本または森本忠夫と書かれている。戦後日高管内で教職に復帰し、様似町のピンネシリ岳の麓にある小学校の校長時代に盛んに植物調査を行っていた(高橋誼氏からの私信)。確認できる範囲では1950～58年に様似町を中心とした日高地方で採集をしている。菅原の住所録によると、退職後は苫小牧に移り、活動の場も苫小牧周辺になったようである。1961年には苫小牧市で採集した454点の標本が確認できた。菅原との直接の交流もあったようで、函館を訪れたり採集旅行に同行したりしていたことが菅原の日記や標本ラベル(写真21)からわかる。菅原も1956年7月には森本の居所である様似町新富へ足を延ばしている。

次に点数が多い高橋誼(318点)は、菅原が教えた最終期の北海道学芸大学函館分校の卒業生で、日高管内で中学校教師となり1959年以降標本を送り始めた。その年8月のアポイ岳・襟裳岬(高橋氏私信)や1962

表5. 菅原コレクションの採集者内訳

採集者	標本点数		
	北海道産	本州産	樺太
菅原繁蔵	2,410	3,301	576
森本忠夫	1,032		1
高橋誼	318		
小松泰造	267		
中村力男	158		
三島初枝	29	1	
蛭田浅之介	20		
水島交換標本		54	
その他	64	35	
特定できず*	96		
不明	126	1	
合計	4,520	3,392	577

\*森本または高橋の可能性が高いが、菅原である可能性も捨てきれなかったもの。



写真20. 森本忠夫採集の標本が挟まれた新聞紙中央付近に緑色の文字で「T. M.」の書き込みが見える

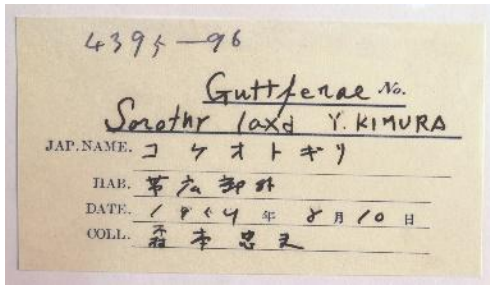


写真 21. 菅原による森本採集標本のラベル場所と日付から菅原の採集旅行に同行していたことがわかる

年の鳥海山調査に同行している（高橋 1968）。新聞紙上のメモで主に T. または富川 T. と書かれており（写真 22）、そのほかに高橋誼、高橋、高なども書かれている。同氏は現在も日高町富川に住まれ、植物調査も続けておられる。

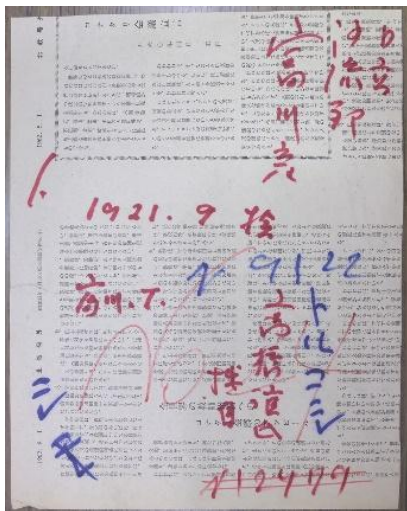


写真 22. 高橋誼採集の標本が挟まれた新聞紙上部に「日高沙流郡富川産」、中央の数字は意味不明、中央やや下に「富川 T.」、中央下に「高橋誼氏採集」と書かれている

小松泰造は函館山植物誌の共著者で 267 点が確認できた。1952 年 8 月 15 日採集の標本を挟んでいた新聞紙に、1 類 2 年小松泰造と書かれていたことから、当時の北海道学芸大学函館分校 2 年生の時には菅原の指導を受けて採集を始めていたことがわかる。1954 年まで菅原とともに函館山を中心に標本を採集している。新聞紙上に小さく「小」と書かれていることが多く（写真 23）

確認しづらかったが、独特のこよりが巻かれているものも多かった。確認できなかったものは菅原の採集として整理したが、函館山の標本で小松の採集したものはもっと多いのかもしれない。1955 年からは芦別市に居を移し、芦別岳などで標本を採集している。菅原は 1956 年 7 月に芦別市の小松を訪ね、芦別方面の植物調査も行っている。

中村力男は菅原の娘婿で、樺太から引き揚げた後、天塩町に住んで植物の研究をしていたようである。1961 年から 62 年春にかけて主に天塩地方で採集した標本が 158 点ある。1962 年の利尻調査に同行しており、この時の標本が残っている。この採集旅行の帰路に菅原は天塩町の中村の元を訪問している。



写真 23. 小松泰造採集の標本が挟まれた新聞紙中央右側に小松と書かれているが「小」だけのことも多い

このほかに江差産の標本に板谷という名前が見られ、江差町の小学校教諭で 1977 年に小冊子「桧山地方の植物」をまとめた板谷等と思われる。また、1958 年静内町産およびアポイ岳産の標本に蛭田と確認できるものが 20 点認められた。北海道大学植物園標本庫（以下 SAPT とする）菅原コレクションの樺太産標本に蛭田浅之助という採集者名が見られることから、樺太時代からの研究仲間の可能性がある。このように多くの名前が不完全な形で書き込まれているが、ほとんどは特定することができなかった。

### 3-2-3. 標本の詳しい採集地

樺太産標本の採集地は大泊郡 (336 点) が過半を占め、続いて多い順に留多加郡 (38 点)、敷香郡 (32 点)、豊原市・豊原郡 (28 点)、富内郡 (25 点) であった。

本州産標本の採集地は山形県内が 3,058 点と大部分であり、居住地周辺の東根市 (1,259 点) と天童市 (1,096 点) が多くを占める。鳥海山は1度の採集旅行のみで342 点の標本が残っている。山形県以外では青森県が 164 点と多い。

北海道産標本の採集地は表 6 に示したように広範囲にわたる。菅原の活動拠点であった渡島半島地区が 1,253 点と多く、函館山 (328 点) を始めとした函館市内 (函館山以外は 226 点) や大沼・駒ヶ岳方面 (464 点) が多い。その他の地域では、森本や高橋の採集を反映して日高地方 (1,091 点) や苫小牧 (454 点) も多くなっている。かなりの日数をかけて調査している (表 3) 利尻・礼文 (397 点) と天売・焼尻 (323 点) も標本が多い。

表 6. 菅原コレクション北海道産標本群の採集地別内訳

採集地	標本点数
渡島・檜山地方	1,253
函館山	328
その他函館市内	226
七飯・大沼・駒ヶ岳	464
渡島大島・小島	94
江差	58
奥尻	26
その他	57
日高地方	1,091
苫小牧	454
利尻・礼文	397
天売・焼尻	323
天塩地方	149
芦別	104
羊蹄山	78
その他・不明	671
合計	4,520

### 3-2-4. 特徴的な分類群

1940 年代以降の菅原は、ある地域の植物を集中的に採集するというよりも、特定の

分類群を多数集める傾向がみられる。その典型がオトギリソウ類とオオバコ類である。

オトギリソウ類は 301 点と大量の標本があり、菅原の同定で 44 分類群が含まれる。その中には渡島大島産のオオシマオトギリ *Hypericum osimense* Sugawara nom. nud. が新分類群として記録されている (未発表)。そのほかにも和名新称のみで学名を与えていないものが 3 種類含まれている。標本の中には木村氏検定と書かれたものがあり、オトギリソウの研究で知られ、多くの記載種がある東京大学の木村陽二郎と交流があったようである。また、コケオトギリの共同研究者と思われる福島県の中学校教諭 T. Saito (齋藤知賢) の標本があるが、「久内理博検定」の書き込みがある。東邦大学教授の久内清隆とも交流があったのかもしれない。

オオバコ類も 107 点と大量の標本があり、菅原の同定で 11 分類群が含まれる。中には新分類群としてダルマオオバコ *Plantago ovatifolium* Sugawara nom. nud.、ダイオウオオバコ *P. grandibractscens* Sugawara nom. nud.、マルバオオバコ *P. yotundifolia* Sugawara nom. nud. が、またヤツマタオオバコの新組み合わせとして *P. asiatica* L. var. *polystachys* (Makino) Sugawara nom. nud. が記録されている (いずれも未発表)。オオバコ類については研究途上だったらしく、大学の研究者などと意見交換していた形跡は残っていなかった。<sup>(9)</sup>

### 3-3. 特記すべき標本

#### 3-3-1. SAPT 標本との比較から

菅原コレクションの大きな特徴として、577 点に及ぶ樺太の植物群が挙げられるが、樺太標本の多くは SAPT に収蔵されているため、SAPT 標本と函博標本の内容を比較した。SAPT 標本のデータは同植物園の中村剛准教授より提供を受けた。SAPT 標本は未整

理のものがあることからデータ化がされているシダ植物とイネ科計 953 点のデータから傾向を探った。

菅原の樺太標本はどちらの収蔵品も採集時期は 1927～40 年が大半を占める。しかし、SAPT 標本は 1933～35 年の 3 年間で 268 点と 30%を占めるのに対し、函博標本は 60 点と 11%に過ぎない。一方、函博標本は 1937～39 年の 3 年間で 466 点と 82%であるのに対し、SAPT 標本は 55 点と 6%に過ぎない。この採集時期の違いの理由はわからないが、函博標本に 334 点ある大泊郡産が SAPT 標本では 16 点しかないなど、採集地にも違いがある。イグサ科などに少数の重複標本があるものの、採集時期、採集地ともに異なるものが多く、函博の樺太標本は SAPT との重複標本ではなく、相補的な関係にあることが分かった。

道内産標本についても同様に比較した。SAPT の道内産標本は 1954 年以前の採集に限られることから、北海道学芸大学函館分校（当時）に寄贈された 1957 年時点で整理を終えていたものの大部分と考えられる。函博標本には少ない神奈川県在住時の 1945 年から江差へ、その後函館へ居を移した 1954 年にかけて採集した標本の多くが含まれているようである。函博の道内産標本は、1952 年以降採集のものが多いことから、ここでも両者は相補的な関係であった。

菅原コレクションには植物相報告の証拠標本と考えられるものを含んでいる。菅原と小松は『函館山植物誌』（1959）を著しているが、菅原が函館に居を移したのを機に函館山での採集を本格化した模様である。1951 年以前と確認できるものは 1 点しかないが、転居した 52 年に小松が採集に加わって 46 点、53 年 63 点、54 年 102 点とピークを迎え、57 年までで 270 点が確認できた。多くは菅原か小松の採集であろうが採集時期や採集者が不明な標本も存在し、

ほぼ 300 点が同植物誌の証拠標本と見なし得る。一方のデータ化された SAPT 標本で、産地が函館山と特定され、採集年が判明しているものを抽出すると、36%は 1952 年採集であり、その他の年は 2～15%の範囲にあった。しかし、1952～54 年の 3 年間で 59%を占めたことから函博標本と同様の機関に集中していた。今回は精査できなかったが、函館山植物誌の証拠標本に関しては、函博と SAPT で重複標本がある可能性が高いと推察される。函博の函館山産標本は函館山植物誌の掲載種数と比べかなり少ないが、証拠標本の多くは SAPT に収蔵されていると考えられる。

ここでは函博と SAPT に収蔵されている菅原コレクションの比較から、函博標本の位置づけの考察を試みたが、現状では SAPT 収蔵の菅原コレクションは整理が十分ではなかったために部分的なものとなった。今後 SAPT 標本の整理が進むことで菅原コレクションの全貌が明らかになり、本道における 20 世紀前半の代表的な植物研究者である菅原繁蔵に関する研究が進むことを期待する。

### 3-3-2. 収集者別の考察から

東藻琴村の三島初枝のオリジナルラベルが貼付された 1959 年採集の標本が 30 点ある。三島は当時の東藻琴高校校長の妻で、東藻琴村で植物調査をしていたようである。東藻琴村史編集委員会編（1972）は、三島が採集した 150 種の標本リストを第 3 節東藻琴の自然の項にある植物一覧表に引用したとしている。この引用と三島標本の間を比較したが、種構成は互いにかなり食い違いがあり、共通点は見出せず、証拠標本ではなかった。

また、前述のように森本忠夫が 1961 年に苫小牧で採集した標本が 454 点ある。菅原の記録によると、森本は苫小牧の植物相を



では、ミゾホオズキの中に現在知られている形態と異なる標本が見出されており、今後の研究に期待される。

## 追記

本稿執筆中の2025年9月12日付 Journal of Asia-Pacific Biodiversity オンライン版に、SAPS 収蔵の菅原繁蔵が採集した標本に基づいた新種、スガワラオウギ *Astragalus sugawarae* Kimura-Yokoyama & Shutoh が発表された (Kimura-Yokoyama and Shutoh in press)。この植物は、菅原がミヤマオウギとして発表したが、新種として認められていなかったもののひとつで、同種の標本が函博にも収蔵されており、論文にも引用されている。

## 謝辞

1962年の鳥海山行に同行するなど菅原の晩年を直接知る高橋誼氏には、菅原と標本に関するあらゆる教えを頂きました。

高橋英樹北海道大学名誉教授には、同定と菅原に関する情報でお世話になりました。北海道大学総合博物館の首藤光太郎助教には、同定と SAPS での標本閲覧で便宜を図っていただきました。北海道大学植物園の中村剛准教授には、SAPT での菅原標本の閲覧で便宜を図っていただきました。

北海道野生植物研究所の五十嵐博氏、北海道大学総合博物館の石川弘晃氏、佐藤利幸信州大学名誉教授、九州オープンユニバーシティーの佐藤広行博士、草花堂の藤田玲氏には、同定でお世話になりました。

美幌博物館の城坂結実学芸員、釧路市立博物館の加藤ゆき恵学芸員、元苫小牧市美術博物館学芸員の小玉愛子氏、えりも町教育委員会の中岡利泰課長には、採集者の情報をご教示頂きました。浦幌町立博物館の持田誠学芸員には、過去の利用経験から函博標本庫の収蔵状態についてご教示頂きま

した。

ここに記して感謝いたします。

## (脚注)

- (1) 最古の標本は T. Saito、1891 年採集のコケオトギリであるが、状況から菅原がコケオトギリの研究をしていた 1940 年代以降に入手したものと考えられる。
- (2) 函博標本には相当数の重複標本が含まれているが、記録の不備から重複標本を正確に確認することができないため、本稿における標本点数は重複標本を含んだ数である。
- (3) 重複標本を含めて 1 点とした。目録には 10, 103 番までデータが掲載されているが、63 の重複データがある。
- (4) ラベルや既に付加されていた情報には手を加えるべきではないので、オリジナルデータ等に対する注釈は小紙片に記して貼付する。主に、種の訂正やオリジナルデータに欠けている情報の付加に使われる。いつ、誰が付加した情報であるかも示される。
- (5) このことについて宗像 (1998) は「私が先生のご指導を得るようになったときのお年は既に 80 翁に近く、年代差もあり、また主なるご研究の場は樺太という今では遠い地でもあることから、その地での先生の歩みの事々は、時折の思い出ばなしで断片的にお聞きしたのみである。したがって記した内容には、まだまだ不備や不足が多いと考えられる。」(宗像 1998 : 8-9) としている。またその後刊行された市立函館博物館編 (2016) における菅原繁蔵の紹介は、宗像 (1998) をほぼそのまま踏襲している。
- (6) 主に平成 28 年度に博物館資料として登録した菅原繁蔵研究資料を元に、調査を実施した。同資料に含まれていた証明書類・辞令・賞状などの公的作成物および有印私文書などを最

も信頼性の高い情報として採用し、菅原繁蔵年表（菅原繁蔵がガリ刷りで作成した和綴の自作年表。1943年8月までの記載があり全体的にかなり詳細に書かれていることから、おそらく1943年9月からそう遅くない時期に作成されたものと考えられる）、履歴書・在職証明願（菅原繁蔵がガリ刷りで作成した一枚物の書類複数。それぞれで記載内容が部分的に異なり、公的作成物とも一部齟齬がある）をそれに次ぐものとして採用した。また、それらと矛盾しない範囲で宗像（1998）を補助的に採用した。

- (7) 函博所蔵の菅原繁蔵コレクションのなかで採集年代が明らかな標本のうち最も古いものは、1918年6月20日に中川村で採集されたミヤマジュズグサであり、この時期の調査で採集されたものと考えられる。
- (8) 宗像（1998）は5月に転居としているが、菅原の日記の分析により、この時は新居を探すための一時的な移動であったと判断した。
- (9) 菅原を示す学名の著者名は現在ではSugaw.と登録されているが、菅原自身はSugaw. Sugawara, S. Sugawara, S. S.などと表記している。

#### （参考文献）

大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩（編），2015-2017，『改訂新版日本の野生植物』1-5，平凡社，東京都。

大矢京右・新田紀敏，2025，「市立函館博物館所蔵森武コレクション—種子植物標本の分析を中心に—」『市立函館博物館研究紀要』35:44-77。

Kimura-Yokoyama O, Shutoh K, A new vascular plant species from Sakhalin, *Astragalus sugawarae* Kimura- Yokoyama & Shutoh (Fabaceae), based on redescription of an invalid protologue, Journal of Asia-Pacific

Biodiversity,

<https://doi.org/10.1016/j.japb.2025.08.001>

市立函館博物館（編），1996，『市立函館博物館蔵品目録8 植物篇植物標本』，市立函館博物館，函館市。

菅原繁蔵・小松泰造，1959，『函館山植物誌』，市立函館図書館，函館市。

菅原繁蔵，1905，『薄荷栽培及製造法』，北洋堂，羽幌村。

菅原繁蔵，1956，『樺太の植物 総括篇』，箱館植物研究会，函館市

菅原繁蔵（編），1958，『北海道植物銘鑑』，函館植物研究会，函館市。

高橋英樹，2024，『サハリン島の植物』，北海道大学出版会，札幌市。

高橋誼，1968，「植物採集記鳥海山の思い出—菅原繁蔵先生にお伴して—」『植物と自然』2(1):30-32。

新田紀敏，2025a，「絶滅植物の発見マツバニンジン」『北方山草』42:50-52。

新田紀敏，2025b，「菅原繁蔵の悪筆」『北方山草』42:105-106。

日本植物学会（編），1958，『第23回日本植物学会（福岡）大会 話題・講演要旨』，日本植物学会，福岡市。

日本植物学会（編），1963，『日本植物学会第28回大会研究発表記録』，日本植物学会，岡山市。

日本植物分類学会国際命名規約邦訳委員会（訳・編），2019，『国際藻類・菌類・植物命名規約（深圳規約）2018日本語版』，北隆館，東京都。

東藻琴村史編集委員会（編），1972，『東藻琴村史』，東藻琴村，東藻琴村。

松井洋・高橋英樹，2015，『北海道維管束植物目録』私刊，札幌市。

宗像和彦，1998，「植物学者菅原繁蔵先生のこと—北方植物の研究に生涯をかけたその足跡—」『市立函館博物館研究紀要』8:1-16。

山本岩亀・塚本角次郎, 1932, 『函館植物志』, 市  
立函館図書館, 函館市.

1951年10月1日付官報

(地方独立行政法人北海道総合研究機構フ  
ェロー・市立函館博物館学芸員)

# 市立函館博物館が所蔵するウップルイノリ

## *Pyropia pseudolineraris* (Bangiales, Rhodophyta) 標本と食文化

川井 唯史・大矢 京右・篠原 陽・伊木 亜子

### 1. 序言

ウップルイノリ *Pyropia pseudolineraris* (Bangiales, Rhodophyta) は本州以北の飛沫帯等に分布し、厳寒期には孢子体が最大で 30 cm 程に生長し、分布域は北海道西岸、本州太平洋岸北部、本州日本海沿岸、朝鮮半島である (吉田, 1998)。本種は本州では伝統的な食用海藻として加工方法も確立されており (関内, 2005)、古くは養殖対象種とされていたこともある有用海藻であるが、単孢子による無性生殖がない (黒木 1959: 吉田 1998) ためか、増殖効率が他のノリ類と比べて極端に悪く、本州では養殖の対象にはならなかった。なお本州以南で細断後に板状にして乾燥させた通称板ノリとして食用のため養殖されているのはスサビノリ *Pyropia yezoensis* であり、ウップルイノリは飛沫帯 (海岸や磯などで波しぶ

き (飛沫) がかかることで湿った状態が保たれているが、通常は潮が直接届かない高さの帯状区域) に生育するのに対して、スサビノリは潮間帯 (潮の満ち引きで周期的に海水に浸る区域) に分布する。両者の位置関係としては、飛沫帯の鉛直下方に潮間帯があるので、飛沫帯の方がより乾燥した環境となる。

本研究では、市立函館博物館が所蔵する森武標本の観察を行い、1935~1943 年当時のウップルイノリの大きさ等の状況把握を行った。また文献調査と函館市に長く居住する方への聞き取り調査により、市内のウップルイノリの利用と加工に関する情報を得た。最後に、文献調査により得られた函館市を含む北海道南部地域でのウップルイノリの伝統的な利用法に基づいて、生のウップルイノリの利用の再現を試みた。こ

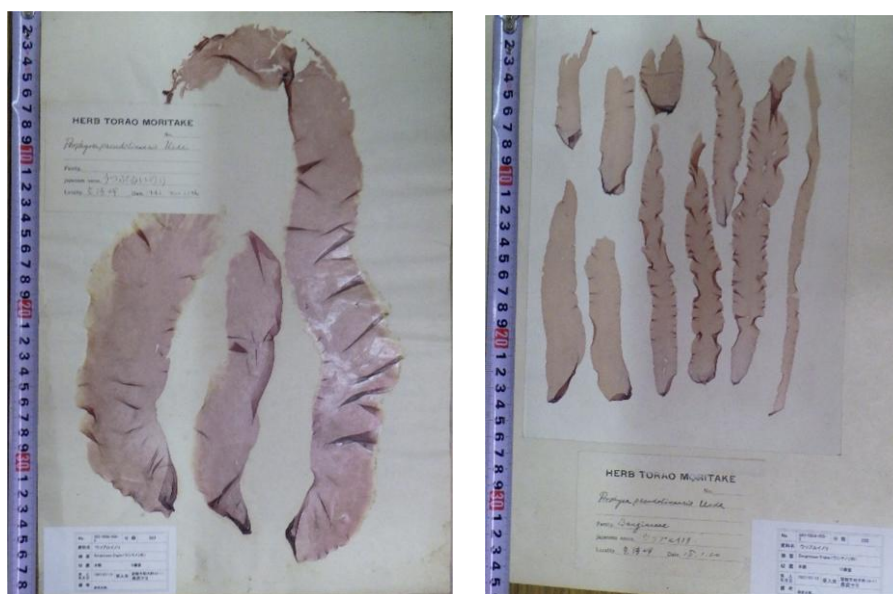


図 1. 市立函館博物館所蔵ウップルイノリ標本

表 1. 市立函館博物館所蔵ウップルイノリ標本データ

採集年月日	採集場所	採集者	平均葉長 (cm)	標準偏差	本数	標本番号
1935年1月13日	函館市立待岬	森武寅雄	29.0	0.0	1	S62-0059-009-1
1941年3月12日	函館市立待岬	森武寅雄	29.7	13.4	3	S62-0059-009-2
1943年1月20日	函館市立待岬	森武寅雄	11.9	6.3	10	S62-0059-009-3

これらの検討に基づき伝統的利用に則した合理的な藻体の利用方法に関して検討した。

## 2. 市立函館博物館所蔵標本調査

標本調査は、2025年5月13日に市立函館博物館の収蔵庫にて行った。収蔵庫には3つのウップルイノリ標本が確認された(図1)。これらは1935年1月～1943年1月に、森武寅雄が函館市の立待岬で採集したもので、平均葉長は11.9～29.7cmであった(表1)。

過去の知見では、ウップルイノリの大きさは最大でも30cm足らずとあり(北海道浅海増殖研究会 1960)、博物館標本の大きさは過去の知見と合致した。本調査により、20世紀前半から函館の立待岬においてはウップルイノリが生育していたことが確認された。

## 3. 文献調査

函館市史編さん室編(1998)は、岩ノリ(ウップルイノリ)の若く柔らかいものはコンブに比較すると極端に扱いは少ないが、澄まし汁やみそ汁などの汁物にされていたとしている。また木村(1999)は、1934年当時、函館市ではウップルイノリを収穫し、細かく刻んで乾燥させて板ノリにしたり、生ノリのままの状態でも利用したりしていたとしている。また、松前地域では寒ノリを「松前ノリ」として売りに出すほか、ゴッコ汁の最後に生ノリを散らす食べ方が示されている(畑井 1986: 179・182)。(1)

## 4. 聞き取り調査

聞き取り調査は、当該地に30年以上居住しており、伝統的な食文化に関する知見を有する方を対象として大矢が実施し、木村(1999)の著者でもある木村マサ子氏(函館市住吉町在住)に御協力いただいた。なお、情報については、物証を伴うものを原則とし、情報だけに関しては、当該者以外にも聞き取りを行い、客観性があつたものを道南の一般的な情報として列挙した。調査で得られた情報については次のとおりである。

### 4-1. 基礎情報

- ・住吉町漁民の漁場は、住吉漁港から寒川の大鼻岬(オバナミサキ)まで。
- ・毎年雪が降る頃から春の3月頃までノリを採っていた。
- ・春先にとれるのがウップルイノリ。最近では磯焼けでほとんど採れなくなったが、函館港などにまだ少し点在している(商売になるほどではない)。
- ・住吉町の前浜で、井戸水が流れ込むところで採れたのがスサビノリ。流木や他の海藻に付着する。ここ10年程の磯焼けや護岸工事、水洗化による生活排水の流入などでほとんど採れなくなった。

### 4-2. 海苔採取等に関連する資料の情報

函館市におけるノリ採取および加工に用いる伝統的な道具として、図2のとおり拝見した。各道具の詳細については図版の解説に掲載したが、写真2Cの簾がハマニン

ニク<sup>(2)</sup>をアンギン編み<sup>(3)</sup>にして作られており、糸の太さはハマニンニクの間からノリが落ちないように、かつきちんと水が切れるような仕上がりになるものを使用する配慮がなされていることを特記しておく。

#### 4-3. 海苔採取に関する情報

- ・岩場に付着したノリを採るときは、ノリカキ（別名カリカリ、ノリを掻き取る時の音から）で掻きとる。ノリカキは時計の薄手のゼンマイを切って使っていた。ゼンマイはかつて十字街にあった上野時計店で買っていた。

#### 4-4. 海苔の加工に関する情報

- ・採ってきたウップルイノリとスサビノリを混ぜて、まな板を使い包丁でたたいて刻む。まな板で刻むと木片が混じるので、本当はまな板よりも固い木質の丸太の上で切る方が良い。包丁は大きいものから小さいのまで、持ちやすいものを使う。刻んだノリはボウルに入れる。
- ・もう一つのボウルに水を張り、刻んだノリを軽く泳がせる。これにより砂や岩の破片を落とす。
- ・ダイにノマを載せて、その上にワクを置いて、ワクの中にノリを敷く。そうすることでノリの水分がノマからダイの下

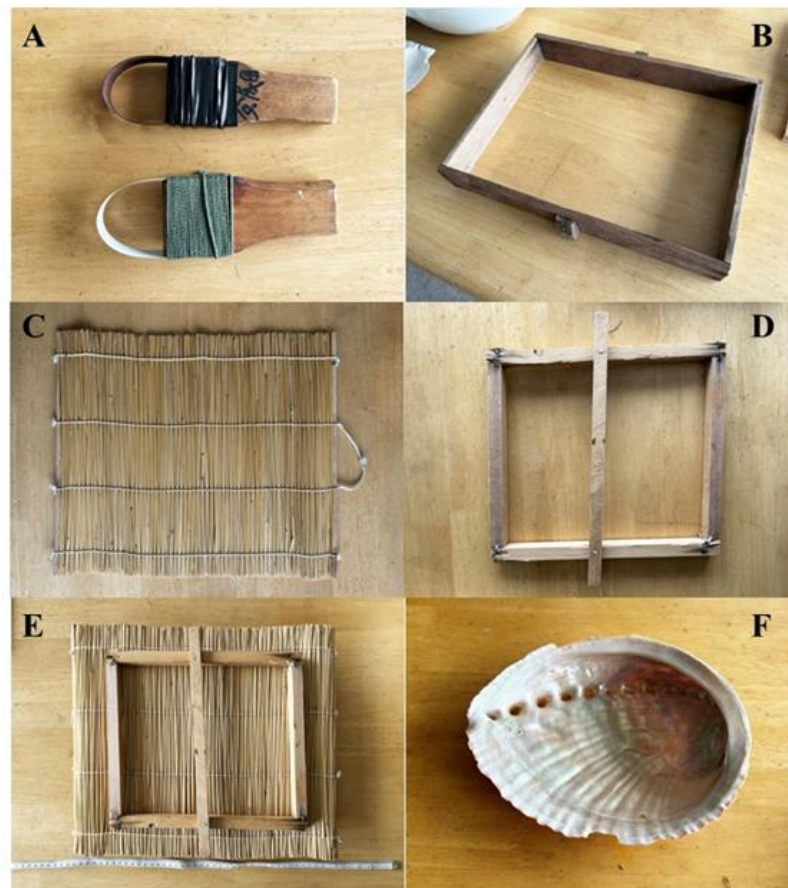


図2. 函館市のウップルイノリ板ノリ作成道具

A：岩からウップルイノリを採取する道具、通称ノリカキ／B：簾（すだれ）を乗せて水を切るための木枠（通称ダイ／ノマアゲルダイ、長さ35.0×幅26.0×高さ4.5cm）／C：細断したウップルイノリ藻体を乗せる簾（通称ノマ、長さ37.5×幅33.0cm）／D：細断したウップルイノリ藻体を板状にするための木枠（通称ワク、長さ26.5×幅23.5cm）／E：板ノリを作るための道具を組み合わせた状態／F：細断したウップルイノリ藻体をすくって均一に簾に並べるための貝殻

に落ちる。状況によりダイを少し傾けて使うこともある。

- 水を張ったボウルからノリを取り上げる際には、手のひら大の鮑の貝殻を使う。貝の縁の傾斜が使い塩梅がよろしい。今は大きな鮑の貝殻がないので、ホタテの貝殻も使う。
- 成形したノリは家の流しの縁に傾けて置き、完全に水を切る。水が切れたらノマを竿にかけて、風通しのいいところで干す。
- 板ノリにするにはウップルイノリとスサビノリを混ぜて簾に載せて干していた。
- スサビノリは香りがよく甘味が強いが、スサビノリだけだと干し上がった時に縮んで固くなる。
- ウップルイノリだけだと干し上がりが厚くなって仕上がりが悪い。両方のノリを混ぜることで仕上がりが良くなって食感も良くなる。ノリ弁当にして醤油をかけたらふわっとなる。
- 30年位前に板ノリをテーオー（函館市のデパート）の手作り展で売ったら飛ぶように売れた。

#### 4-5. 生海苔の利用に関する情報

- ウップルイノリはたくさん取れたが、スサビノリは多くなかった。
- 生ノリはしょうゆ汁（出汁と醤油のツユにノリを入れたもの）にした。正月にはこれに餅を入れた。
- 冬季にはゴッコのオスが岩場に打ちあがるので、それをとってノリを入れてゴッコ汁にしても食べていた。

以上の聞き取り情報を総合すると、ウップルイノリの利用には生の藻体を汁に入れる利用と細断して藻体を板状にして乾燥させる板ノリにする二つの伝統的利用法があった。ただし、現状では生での利用はほとん

ど見られず、板ノリが主流である。

#### 5. 生ウップルイノリの調理と食味検証

現在ではほとんど見られなくなっている、生のウップルイノリの汁物としての利用方法を、文献調査と聞き取り調査の結果を参考にして再現した。

なお、生のウップルイノリは2025年1・2月に北海道江差町かもめ島の五郎兵衛浜で採取し、 $-15^{\circ}\text{C}$ で凍結・保存したものをを用いた。1月に得た藻体は、先行的に生育して他所と比較しても大きかったため、手で丁寧に採取して付着器に砂利が付かないようにできたが、2月に採取した藻体は、道具を使って採取したためか砂利の付着が多く、洗浄しても取り切れなかったため汁物の調理には使えず、1月に採取した藻体だけしか用いることができなかった。また道具を使い砂利が混入した藻体から生の状態で砂利を除去しようとする、藻体が傷みエキスが流出しやすく、藻体の見た目も悪化し、なにより手間がかかる。そのため生で利用することが可能な藻体は手で採集できる先行的に生育した大型の藻体に限られるものと考えられる。また何らかの方法でロープ等の上でウップルイノリ養殖することが技術的に可能となれば、砂が無い藻体を安定的に確保することができ、地域の新しい産業になる可能性も出てくると思われる。

汁物は伊木がレシピ（表2）と調理方法手順（表3）を策定し、1. 昆布だし・すまし、2. 昆布だし・みそ汁、3. 一番だし・すまし、4. 一番だし・みそ汁の4パターンを作成した。生のウップルイノリの調理においては、先の $-15^{\circ}\text{C}$ で冷凍した4パターンを3か月後に解凍し、川井が食味の検証を行った。調理品等については図3に示したが、検証の結果、解凍・再加熱後の汁物には磯の香りが明確に感じられ、粘りも保持され

表 2. 生のウップルイノリの汁物のレシピ

- A 真昆布・函館南茅部尾札部（乾） 3 g  
 水 900 g  
 ※A 500mL を「昆布だし」とした
- かつお削り（にんべん 1袋2.5g入り）
- ねぎ  
 ウップルイノリ（1月採取）  
 みそ（マルコメプラス糀 生糀みそ）  
 塩  
 しょうゆ

【昆布だし】

- 1 真昆布・函館南茅部尾札部（乾）の表面をキッチンペーパーで軽く拭き、水に60分間浸漬する。
- 2 1を火にかけ、沸騰する前に昆布を取り出す。（A）

【一番だし】

- 1 (A) 250mLを温め、沸騰する前に火を止める。
- 2 かつお削り2.5g（1%）を入れ、こしとる。

【ウップルイノリ】

- 水で洗い、砂を落とす。  
 3cmほどの長さに切り、キッチンペーパーで軽く水気をとる。

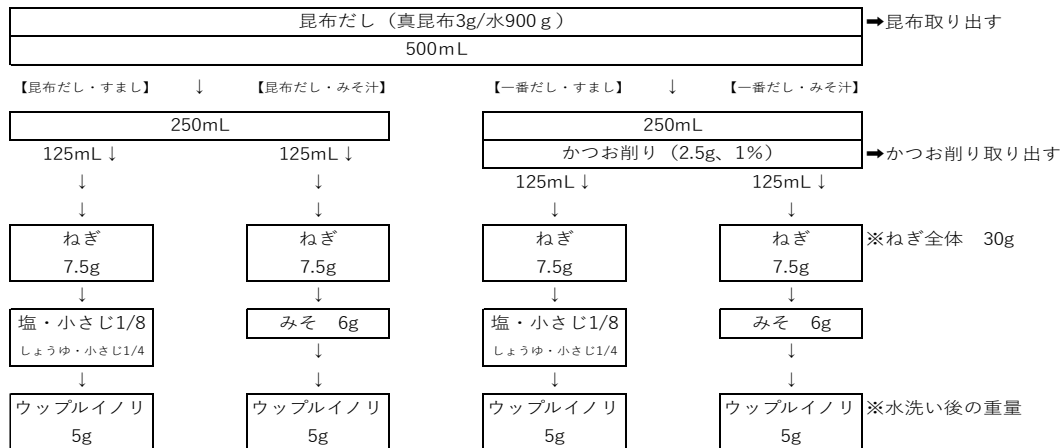
【すまし汁】

- 1 だし汁に小口切りのねぎを入れて加熱する。
- 2 火を止めて塩・しょうゆで調味する。
- 3 再び火にかけ、ノリを入れて火を止める。  
 （ノリを入れた後は煮込まずにさっと加熱する程度。）

【みそ汁】

- 1 だし汁に小口切りのねぎを入れて加熱する。
- 2 火を止めてみそで調味する。
- 3 再び火にかけ、ノリを入れて火を止める。  
 （ノリを入れた後は煮込まずにさっと加熱する程度。）

表 3. 生のウップルイノリの調理手順



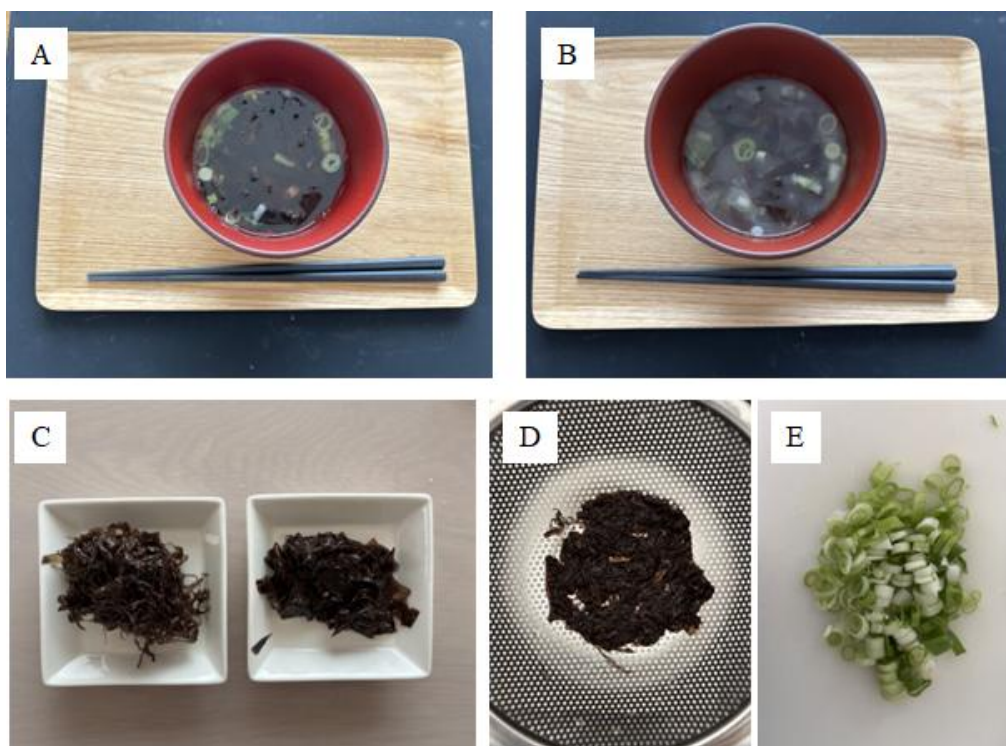


図3. 生のウップルイノリの汁物と材料  
 A: 昆布だし・すまし/B: 昆布だし・みそ汁/C: ウップルイノリの解凍・洗浄後（左は2月採取した一般的な大きさの藻体、右は1月に採取した先行的に生育した大型の藻体）/D: 洗浄した1月採取藻体/E: 汁物に入れたネギ

ていた。特にすまし汁ではウップルイノリの紅色が美しく映え、視覚的にも好印象であった。味噌汁では味噌の風味とのバランスも良く、伝統的な郷土料理の趣があった。これらの評価から生のウップルイノリの汁物は一度冷凍しても伝統に沿った味を楽しむ可能性が高いものと考えられる。

## 6. 生ウップルノリ利用にむけた早期採取の可能性検証

調査は篠原が実施し、調査時期は2024年11月11日から2025年4月25日までとした。調査場所は函館市の近郊である江差町のかもめ島（緯度41.87，経度140.11）の飛沫帯とし（図4A）、当該地区は底質が岩盤で冬季の波浪が厳しくなることから、静穏な日中に採取を行った（図4B）。

調査は2024年11月27日、12月18日、2025年1月21日、2月17日、3月18日、

4月24日に行った。各調査では1辺が50cmの金属製で正四角形の枠をウップルイノリが生育している場所の中心部に敷設し、その垂直上面から枠内をのぞき、ウップルイノリの藻体が枠内に示す面積を被度(%)として記録した（図5A-B, D-E）。また調査定点では枠内のウップルイノリ藻体をランダムに10本以上採取し、比較的大型の藻体10本の葉長を測定した（図5C, F）。なお調査場所は定点として再現性を保証するためGPSで緯度経度を記録した。また調査定点の脇では12月18日に生育していたウップルイノリを採取し被度10%まで低下させ、さらに脇の調査定点では1月21日に同じく被度10%まで低下させる操作を行った。

刈取りを行わなかった場所を対象区とし、12月18日に刈取りを行った場所、1月21日に刈り取った場所のウップルイノリ



図4. ウップルイノリ漁場  
A: ウップルイノリが生育する場所/B: 冬季の収穫作業

の葉長と被度の推移を表4に示した。12月25日の時点で対象区の平均葉長は23.2cmとなり、これは市立函館博物館が所蔵する標本の大きさである1935年1月13日採集の平均29.0cm、1918年1月20日採集の11.9cm、1941年3月12日採集の29.7cm(表1)と比べ1月20日採集分を除き同様であった。北海道浅海増殖研究会(1960:13、図8)のウップルイノリの生長のグラフで示されていたが葉長の最大は30cm足らずとなっており、これとも同様であった。この現象の説明としては冬季のウップルイノリの生長は最大で1日当たり1cm程とされ(北海道浅海増殖研究会1960)、このように冬に限って急激に生長するため、一度刈り取られた場所でも刈り取られていない場所の生長に追いつくことができるものと考えられる。

対象区と12月25日刈取区と1月21日刈取り区における2月11日以降の平均葉長の推移は同様であり、徐々に短くなる傾向があった。被度の推移は、対象区、12月18日摘取区、1月21日摘取区が、そろって2月17日の80%前後が最大となり、その後は低下していく傾向が見られた。この現象の解釈として、ウップルイノリの殻胞子の供給は、少なくとも実験場所においては十分に足りており、先行的に生長していた藻体が刈り取られることにより、入植が遅

れて大型化した藻体に光を奪われて生長して大型化できなかった藻体が岩盤上には潜在的にあり、これが短期間で急激な生長を遂げたことにより、刈り取っていない場所の被度に追いついたものと思われる。葉長と被度の推移を考え合わせると、正月前後に一度収穫を行い、その後に再度収穫することは資源の有効な利用になるものと考えられる。ただし、本調査は一か所で一年だけに限られたものであり、今後の継続的、

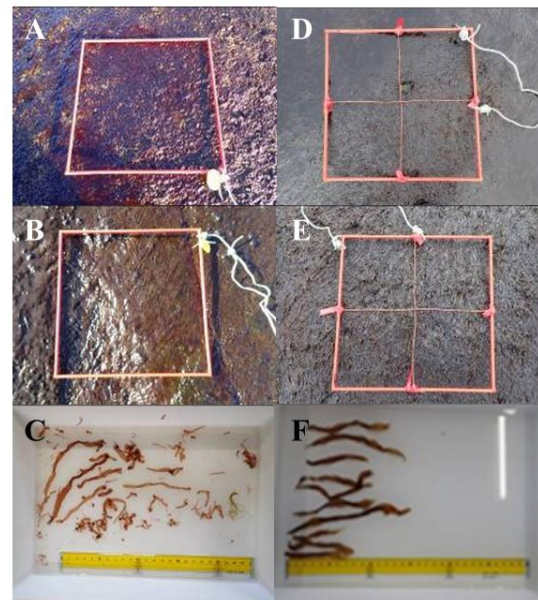
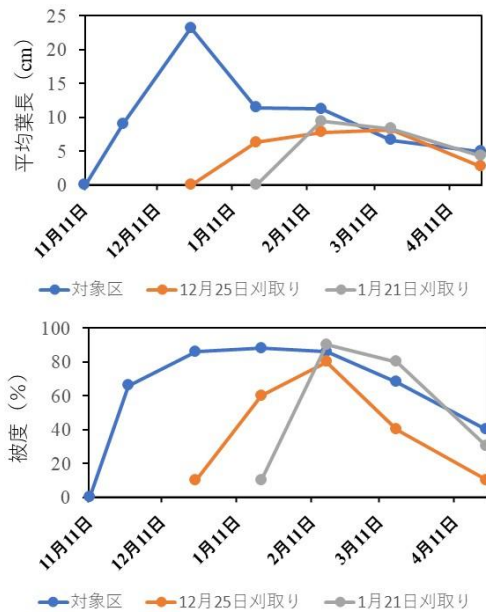


図5. ウップルイノリ二期作の検証  
A: 2024年12月25日のウップルイノリ生育状況/B: 同日にAの脇でウップルイノリを採取/C: 採取したウップルイノリ/D: 2025年2月17日のAのウップルイノリ生育状況/E: 同日のBの状況/F: 同日に採取したウップルイノリ

広域的な調査が望まれる。

表 4. ウップルイノリ冬季摘み取り後の回復



上：ウップルイノリ漁場における平均葉長の推移  
下：被度の推移

## 7. 総合考察

ウップルイノリの伝統的な食文化に基づいた、その有効利用に関して考察する。文献と聞き取りに基づく、函館市を始めとした道南ではウップルイノリが保存用・販売用に板ノリとして加工利用する伝統、そして地域で生ノリとして食利用する伝統も有していたものと考えられる。

ウップルイノリは冬季の生長が著しく早く、最盛期では1日に1cm程生長することも報告されている（北海道浅海増殖研究会 1960）。そのため初冬に収穫した場所でも厳寒期には2回目の収穫が可能な程度に生育することが確かめられている。また本試験により2月に採取した藻体は、洗浄しても付着した砂利を取り切れず、生ノリを汁物に入れての利用が難しかった。そのため、道南では1回目に収穫したウップルイノリを生ノリとして利用し、2回目に収穫した藻体を保存用の板ノリとして加工利用するのが伝統に合致し、料理方法としても、

生物的にも合理的な利用であると考えられる。

## 謝辞

ウップルイノリの採取・加工や食文化に関しての貴重な情報をご提供いただき公表の承諾を頂いた、函館市在住の木村マサ子氏に深謝いたします。

## (脚注)

- (1) 「ゴッコ」とは、北海道の沿岸地域（特に道南地方）で呼ばれる深海性の魚「ホテイウオ *Liparis tanakae* (布袋魚)」の地方名のこと。原著では「のり」「ごっこ」とひらがな表記であったが本稿内での整合性を保証するためカタカナで表記した。
- (2) 北海道の一部沿岸地域で使われる地方名・俗称で、標準的な植物の和名ではない。ただし、いくつかの植物がこの名前と呼ばれていることがあり、エゾネギ (*Allium schoenoprasum* var. *foliosum*) を指しているものと推定される。
- (3) 古代日本の編み技法の一種で、縄文時代から弥生時代にかけて使われていたとされる、布や網を編む手法のこと。図 2C は旧恵山町寄貝歌在住の木村鉄男氏（大正生まれ）が 1975 年頃に製作したものであるとのこと。

## (参考文献)

- 大矢京右・新田紀敏, 2025, 「市立函館博物館所蔵森武コレクションー種子植物標本の分析を中心」『市立函館博物館研究紀要』35:44-77.
- 木村マサ子, 1999, 「寒川集落での暮らしー扇谷ミサオさんに聞く」『道南女性史研究会』12:1-13.
- 黒木宗尚, 1959, 「アマノリ類の糸状体の生長・成熟と光条件(1):単孢子嚢形成及び単孢子放出の日長作用(1)」『東北海区水産研究所研究報告』15:33-42.
- 関内洋, 2005, 「第 11 章藻類加工品 十六島海苔(ウップルイノリ)」『全国水産加工品総

覧』，光琳，東京都。

函館市史編さん室(編)，1998，『函館市史 錢亀沢編』，函館市，函館市。

畑井朝子，1986，「道南松前の食一ふだんは何か」というと「三平しようか」『日本の食生活全集1 聞き書北海道の食事』，134-203。

北海道浅海増殖研究会編，1960，『浅海増殖の手引き』，北海道浅海増殖研究会。

吉田忠生，1998，『新日本海藻誌：日本産海藻類総覧』，内田老鶴圃，東京都。

(地方独立行政法人北海道立総合研究機構  
水産研究本部中央水産試験場主査・市立函館博物館学芸員・檜山振興局産業振興部檜山地区水産技術普及指導所主査・函館短期大学専任講師)

# 国宝「土偶（中空土偶）」50年のあゆみ

## —活用の記録を中心に—

平野 千枝

### 1. はじめに

令和7年(2025)は、北海道初の国宝「土偶(中空土偶)」が発見されてから50年となる記念の年であった。函館市縄文文化交流センターでは、この節目にあわせて、企画展「国宝『土偶』カックウ発見50年のあゆみ」をはじめ、講演会や関連する縄文体験講座を多数開催した。

本稿を通じて、土偶発見50年の歩みや発見当時のエピソード、主な研究史、保存・活用を支えてきた関係者の取り組みを整理し、国宝土偶の魅力と価値を再認識する一助となれば幸いである。

### 2. 土偶の発見から国宝指定まで

土偶は、昭和50年(1975)8月24日、函館市尾札部町(旧南茅部町尾札部)の主婦・小坂アエ氏によって畑での芋掘り作業中に偶然発見された。土偶は6つに割れており、頭頂部両側と両腕は失われていたものの、胴部以下はほぼ完全に復元することができた。

小坂氏は最初に土偶の頭を発見した時は恐怖を感じたため、一時は寺に預けることも考えたという。しかし、自宅に持ち帰って家族に見せたところ、当時中学生であった娘の八重子氏(現・浅井姓)が「学校で習った埴輪ではないか」と発言した。これを受けて、南茅部町教育委員会により現地で緊急発掘調査が実施された。その結果、土偶の発見地点から土坑1基が確認され、土偶は死者に副葬されたものである可能性が報告されている。

なお、発見地点周辺は当時未登録の埋蔵文化財包蔵地であったことから、遺跡は南茅部町尾札部の字名に基づき、著保内野遺跡として新たに登録された。

土偶発見の報を受け、文化庁および北海道教育委員会をはじめとする関係機関が相次いで現地を視察した。なかでも、同年9月28日には、文化庁文化財鑑査官の坪井清足氏が来町し、土偶を実見するとともに、小坂氏の案内により著保内野遺跡を視察したことは特筆される。

文化庁からは土偶を中央(東京国立博物館)で保存・公開することを提案されたが、小坂氏が「我が町で出たものだから、我が町で保管するのが当然である」と意見して、土偶に関わるすべての権限を南茅部町に譲ったことで、町での保管が決定された。

小坂氏の意向を受け、南茅部町では重要文化財指定を目指した取り組みが進められ、その結果、発見から4年後の昭和54年(1979)に、土偶は国の重要文化財に指定された。これを契機として、町は土偶を展示する郷土資料館の建設構想を立案したが、計画は実現に至らず、土偶は他館への貸出時を除き、南茅部町役場の耐火金庫において約30年間、厳重に保管されていた。

平成13年(2001)、南茅部町が前年の大船C遺跡速報展示室(現・大船遺跡管理棟)オープンを記念して土偶の愛称を募集したところ、全国から350点の応募があり、南茅部の「茅」と中空土偶の「空」をとった「茅空(カックウ)」の愛称が選ばれた(命名者:寺島真寿美氏)。この愛称は、平成

19年（2007）、国宝指定の報を聞いた小坂氏が、取材の際に「カックウ、出世して良かったな」とにこやかに語ったエピソードが新聞等で大きく報じられたことで、より多くの人たちに知られるようになった（以下、カックウと表記する）。

昭和50年の緊急発掘調査は、調査面積や期間が限られており、遺跡の内容を十分に把握することができなかつたため、再発掘調査の必要性が長年の課題となっていたが、平成16年（2004）に南茅部町は周辺3町村（戸井町・恵山町・楳法華村）とともに函館市と合併となったタイミングで、平成18年度（2006）の国庫補助事業としての調査が認められ、函館市教育委員会による著保内野遺跡の再調査が実施された。

再調査は、世界測地系による座標値を基準としてカックウや遺構の出土位置等を記録するとともに、著保内野遺跡の内容を把握することを目的としていた。また、未発見であったカックウの欠損部が排土の中に残存していないか確認することも目的としていた。

調査開始にあたり、昭和50年（1975）にカックウが出土した土坑の位置を特定する必要があったので、小坂氏に案内された地点を調査したところ、まさにその地点でカックウが出土した土坑が再検出され、遺構の保存状況も良好であることが確認された。さらにその北側10数メートルの地点から直径約6メートルの環状配石遺構1基および複数の土坑が確認された。そのうちの半掘した土坑1基から、ヒスイ製垂飾品1点と漆が塗られた櫛の残片数点が出土し、放射性炭素年代測定法（AMS）により漆片の年代は $3,268 \pm 34$ 年（BP）の年代値が示された。その他、土器口縁部1点が出土し、縄文時代後期に属するものと判断された。これらの点から、著保内野遺跡は縄文時代後期後半の集団墓域（群集墓）であること、

そしてカックウはそのうちの1基に副葬されたことが明らかとなった。

これらの成果をもって、著保内野遺跡の時代や性格が明確になるとともに、カックウの埋葬状況が再確認されたことで、平成19年（2007）6月8日、カックウは北海道初の国宝に指定された。文化庁による国宝指定理由として、カックウは「中空土偶として現存しているもののうち最大、かつ遺存状態が良好でその出土状態を把握することもでき、当時の信仰や祭祀の実態を明らかにする上で欠かせない資料である。縄文時代後期を代表する優品として、また土偶造形の到達点を示すものとして、極めて貴重である。」という最大級の評価を受けている。

翌平成20年（2008）10月20日、出土してから30年以上を経過したカックウの内部状況を確認し、国宝の保存管理に万全を期すために、市立函館病院にてカックウのCTスキャンが実施された。当初、病院側からは「CTスキャンは医療機器であり人間以外のものは診察できない」と伝えられたが、函館市教育委員会側は「この土偶にはカックウという名前がある」と説明したところ、人間と同様に診察券を作成してのCTスキャン調査が実現したという逸話が残る。なお、診察券には【氏名：カックウ、性別：女性、生年月日：明治2年1月1日】と記されている。

CTスキャンの結果、2つの重要な知見が得られた。第一に、カックウの脚部の最も薄い箇所厚さわずか2~3mmであること、第二に、カックウの脚部は輪積み法、胴部は板づくり、頭部は手づくね法と部位ごとに異なる技法で作られており、特に脚部の内部は輪積みした粘土の境目をほとんど調整せずあらかじめ壊れやすく作られていたことが判明した。

一方、胴部は壊れにくく頑丈に作られて

表 1. カックウ出展等の記録

年	月	出来事
1977	10月	東京国立博物館特別展「東洋の漆工芸」展（～11月）
1978	10月	北海道教育委員会主催「北海道の土偶展」（～11月、会場：北海道庁道民ホール）
1984	7月	八戸市博物館特別展「土偶－縄文人の祈り－」（～9月）
1988	7月	青函トンネル開通記念博覧会「津軽海峡縄文美術展」（～9月、会場：青森県立郷土館）
	10月	東京国立博物館「日本の考古学－その歩みと成果－」（～11月）
1989	9月	ベルギー王立博物館「ユーロパリア89. ジャパン」（～11月、約4万人）
1992	8月	アメリカ・スミソニアン博物館「古代の日本 Ancient Japan」（～11月、約9万1000人）
1995	11月	イタリア・ローマ市立展示館「信仰と美－日本美術4000年の歴史を辿る一展」（～1996年1月）
2001	9月	イギリス・大英博物館「Shinto The Sacred Art of Ancient Japan: 神道 古代日本の聖なる美術展」（～12月）
2007	4月	東京国立博物館「特別展覧 新指定国宝・重要文化財」（～5月）
2007	6月	南茅部公民館「国宝『土偶（中空土偶）』特別公開展示」（～6月、2,818人）
2007	7月	市立函館博物館「蘇る北の縄文ロード－発掘された縄文の世界－」（～8月、10,804人）
2008	7月	G8 北海道洞爺湖サミット会場での特別展示（～7月）
2008	9月	市立函館博物館「国宝中空土偶と函館発掘物語」（3,750人）
2009	4月	市立函館博物館「国宝中空土偶と函館の文化財」（～5月、5,110人）
2009	9月	イギリス・大英博物館「THE POWER OF DOGU」（～11月、65,564人）
2009	12月	東京国立博物館「国宝 土偶展」（～2010年2月、128,285人）
2010	7月	市立函館博物館「縄文の至宝－世界遺産をめざす15遺跡と土偶－」（～9月、5,176人）
2012	3月	北海道開拓記念館「北海道開拓記念館40周年記念事業～北の土偶－縄文の祈りと心～」（～5月、38,831人）
2012	9月	滋賀県甲賀市・MIHO MUSEUM「土偶・コスモス」（～12月、約6万9000人）
2014	10月	東京国立博物館「日本国宝展」（～12月、386,708人）
2017	8月	函館市縄文文化交流センター企画展「縄文土偶サミット 集まれ！国宝・道南の土偶たち」（～9月、2,804人）
2018	7月	東京国立博物館「縄文－1 万年の美の鼓動」（～9月、354,259人）
2018	10月	フランス・パリ日本文化会館「ジャポニスム2018 事業『縄文』」（～2019年1月、14,806人）
2018	11月	函館市縄文文化交流センター企画展「南かやバ発掘調査のあゆみ～掘っちゃいました！縄文時代」（～12月、1,412人）
2019	9月	新潟県長岡市・新潟県立歴史博物館「国民の文化財 あ、コレ知ってる！はにわ、どぐう、かえんどきの昭和平成」（～11月、8,570人）
2019	10月	長野県千曲市・長野県立歴史館「国宝土偶～縄文文化の多様な個性」（～11月、15,041人）
2022	9月	函館市縄文文化交流センター企画展「『カックウ』と『まっくう』」（～10月、5,132人）
2023	7月	北海道博物館「ユネスコ世界遺産登録記念 北の縄文世界と国宝」（～10月、43,473人）
2025	8月	函館市縄文文化交流センター企画展「国宝『土偶』（カックウ）発見50 年のあゆみ」（～10月、5,358人）
2025	10月	京都府京都市・京都文化博物館特別展「世界遺産 縄文」展（～11月）
2026	1月	群馬県高崎市・群馬県立歴史博物館特別展「世界遺産 縄文」展（～2月）

おり、身体の各部位の作り方に差を設けていることがわかった。おそらく、失われていた頭頂部と両腕も、脚部と同様にはじめから壊れやすく作っていたことが考えられる。そして頭頂部と両腕は早い時期に失われ、現地には存在しないものと推測される。

### 3. カックウの出展記録（参考：表 1）

#### 3-1. 発見から国宝指定までの出展記録

カックウの価値については、考古学的・造形的に優れていることから、発見後まもなく「国宝級」と高く評価されている。

発見から2年後の昭和52年（1977）には早くも東京国立博物館の特別展「東洋の漆工芸」展に出展されている。本展は、日本を中心に琉球、朝鮮、中国、ヴェトナム、タイ、ラオス、カンボジア、ビルマなど東南アジア各地の漆工芸の歴史、技法、用途を概観する代表的漆器約620件を展示・紹介するもので、カックウには脚部の赤漆と顎の黒漆の痕跡がみられ、縄文の漆を語る

うえで貴重な例であることから出展されることとなったものである。

翌昭和53年（1978）には、北海道教育委員会主催の特別展「北海道の土偶展」（会場：北海道庁道民ホール）に出展され、カックウは北海道を代表する考古資料としての位置づけを確立した。

昭和63年（1988）には、青函トンネル開通記念博覧会の「津軽海峡縄文美術展」（会場：青森県立郷土館）に出展され、北海道と本州をつなぐ長きにわたる文化交流の象徴として展示されている。さらに同年、東京国立博物館「日本の考古学－その歩みと成果－」にも出展され、日本の考古学研究の進展を示す資料の中でも、縄文時代を代表する資料の一つとして紹介されている。

翌平成元年（1989）には、初の海外出展として、ベルギー王立博物館「ユーロパリア89. ジャパン」に出展された。同展は、日本の美術、音楽、演劇、文学など日本文化の全貌を紹介するという目的で開催され、

3 か月の期間中、約 4 万人の観覧者数を記録し、カックウは日本の先史時代を海外に発信する役割を果たした。

海外出展はその後も続き、平成 4 年(1992)のアメリカ・スミソニアン博物館の「古代の日本 Ancient Japan」展は、文化庁とアメリカ合衆国スミソニアン研究機構、アーサー・サックラー・ギャラリーとの共催による特別展で、アメリカ・ワシントン DC のスミソニアン博物館のサックラー・ギャラリーで開催された。同展は、旧石器時代から飛鳥・奈良時代にいたる日本文化を、国宝 3 点、重要文化財 83 点を含む 258 点の出土品によって体系的に紹介した特別展であった。

さらに、平成 7 年(1995)ローマ市立展示館の展覧会「信仰と美—日本美術 4000 年の歴史を辿る一展」では、「縄文時代から室町時代に至る時代を、宗教と共に生活に根ざした文化及び鑑賞芸術を中心に、日本人が心のよりどころとした造形美術品」のひとつとして出展された。

平成 13 年(2001)には、文化庁海外展「Shinto The Sacred Art of Ancient Japan: 神道 古代日本の聖なる美術展」(会場: 大英博物館)では、神道が体系づけられる以前の日本の精神文化を理解する資料の一つとして出展された。

このように、国宝指定以前からカックウは、縄文文化にとどまらず日本文化の精神性や考古学的・美術的価値を紹介する代表的な資料として重要な位置を占めていたことがわかる。

また、カックウの資料的価値や認知度も、北海道の考古資料の一つからスタートして、縄文後期の土偶の代表、日本の漆工芸の代表、さらには日本美術史における縄文の象徴として注目を集めるなど、徐々に広がりを見せていることがわかる。特に海外においては、アート作品としての評価の高さ、

日本人の精神・信仰を紹介する資料として重要視されていることがわかる。

### 3-2. 国宝指定後の出展記録と国際的な発信

平成 19 年(2007)の国宝指定後も、国内外への出展は続く。平成 19 年(2007)、東京国立博物館「特別展覧 新指定国宝・重要文化財」で公開されたのを皮切りに、平成 20 年(2008)の G8 洞爺湖サミットでは、サミット会場であるザ・ウィンザーホテル洞爺内に「日本には、自然の一員として一万年以上存続した縄文文化があり、その精神は私たちの心に脈々と受け継がれている(原文は英語・仏語併記)」というメッセージとともに特別展示された。展示実現に際しては、セキュリティ面の課題が指摘されたが、文化庁の担当調査官による「サミット期間中、このホテルは日本で一番安全な場所である」という進言があり、カックウの特別展示が実現している。

翌平成 21 年(2009)、カックウは再び大英博物館の特別展「THE POWER OF DOGU」に出展されている。この特別展は、縄文文化の精神性や信仰の形を現す展覧会で、青森県風張 1 遺跡出土の国宝「合掌土偶」と長野県棚畑遺跡出土の国宝「縄文のビーナス」と並んで、当時の国宝土偶が一堂に会する貴重な機会となった。

同年、カックウの帰国を記念して東京国立博物館「国宝 土偶展」に出展され、「土偶のかたち」「土偶芸術のきわみ」「土偶の仲間たち」というテーマの中でカックウは紹介された。

平成 24 年(2012)には、北海道開拓記念館「北海道開拓記念館 40 周年記念事業～北の土偶—縄文の祈りと心～」に出展されている。

カックウは国宝「縄文のビーナス」、国宝「合掌土偶」のほか、重要文化財(当時)「仮面の女神」、重要文化財(当時)「縄

文の女神」などとともに、土偶の造形の特徴や背景となる文化、特に「縄文の祈りと心」を紹介する資料の代表として展示された。

図録には、カックウの表現に見られる“赤”と“黒”、“内”と“外”、“○（曲線）”と“△（直線）”などの二項対立の関係について、執筆者である阿部千春氏は「生」と「死」の表徴であるとされている。氏はさらに、生と死の循環、「命の再生」をも表すものであるとされている。

同年、MIHO MUSEUM（滋賀県甲賀市）の「土偶・コスモス」展にもカックウは出展されている。

図録冒頭では、縄文土器・土偶を美術的な視点で「発見」した岡本太郎氏の発言が注目に値するので、ここに引用したい。岡本氏は「縄文土器の荒々しい、不協和な形態、文様に心構えなしでふれると、誰でもがドキッとする」「複雑で奇怪な縄文土器が、現代に於ける藝術の為の藝術の如く単に美学的意識によって作り上げたのでないことも確かだ。それは強烈に宗教的、呪術的意味を帯びて居り、云いかえれば四次元を指向しているのである」という。

これを受け、図録本文では「土偶はアートとしてのみ捉えるのではなく、考古学者による解読の試みに教わりながら、土偶の謎かけに応えるべく、考えをめぐらす」という視点が強調されている。土偶は道具であるか否か、土偶はアートであるといったこれまでの土偶観を改めるものであり、示唆に富むものである。

続いてカックウは、2年後の平成26年（2014）の東京国立博物館「日本国宝展」にも出展されている。本展示のテーマは「祈り、信じる力」であり、仏教伝来以前の「神を信じ」ていた時代の信仰の姿を明らかにする資料の一つとして展示され、386,708人の来館者数を記録した。

図録には、カックウの表現に関する記述があり、脚部の筒形土器・注口土器との関係性や、カックウの人面装飾が東北や関東地方に広く分布することなど、カックウに込められた祈りに関して簡潔ながらも重要な指摘がなされている。

平成30年（2018）、東京国立博物館「縄文—1 万年の美の鼓動」展では、「縄文の美」をテーマに、縄文時代草創期から晩期まで、日本列島の多様な地域で生まれた縄文の優品が一堂に会した。この特別展には354,259人の来館があり、縄文ブームの高まりは頂点に達した。

同年、カックウは日仏友好160周年の記念事業として、パリ日本文化会館での「ジャポニスム2018事業『縄文』」に出展されている。本事業は、国際交流基金（JF）が事務局となって開催された日本フェスティバルで、「日本人の美意識と日仏の共鳴」がコンセプトであった。人間は自然の一部であるという考え方、自然を崇め敬ってきたこと、調和を重んじ、寛容の精神で多様な価値観を共有し共存させてきたという日本人独特の感性を、縄文の資料から現代アート作品まで幅広く紹介するものであった。

カックウは図録の中で「磨き上げられて光沢を帯びた腹部には妊娠線が描かれている。腰部から脚部には、浅い浮き彫りを伴う刻線による幾何学文様が施され、股間部にはS字文様が加えられている。作品全体の装飾は、きわめて精緻な配慮のもとに構成されている」（原文：仏語）と紹介されるとともに、類例が津軽海峡を挟んだ対岸、青森県側からも複数発見されており、製作当時、津軽海峡の両岸に共通する文化圏が存在したことに言及している。

翌令和元年（2019）には、新潟県立歴史博物館「国民の文化財 あ、コレ知ってる！ はにわ、どぐう、かえんどきの昭和平成」と長野県立歴史館「国宝土偶～縄文文化の

多様な個性」の2か所を巡回展示している。

本展示は、縄文の芸術性の高さや祈りの力について紹介するとともに、ヒトガタに想いや願いを託す人間の心理に迫ることをテーマとしていた。

図録には、多くの土偶は多産や豊穡を祈るための道具とされているが、カックウについては体形や表情が写実的で親しみのある表現であると紹介されている。

令和5年(2023)には、北海道博物館「ユネスコ世界遺産登録記念—北の縄文世界と国宝—」に出展されている。同展はユネスコ世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を紹介するとともに、「北の縄文文化」を象徴する国宝および国指定重要文化財を一堂に公開することを目的として開催された。会期は約2か月間で、来館者数は4万人を超えた。

同展の図録では、カックウをはじめとする土偶について、縄文時代の精神性、いわゆる「縄文の心」が具現化されたものと位置づけている。さらに、縄文文化の根幹には、日常生活と祈り・呪術とが密接に結びついた世界観が存在していたことが強調されている。

そして本年(令和7年(2025))、カックウは巡回展「世界遺産 縄文」展に出展され(会場:京都文化博物館・群馬県立歴史博物館)、カックウ発見50年の今年度もカックウは全国各地を飛び回っている。

このように国宝指定後も、カックウは縄文文化の発信者、縄文の精神的シンボルとしての地位を確立するのみならず、国内外に日本の精神文化の象徴として、その評価はさらなる高まりを見せている。

### 3-3. 函館市(旧南茅部町)におけるカックウの活躍

ここで旧南茅部町および函館市内におけるカックウの歴史について触れてみたい。

まず、カックウ発見から2年後の昭和52年(1977)、旧南茅部町が啓発用パンフレット「先史からの使者」を発行している(当時定価200円、現在非売品)。パンフレットには、著保内野遺跡の緊急発掘調査の成果およびカックウに施された精緻な文様について、町民向けに平易な表現で紹介されている。

カックウの国宝指定が決まった平成19年(2007)には、南茅部公民館(現南茅部総合センター)を会場に「国宝『土偶(中空土偶)』特別公開展示」が開催され、わずか3日間の公開にもかかわらず2,818人もの来館者数を記録している。

同年6月25日には、池坊保子文部科学副大臣(当時)が函館を訪れ、カックウのG8洞爺湖サミットへの「出席」を提案し、前述のとおりG8洞爺湖サミット会場での展示が実現している。

サミットを終えたカックウは、同年開催の市立函館博物館の国宝指定記念特別企画展「蘇る北の縄文ロード—発掘された縄文の世界—」に出展され、約1か月半の短期開催ながら10,804人の来館者数を記録した。同展は、北海道と青森・岩手・秋田県などの縄文文化を紹介する内容で、土器や刀形石器、装飾品など国や自治体の重要文化財に指定された資料約1,000点が展示された。

平成23年(2011)10月1日には、カックウを常設展示する登録博物館施設として函館市縄文文化交流センターがオープンし多くの来館者で賑わいを見せた。オープンセレモニーの後、会場を函館市南茅部公民館に移し、オープン記念式典・祝賀会がひらかれ、逢坂誠二前衆議院議員・菊地徹夫日本考古学協会会長(当時。函館市出身)らの挨拶などがあり、来賓として小板氏も会場を訪れている。当日は地元の安浦駒踊りや縄文太鼓の演舞が披露され、市内外か

ら多数の来館者で賑わいを見せた(図1)。  
函館市縄文文化交流センターオープン後は、たびたびカックウをテーマにした企画展が開催されている。



図1. 函館市縄文文化交流センターオープン(2011年)

平成29年(2017)企画展「縄文土偶サミット 生まれ! 国宝・道南の土偶たち」では、レプリカを含めて5体の国宝土偶が一堂に会した。「縄文土偶サミット」開催中にはトークセッションが行われ、元文化庁主任調査官の土肥孝氏と、カックウを復元製作した陶芸家の安部郁乃氏がそれぞれの視点からカックウの魅力を語っている(図2)。



図2. 縄文土偶サミット(2017年)

平成30年(2018)には、企画展「南かやべ発掘調査のあゆみ～掘っちゃいました! 縄文時代」が開催され、函館市南茅部地域における30年以上にもわたる発掘調査の歴史を振り返る展示を行った。著保内野遺

跡も南茅部地域で実施された重要な学術調査のひとつとして紹介されている(図3)。



図3. 南かやべ発掘調査のあゆみ(2018年)

令和4年(2022)には、企画展「『カックウ』と『まっくう』」が開催され、東京都町田市田端東遺跡出土の中空土偶頭部(愛称まっくう)を借用して、両遺跡の共通性(ストーンサークル、縄文時代後期の墓域など)について紹介したほか、東北地方を中心とした東日本に広くみられる著保内野型土偶についてもパネルで紹介した(図4)。



図4. カックウとまっくう(2022年)

そして本年(令和7年(2025))、企画展「国宝『土偶』(カックウ)発見50年のあゆみ」と題して、カックウ発見から50年の歴史を振り返るパネル展示を行った。展示パネル作成にあたっては、旧南茅部町教育委員会や函館市教育委員会の行政文書のほか、昭和から現在までの新聞記事なども取り入れるなど、これまでの企画展では紹

介しきれなかった内容を盛り込むとともに、カックウを守るために尽力した多くの方にインタビューを行い、カックウへの思いを語っていただくなど、カックウ発見 50 年を祝う内容の展示を行った（図 5・6）。

このほか、函館市縄文文化交流センターでは、縄文まつりとの連動企画として期間



図 5. 国宝『土偶』（カックウ）発見 50 年のあゆみ（2025 年）



図 6. 国宝『土偶』（カックウ）発見 50 年のあゆみ講演会（2025 年）

限定イベント「中空土偶レプリカとふれあってみよう！」（令和 3 年（2021）から毎年）を開催している。本イベントは、学芸員の立ち会いのもと、カックウのレプリカに直接触れることで土偶造形を間近に見ることができる貴重な機会となっており、文化財を「見る」だけでなく「触れる・感じる」ことができる絶好の機会となっており、家族連れを中心に毎年多くの方々で会場は賑わいを見せている。

#### 4. カックウの研究動向（参考：表 2）

本章では、カックウが発見されてから 50 年が経過する中で、カックウ関連の論文・書籍についていくつか紹介したい。その研究成果は余りにも膨大であり、50 年全ての研究成果を把握することは不可能であるので、一部のみの紹介となることについてはご了承ください。

##### 4-1. 著保内野遺跡緊急発掘調査～昭和期の研究動向

南茅部町教育委員会学芸員小笠原忠久氏（当時）による昭和 50 年（1975）の著保内野遺跡緊急発掘調査の報告論文「北海道著保内野出土の中空土偶」が初出である。カックウの偶然による発見、カックウの出土地点が生土墓と判断されること、そしてカックウは遺体に抱かれるような形で伏せた状態で埋められたこと、カックウの文様表現の詳細な観察から製作は縄文時代後期後半に属すると指摘したことなど、その後の調査・研究でその正確性が再確認された内容も多く、調査期間が短く調査範囲も限られた緊急発掘としては、非常に多くの成果があった。

奈良大学文学部文化財学科（当時）の水野正好氏は「日本の原始美術 5 土偶」において、カックウを美術的な観点から「素直な人間の写しに近く、異様さ、誇張からは縁遠い」「単なる女性像ではなく、神話の中の女神を顕わにしたものであろうか」と考察されている。また、カックウの用途として筒形土偶との関連に触れるとともに「水液の出し入れを行った」可能性についても言及している。さらに本書では、カックウには豊穡への祈りや、死と再生の象徴としての役割があったことについても触れられており、カックウに込められた精神性に関する後年の研究発展に大きく寄与している。

表 2. カックウ関係書籍・論文

年	執筆者	論文・書籍名	掲載誌・出版社
1976	小笠原忠久	北海道著保内野出土の中空土偶	考古学雑誌：第61巻第4号
1979	水野正好	「日本の原始美術5 土偶」	講談社
1987	小笠原忠久	「南茅部町史」	第一法規出版株式会社
1992	長沼孝	北海道の土偶	国立歴史民俗博物館研究報告：第37集
1996	設楽博己	副葬される土偶	国立歴史民俗博物館研究報告：第68集
2010	原田昌幸	土偶とその周辺Ⅱ	日本の美術：No.527
2010	阿部千春	著保内野遺跡出土の土偶とその周辺	考古学ジャーナル：2010年12月号
2015	阿部千春	マルチ・ジェンダーな遺物を生んだ縄文人の思考：著保内野遺跡の土偶と八木B遺跡の土器	東北学：05
2018	井口直司	「縄文土器・土偶」	角川ソフィア文庫
2021	福田友之	北海道著保内野、垣ノ島の遺跡調査	土偶研究会「DOGU」第4号

南茅部町の歴史について、南茅部町史編集室が当時の研究水準において可能な限りの資料や伝聞を上下2巻にまとめた「南茅部町史」は、町内に伝わる歴史・考古資料や古写真をはじめ、「古老談」として昔話や伝承を集録した民俗学の調査で行われるフィールドワークの手法もとられており、現在では忘れられている伝説や方言などについても可能な限り集録した自治体史である。

縄文時代に関する内容は、小笠原学芸員の手によるものであり、カックウについても先史時代と埋蔵文化財の2項目にわたって記事がみられる。

カックウに塗られていた漆については、全身が黒色漆で塗られていたと考えられる点、「貞操帯をつけた土偶」という異名が付けられていたという記述が見られるが、観察によって、黒色漆は顔面部に塗られ、脚部などには赤色漆が塗られたものと判明している。

#### 4-2. 平成期以降の研究動向

北海道教育庁（当時）の長沼孝氏は「北海道の土偶」で、土偶分布圏の最北端としての北海道の土偶についての研究史をまとめたほか、土偶の分布状況について、縄文時代早期から晩期まで、東北地方北半の影

響を強く受けていたことを指摘している一方、北海道の土偶独自の特色に関する記述がみられることを指摘している。

カックウをはじめとする後期の土偶の特徴として、顔の表現に共通性があると同時に、体部の形状・表現が写実的であるとされており、土偶の共通表現の地域的な広がりについても言及がある。

また、カックウの脚部の連結部については、脚の重さを支えるためと、粘土の乾燥、焼成時の空気抜き役目をするものと考察されている。

国立歴史民俗博物館考古研究部（当時）設楽博己氏は「副葬される土偶」で、土偶は女性原理の象徴であること、土偶の故意破壊、縄文後期の北海道における土偶の副葬について言及し、土偶＝女性が副葬される＝土でつくる＝女性原理の象徴＝ヒトの誕生と成育を表現している一方、石棒類＝男性が石でつくる＝男性原理の象徴＝ヒトの死に関わるもの、とする二項対立の概念を提示している。

文化庁美術学芸課主任文化財調査官（当時）原田昌幸氏は「土偶とその周辺Ⅱ」において、「カックウの仲間」として東京都町田市田端東遺跡出土の中空土偶頭部（愛称：まっくう）との類似性（人面表現および群集墓に築かれたストーンサークル）を

指摘するとともに、中空に作られた頭部に、細い粘土紐を貼り付けて表現された眉や鼻、そして楕円形の両眼と口などの人面表現をとる土偶を「著保内野土偶型式」と名付け、縄文時代後期後半の土偶型式のひとつと定義した。また、この土偶型式の広がりについて「“カックウ”の仲間たちは、このような葬送に関連が深い特定の土偶型式として、後期後葉から晩期初頭の頃、東日本のほぼ全域を、それこそ股にかけて活躍していた、ダイナミックな土偶たち」であると指摘した。

函館市縄文文化交流センター初代館長の阿部千春氏は「著保内野遺跡出土の土偶とその周辺」および「マルチ・ジェンダーな遺物を産んだ縄文人の思考—著保内野遺跡の土偶と八木B遺跡の土器」において、カックウにみられる二項対立・二項原理の概念を同一空間で表現しようとしたものと考察する。すなわち、漆（現在は剥離してほとんどが残っていない）に込められた“赤”と“黒”の関係性、中空である故に起こる“内”と“外”の循環、「生」と「死」の表徴、円と三角（多角形）など多くの二項対立・二項原理の概念がこの土偶1体に込められているとされている。そして、カックウが故意に破壊された状態で発見されていることから、破壊（死）が永遠（生）に転化するという日本的な霊性の原点がカックウの表現にあるとしている。

また、阿部氏をはじめ多くの研究者が、土偶の故意破壊について、「古事記」や「日本書紀」をはじめとする世界各地にみられるハイヌウェレ神話とのかかわりを指摘している。

このようにカックウは、考古学的視点のもとより、美術史や思想史などの他分野にわたる研究資料として、取り上げられている。発見から50年を経た現在においても、縄文時代後期の土偶研究の中核を占める存

在であることに間違いはないであろう。

## 5. グッズ・キャラクターとなったカックウ

発見から50年を迎え、考古学関係者だけでなく、一般の縄文ファンにもカックウは広く支持され、函館市内では、カックウや縄文の応援をとおして、地域おこしやまちづくりを目指す動きも見られる。

北の縄文CLUBは「豊かな自然と共に生きた縄文の精神と文化を学び、北の縄文文化を広く普及することを目的として、そのための研究活動などの事業をおこなう」ことを目的に、南茅部地域の発掘作業員経験者を中心に結成された地域おこし団体で、世界遺産・大船遺跡周辺の清掃活動や、縄文土器づくりおよび野焼き体験、研修旅行（令和6年度は遠軽町白滝）などの活動を行っている。

縄文DOHNANプロジェクトは「この地に遺る縄文の価値を幅広く発信し、地域の皆さま、特に子どもたちの地域を愛する心を育むとともに、縄文を通じた地域づくりを進めるため、様々な活動」を行う有志の団体で、ワークショップ（石器レプリカづくり、和菓子づくりなど）、イベントでの出店、企業とコラボしてのグッズ開発・販売など活発な活動が行われている。

南かやべ料飲店会は、函館市南茅部地区のすし店や仕出し店で構成されるグループで、遺跡が点在する南茅部らしい縄文をテーマにした地域の名物弁当を作ろうと開発された「中空土偶弁当」（図7）や、はこだて縄文まつりへの出店参加などの活動を行っている。

函館縄文スイーツの会は、函館市をはじめ、函館洋菓子協会・北海道菓子工業会函館支部・道南製パン組合などで組織された団体で、各店舗が創意工夫を凝らした和洋菓子「函館縄文スイーツ」の開発を行っている。カックウをモチーフにした商品とし

では、カックウまんじゅう（スイーツギャラリー北じま製造）・縄文クラッチ（キングベーク製造）などの商品があり、土産物店やイベントブースなどで販売され、人



図7. 中空土偶弁当

気を集めている。

また、函館市縄文文化交流センターおよび隣接する道の駅「縄文ロマン南かやべ」でもカックウ関連の商品が多数販売されているので、いくつか紹介したい。

函館市縄文文化交流センターのミュージアムグッズでは、カックウの写真、実測図、キャラクターを素材とした商品を多数販売している。写真を載せたものとしては、ポストカード・クリアファイル・フローティングボールペン・マグネット・アクリルスタンド（図8、カックウ発見50年を記念した期間限定商品）、実測図を生かしたものとしては一筆箋（図9）・Tシャツ・測量野帳・付箋・3Dフィギュア、キャラクター商品（カックウをキャラクター化した「どぐる館長」など）としてはシールシート、ストラップ、ステッカーシール、ピンバッジなどがある。

縄文ロマン南かやべの取扱商品では、モナスク中空土偶・土偶最中（龍栄堂菓子舗製造）・土偶クッキー（美鈴商事製造）のほか、オリジナル商品として駅長ステッカー・どぐるみ（図10、カックウをモチーフにした編みぐるみ）などがある。その他の商品として、湖池屋プライドポテト・

GOTOKEN 縄文サンド・かっくッキー（プティ・メルヴィーユ製造）・縄文和スイーツ缶（和創菓ひとひら製造）・中空土偶キャンドル(majakka candle製造)などがあり、市内の土産物店などで購入することができる。



図8. 中空土偶アクリルスタンド



図9. 一筆箋



図10. どぐるみ

## 6. おわりに

カックウの発見から国宝指定に至るまでに約30年の歳月を要したが、その間、多

くの人々の尽力と熱意によって町の宝として守り伝えられてきた。とりわけ、発見者である小板氏のカックウに対する深い愛情、そして地域の人々の熱い思いを知り、私自身もあらためてその価値を発信し、後世へ確実に継承していかなければならないと強く認識した。

以上、本稿ではカックウが縄文文化の発信において重要な役割を果たしてきたことをはじめ、その研究史や、函館の縄文を代表するアイコンとしての位置づけについて、函館市縄文文化交流センターで業務に携わる立場から整理を試みた。

今後、カックウの価値を広く共有し、縄文文化発信の象徴として、また将来の町づくりに寄与する存在としての活躍を、引き続き支えていきたい。

末筆ながら、本稿の作成にあたり、資料収集等において多大なご協力をいただくとともに、貴重なご意見をお寄せいただいた、函館市縄文文化交流センター学芸員 太田哲也氏に深く感謝申し上げます。

#### (参考文献)

阿部千春, 2010, 「著保内野遺跡出土の土偶とその周辺」『考古学ジャーナル』608:25-28.  
阿部千春, 2012, 「国宝『中空土偶』一生と死の表徴」『北の土偶』, - .  
阿部千春, 2015, 「マルチ・ジェンダーな遺物を生んだ縄文人の思考—著保内野遺跡の土偶と八木B遺跡の土器—」『東北学』5:106-123.  
小笠原忠久, 1976, 「北海道著保内野出土の中空土偶」『考古学雑誌』61(4):44-49.  
設楽博己, 1996, 「副葬される土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』(68):9-28.  
東京国立博物館(編), 2009, 『国宝 土偶展』, 東京国立博物館, 東京都.  
東京国立博物館(編), 2014, 『日本国宝展』, 東京国立博物館, 東京都.  
独立行政法人国立博物館(編), 2002, 『事業報告

書 平成13年4月1日から平成14年3月31日』, 独立行政法人国立博物館, 東京都.  
長沼孝, 1992, 「北海道の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37:52-67.  
長野県立歴史館(編), 2019, 『土偶展』, 長野県立歴史館, 長野県.  
函館市教育委員会(編), 2007, 『著保内野遺跡—平成18年度国庫補助事業による市内遺跡発掘調査事業報告書—』, 函館市教育委員会, 函館市.  
函館市教育委員会(編), 2015, 『函館市縄文文化交流センターガイドブック』, 一般財団法人道南歴史文化振興財団, 函館市.  
原田昌幸, 2010, 「“カックウ”の誕生—土偶、北海道—」『日本の美術』527:38-39.  
文化庁(編), 1996, 『我が国の文化行政 平成8年度』, 文化庁, 東京都.  
北海道博物館(編), 2023, 『ユネスコ世界遺産登録記念 北の縄文世界と国宝』, 北海道博物館, 札幌市.  
三上徹也, 2014, 『縄文土偶ガイドブック』, 新泉社, 東京都.  
水野正好, 1979, 「日本の原始美術5 土偶」, 講談社, 東京都.  
南茅部町史編集室(編), 1987, 『南茅部町史 上・下巻』, 第一法規出版株式会社, 東京都.  
MIHO MUSEUM(編), 2012, 『土偶・コスモス』, MIHO MUSEUM, 滋賀県.  
Maison de la culture du Japon a Paris, 2018, 『Jōmon-Naissance de l'art dans le Japon préhistorique』

#### (函館市縄文文化交流センター学芸員)

# 奉納御役所棟札と松前奉行所

田原 良信

## 1. はじめに

奉納御役所棟札（登録資料名「箱館御役所棟札」、資料番号 H25-0488、図 1）は、旧市立函館図書館収蔵庫に長期にわたって保管され、2014 年 3 月に市立函館博物館へ移管となった江戸時代の歴史資料である。

棟札は、新築の建物および修理の際に、その建物の由緒や建築年月日、建築関係者などを記載し、屋根裏の棟木や梁などの高所に取り付ける木の札である。

新築建物の由来や歴史を知る上で貴重な資料であるとともに、また工事の安全と建物の繁栄を願うお守りの役割も果たしているとされる。

「奉納御役所棟札」は、縦 1,453mm、横 313mm の駒形長方形を呈している。棟札の上部中央には「奉納御役所棟札」の文字が墨書で記されている。

## 2. 棟札の内容

### 2-1. 陰陽五行神

棟札左上側には、日本書記から選ばれた陰陽五行神の配列が墨書されている。

1 列目は、三生 元木神 木祖 句句酒馳命（くくのち）と呼ばれる「木の神」。

2 列目は、二儀 元火神 火祖 軻遇突知命（かぐつち）と呼ばれる「火の神」。

3 列目は、五鬼 元土神 土祖 埴安命（はにやす）と呼ばれる「土の神」。

4 列目は、四殺 元金神 金祖 金山彦命（かなやまひこ）と呼ばれる「金の神」。

5 列目は、一徳 元水神 水祖 罔家女命（みずはのめ）と呼ばれる「水の神」

### 2-2. 天照皇大神

棟札右上側の墨書の記述は、中央部に「天照皇大神」（あまてらすすめおおかみ）が記される。高天原（たかまがはら）の最高神で、太陽の神とされ、皇室の祖神であり、日本国民の総氏神としても信仰される。

右側には、「八幡大神」（はちまんおおかみ）が記される。日本で広く信仰されている神様。全国に多数ある八幡宮の主祭神で、清和源氏をはじめ、武家からは武運の神として崇敬される。

左側には「春日大神」（かすがのおおみかみ）が記され、春日大神は、武甕槌命（たけみかづちのみこと）、経津主命（ふつぬしのみこと）、天児屋根命（あめのこやねのみこと）、比売神（ひめがみ）の四柱神の総称を指す。

また、天照皇大神・八幡大神・春日大神の 3 神の両側に記される、「手置帆負命」（たおきほおいのみこと）と「彦狭知命」（ひこさしりのみこと）は、岩戸開きに貢献した「工匠の祖神」で、天照大神の御殿の造営や、神器の製作などを行ったと伝えられる。

### 2-3. 棟札の取り付けの年月日

棟札右中側には、棟札の取り付けの年月日が墨書されている。

年号の前に付けられる言葉で  
干時、文化七 庚午年  
(時に、1810 年 かのえうま)  
四月 二十一日

### 2-4. 松前奉行所役人

棟札中段には、松前奉行所役人の役職名

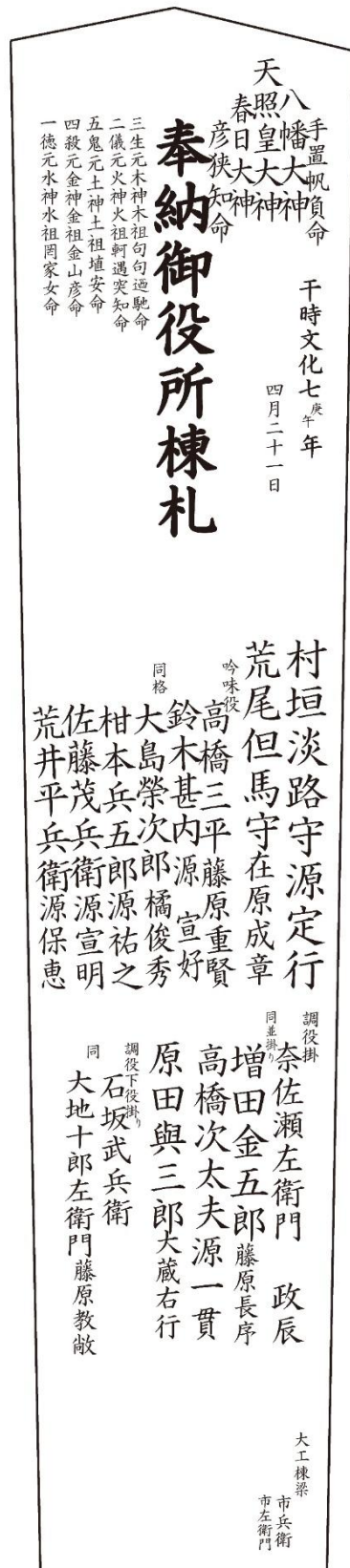
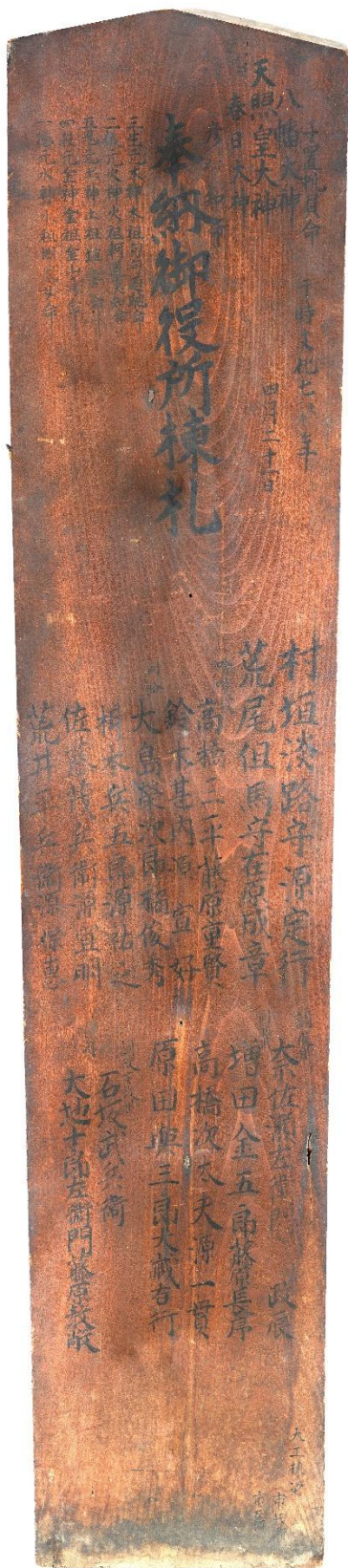


図1. 奉納御役所棟札（左：写真／右：墨書翻刻）

が墨書されている。(以下、棟札右側から左側へ、出自、任命年月日、役職名)

1. 村垣淡路守 (むらがき あわじのかみ)  
(出自) 源 定行 (みなもとさだゆき)  
文化 4 年 11 月 24 日  
(御勘定吟味役) → (松前奉行)
2. 荒尾但馬守 (あらお たじまのかみ)  
(出自) 在原成章 (ありはらなりあき)  
文化 4 年 12 月 22 日  
(御役替御先手) → (松前奉行)
3. 高橋 三平 (たかはし さんぺい)  
(出自) 藤原重賢 (ふじわら しげたか)  
享和 2 年～文化 4 年 (文化 5 年後も継続)  
(松前奉行支配吟味役)
4. 鈴木 甚内 (すずき じんない)  
(出自) 源 宣好 (みなもと のぶよし)  
寛政 12 年～文化 4 年 (文化 5 年後も継続)  
(御勘定吟味方改役) → (松前奉行支配吟味役)
5. 大島榮次郎 (おおしま えいじろう)  
(出自) 橘 俊秀 (たちばな としひで)  
寛政 12 年～文化 4 年 (文化 5 年後も継続)  
(御勘定) → (松前奉行支配吟味役同格)
6. 柑本兵五郎 (こうじもと へいごろう)  
(出自) 源 祐之 (みなもと すけゆき)  
文化 2 年～文化 4 年 (文化 5 年後も継続)  
(御勘定吟味方改役並) → (松前奉行支配吟味役)
7. 佐藤茂兵衛 (さとう もへえ)  
(出自) 源 宣明 (みなもと のぶあき)  
文化 2 年～文化 4 年 (文化 5 年後も継続)  
(松前奉行調役) → (松前奉行支配吟味役格)
8. 荒井平兵衛 (あらい へいべえ)  
(出自) 源 保恵 (みなもと やすえ)  
文化 4 年～ (文化 5 年後も継続)  
(箱館手附出役御勘定) → (調役)

棟札下段にも前奉行所役人の役職名が墨書されている。(同上)

9. 奈佐 瀬左衛門 (なさ せざえもん)  
(出自) 政辰 (まさたつ)  
文化 5 年～

- (御勘定～松前奉行手附出役～調役)
10. 増田 金五郎 (ますだ きんごろう)  
(出自) 藤原 長序 (ふじわら ちょうじょ)  
文化 4 年～  
(小普請組八木十三郎支配～調役並)
11. 高橋 次太夫 (たかはし じだゆう)  
(出自) 源 一貫 (みなもと いっかん)  
文化 7 年～  
(小普請組堀田主税組・松前奉行支配調役並出役)
12. 原田 與三郎 (はらだ よさぶろう)  
(出自) 大蔵 右行 (おおくら うぎょう)  
文化 5 年～  
(御天守番～松前奉行手附出役) → (調役)
13. 石坂 武兵衛 (いしざか たけべえ)  
(出自) なし  
文化 8 年  
(松前奉行調役下役 エトロフ)
14. 大地十郎左衛門 (だいちじゅうろうざえもん)  
(出自) 藤原 教敏 (ふじわらきょうしゅう)  
文化 4 年～  
(松前奉行調役下役 エサシ)
15. 大工棟梁 市兵衛 (だいくとうりょういちべえ)
16. 大工棟梁 市左衛門 (だいくとうりょういちざえもん)

棟札に掲載された計 16 名の内訳は、松前奉行 2 名、支配吟味役 (同格含む) 5 名、調役・調役並・調役下役等 7 名、大工棟梁 2 名という新たな組織構造であった。箱館奉行を松前奉行と改め、松前福山へ新たな政庁が置かれて、これまでの箱館奉行所には支配吟味役 1 名 (大島榮次郎) が在勤する体制へと移り変わる事となった。

### 3. 棟札設置の背景

#### 3-1. 蝦夷地の直轄

1793 年 (寛政 5) にロシア使節ラクスマン一行の箱館入港、1796・1797 (寛政 8・9) 年のイギリスのブロートン率いるプロビデ

ンス号の内浦湾来航など、蝦夷地近海の頻繁な出沒により、幕府は北方警備が急務なことを悟り、1798年（寛政10）に180名からなる大規模な巡察隊を派遣し、蝦夷地直轄の大方針が決定された。

同年12月、書院番頭松平信濃守忠明を蝦夷地取締御用掛に抜擢し、翌年（享和元年）には勘定奉行石川左近将監忠房、目付羽太庄左衛門正養、使番大河内善兵衛政寿、勘定吟味役三橋藤右衛門成方ら5名により、蝦夷地警備や経営についての本格的な調査を開始し、ほぼ経営方法が定まることとなった。

### 3-2. 蝦夷奉行から箱館奉行へ

1802（享和2）年、2月23日に松平忠明、石川忠房、三橋成方およびその他の蝦夷地御用掛を免じて、新たに「蝦夷奉行」を置き、小納戸頭取の戸川筑前守安論と、目付羽太庄左衛門正養の2名を任じた。勤務中兩人（戸川・羽太）とも2,000俵とし、遠国奉行である長崎奉行の次に準ずる格式とした。同年5月10日には「蝦夷奉行」を改めて「箱館奉行」とした。また、7月24日には東蝦夷地の仮上知を永久に幕府の直轄となすべき旨を達し、松前家に対して向後年々金3,500両が渡されることとなった。

なお、享和2年は戸川・羽太の両名とも江戸滞在のまま箱館には赴任せず、翌享和3年閏1月18日に、戸川安論が箱館に在勤し、将軍から対ロシア関係を強く意識した対蝦夷地・アイヌ政策、鎖国体制下のキリシタン禁制の条文などが示された黒印状が下知された。

箱館奉行の下には、吟味役、調役6人、調役並5人、調役下役10人、同心、足輕を配置し箱館奉行所の体制を整えた。奉行は

1年交替にして毎年2月暇（赴任のための将軍への挨拶）を賜り、6月中に交替し、調役および調役下役は3年在勤の形態となった。

箱館奉行所の所在地は、現在の基坂上の「元町公園」の敷地内に相当し、惣構地積3,030坪余（約10,000㎡）、建坪637坪5合余（約2,107㎡）であった。また、文化元年春、亀田にある役所（旧亀田番所）を箱館へ引いて箱館奉行所前へ奉行の交代屋敷（惣構770坪余、建坪218坪）を建てた。

1806年（文化3）10月5日、暁、弁天町河岸市店より出火し、表通り両側を内濶町まで焼け抜け、町家316戸が類焼した。実行寺、称名寺、浄玄寺が類焼し、文化元年に建築された奉行交代屋敷も類焼となったが、役所、官吏の住居は類焼を免れることになった。

### 3-3. 露米会社船の日本北辺襲撃

ロシア使節レザノフは、1805年（文化2）長崎へ来航し通商を要求したが拒絶されたため、1806年（文化3）9月、雇用していた露米商会員フヴォストフに樺太を襲撃させて、運上屋・倉庫・弁天社などを焼き払う事件が発生し、また翌文化4年4月には択捉島シャナがフヴォストフらに襲われて、幕吏および弘前・盛岡兵が同所を引き払うが、調役下役元締戸田又太夫が死亡し、会所・南部陣屋・津軽陣屋などに火を放つなど掠奪がつくされた。

このロシア人択捉島シャナ会所襲撃の報が箱館に到来したのは5月18日のことで、同日に箱館奉行羽太正養は盛岡・弘前両藩に増兵を促すとともに、久保田藩（秋田藩）佐竹右京太夫・庄内藩酒井左衛門尉に臨時人数催促の書簡が送られた。両藩と

もに出兵の準備がなされて、6 月中には 4 藩の兵 3,000 人余が箱館に到着した。

また幕府は、6 月に目付遠山金四郎景晋・使番小菅猪右衛門正容・村上大学義雄・若年寄堀田摂津守正敦に蝦夷地出張を命じ、大目付中川飛驒守忠英も正敦に差添い蝦夷地へ赴いた。

### 3-4. 箱館奉行所から松前奉行所へ

幕府は 1807 年（文化 4）3 月 22 日、松前章広から松前、西蝦夷地一円を召し上げて蝦夷地全域を直轄支配することになり、松前章広へは新規 9,000 石を下付することとなった。これに伴い箱館奉行所は松前の福山館へ移されて、松前奉行所へ改称となった。以下は松前奉行の系譜・歴任である。

[戸川筑前守安論]

享和 2 年 2 月 23 日 蝦夷地奉行（任命）

享和 2 年 5 月 10 日 箱館奉行（改称）

文化 5 年 4 月 6 日 松前奉行（罷免）

[羽太庄左衛門正養]

享和 2 年 2 月 23 日 蝦夷地奉行（任命）

享和 2 年 5 月 10 日 箱館奉行（改称）

文化 4 年 11 月 18 日 松前奉行（罷免）

[川（河）尻 春元]

文化 4 年 10 月 24 日 松前奉行（任命）

文化 6 年 7 月 4 日 西丸御持弓頭転任

[村垣 定行]

文化 4 年 10 月 24 日 松前奉行（任命）

文化 5 年 2 月 28 日 福山到着

戸川安論と交替

文化 7 年 7 月 1 日 江戸出発松前へ

文化 9 年 2 月 13 日 病氣免官・寄合

[荒尾 成章]

文化 4 年 11 月 22 日 松前奉行（任命）

文化 6 年 1 月 28 日 江戸出発松前へ

文化 10 年 1 月 25 日 普請奉行へ転任

[小笠原 長幸]

文化 9 年 2 月 勘定奉行・松前奉行（兼任）

文化 9 年 8 月 29 日 松前で死去

[服部 貞勝]

文化 9 年 10 月 1 日 松前奉行（任命）

文化 13 年 5 月 4 日 勘定奉行・松前奉行

兼務

[安藤 惟久]

文化 10 年 4 月 7 日 松前奉行（任命）

文化 12 年 8 月 12 日 西丸先手頭に転じる

[本多 繁文]

文化 12 年 11 月 12 日 松前奉行（任命）

文化 13 年 3 月 26 日 福山へ到着し服部

と交替

[夏目 信平]

文化 14 年 2 月 2 日 松前奉行（任命）

文政 5 年 7 月 24 日 西丸留守居へ転任

[高橋 重賢（三平）]

享和 2 年 箱館奉行支配吟味役（任命）

文政 3 年 3 月 松前奉行（任命）

文政 5 年 6 月 長崎奉行を任命したが、跡役は任命されず、松前奉行はこの年をもって廃止となり、江戸幕府の蝦夷地派遣は終了となった。そして蝦夷地全域の経営は、再び松前藩士の手により行われることとなった。

松前奉行が廃止となる前年の 1821 年（文政 4）12 月 7 日に、松前章広は老中青山下野守から松前蝦夷地一円が還与される旨が申し渡され、従来の知行 9,000 石は幕府へ返上されることになった。

1822 年（文政 5）4 月 13 日、松前藩家老蠣崎将監広年と同松前内藤広純は、幕府松前奉行支配吟味役森覚蔵より、福山城および福山より北蝦夷地（カラフト）まで西地一円の引渡しを受けた。

#### 4. 奉納御役所棟札の由来

「奉納御役所棟札」は、1810年(文化7)4月21日に松前奉行所内の上棟へ取り付けられて奉行所竣工となった。松前奉行所の開庁から11年後の1821年(文政4)に、松前藩の松前蝦夷地一円の一割の還与に伴い廃止となり、翌文政5年に松前奉行支配吟味役森覚蔵により松前藩へ松前蝦夷地一円の一割の引渡しが行われ、幕府派遣の松前奉行所員は全て江戸へ帰還となった。また、松前奉行所建物はそのまま松前藩の新たな役所として再利用された可能性が考えられる。

1849年(嘉永2)幕府は、蝦夷地近海に出没する外国船に要害を固めて築城する旨を命じた。これに伴い、松前藩は松前奉行所を解体撤去し、福山館の敷地を拡張して新城建設を実施することが決定された。その後、松前奉行所建物内に所在していた「奉納御役所棟札」は、建物から取り外され、松前福山周辺の神社への奉納、もしくは松前藩の役所等に公文書・歴史史料として収納されたものと考えられる。

この後、1854年(安政元)の蝦夷地再直轄時に、松前藩から箱館奉行所および箱館市中が幕府へ引渡しとなり、その際に公文書・歴史史料として当該の棟札も含まれていた可能性は高かったと考えられる。

いずれにしても、この棟札が松前から箱館に移管・収蔵された時期は不明であるが、複数の行政機関に引き継がれて、最終的に旧市立函館図書館書庫に収蔵されたと推定される。2014年に市立函館博物館に移管されて展示公開されたが、棟札の内容解読はされていなかった。このため、博物館研究紀要の中で「奉納御役所棟札と松前奉行所」として紹介することに至った。

#### (参考文献)

- 秋月俊幸, 2014, 『千島列島をめぐる日本とロシア』, 北海道大学出版会, 札幌市.
- 大蔵省(編), 1922, 『日本財政経済史料 巻4』, 財政経済学会, 東京都.
- 宇治谷孟, 1993, 『日本書紀 前現代語訳 上』, 講談社, 東京都.
- 宇治谷孟, 1994, 『日本書紀 前現代語訳 下』, 講談社, 東京都.
- 上白石実, 2011, 『幕末の海防戦略—異国船を隔離せよ—』, 吉川弘文館, 東京都.
- 倉野憲司(校注), 1963, 『古事記』, 岩波書店, 東京都.
- 永田久, 1982, 『暦と占いの科学』, 新潮社, 東京都.
- 函館区(編), 1911, 『函館区史』, 函館区, 函館区.
- 函館市史編さん室(編), 1980, 『函館市史 通説編 第1巻』, 函館市, 函館市.
- 函館市史編さん室(編), 2007, 『函館市史 年表編』, 函館市, 函館市.
- 函館日日新聞社(編), 1935, 『函館市誌』, 函館日日新聞社, 函館市.
- 福岡竹次郎・佐藤慶吉, 1899, 『函館沿革史』, 旭堂, 函館.
- 松尾晋一, 2013, 『江戸幕府と国防』, 講談社, 東京都.
- 水野杏紀, 2016, 『易、風水、暦、養生、処世—東アジアの宇宙観—』, 講談社, 東京都.
- 吉野裕子, 1983, 『陰陽五行と日本の民俗』, 人文書院, 東京都.
- 羽太正養, 『休明光記 巻之一〜巻之五』(札幌市中央図書館デジタルライブラリー <https://gazo.library.city.sapporo.jp/>より)
- 林復斎, 『通航一覧 巻274〜306』(東京大学史料編纂所近世編年データベース <https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/>より)

林復齋, 『通航一覽附録 卷之 5〜23』 (東京大学  
史料編纂所近世編年データベース [https://  
www.hi.u-tokyo.ac.jp/](https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/)より)

(元市立函館博物館長)

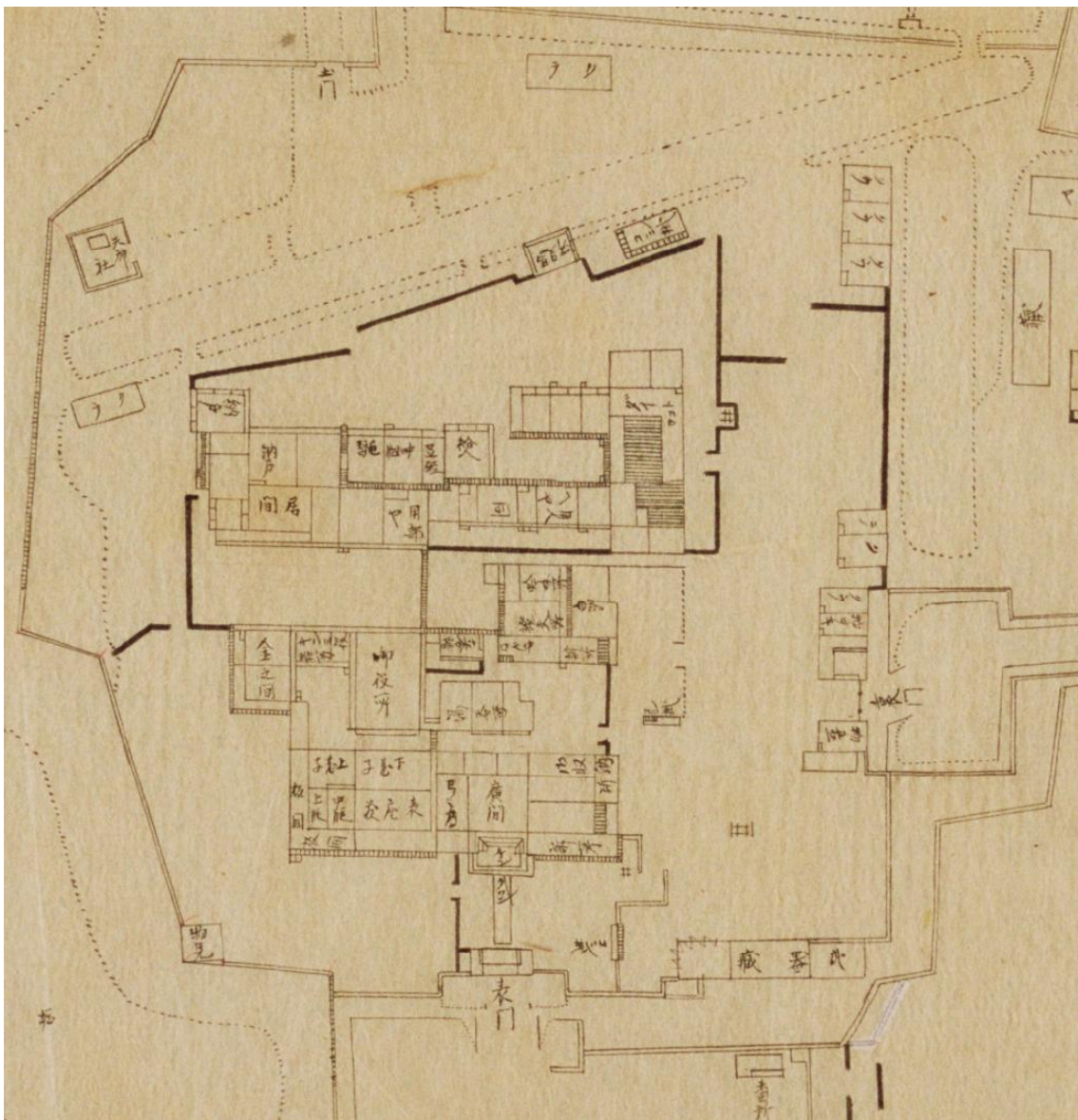


図2. 1810年(文化7)松前福山館跡に完成した松前奉行所建物配置図  
(国立公文書館デジタルアーカイブより)

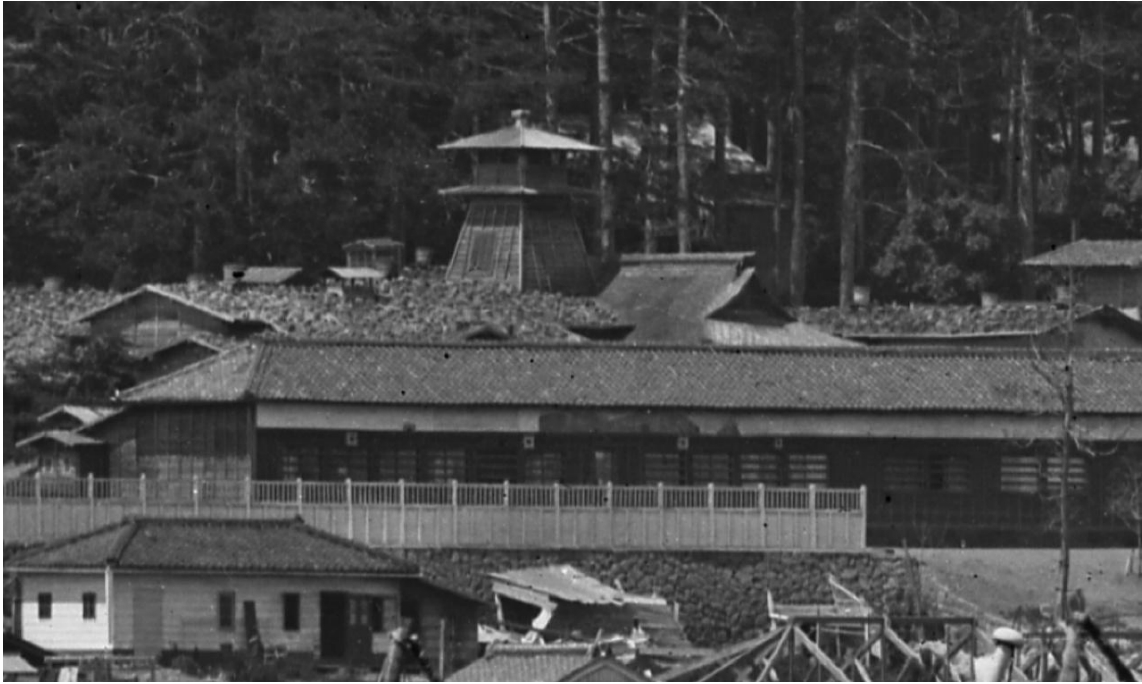


図3. 現元町公園内に所在した旧箱館奉行所建物（函館市中央図書館所蔵）

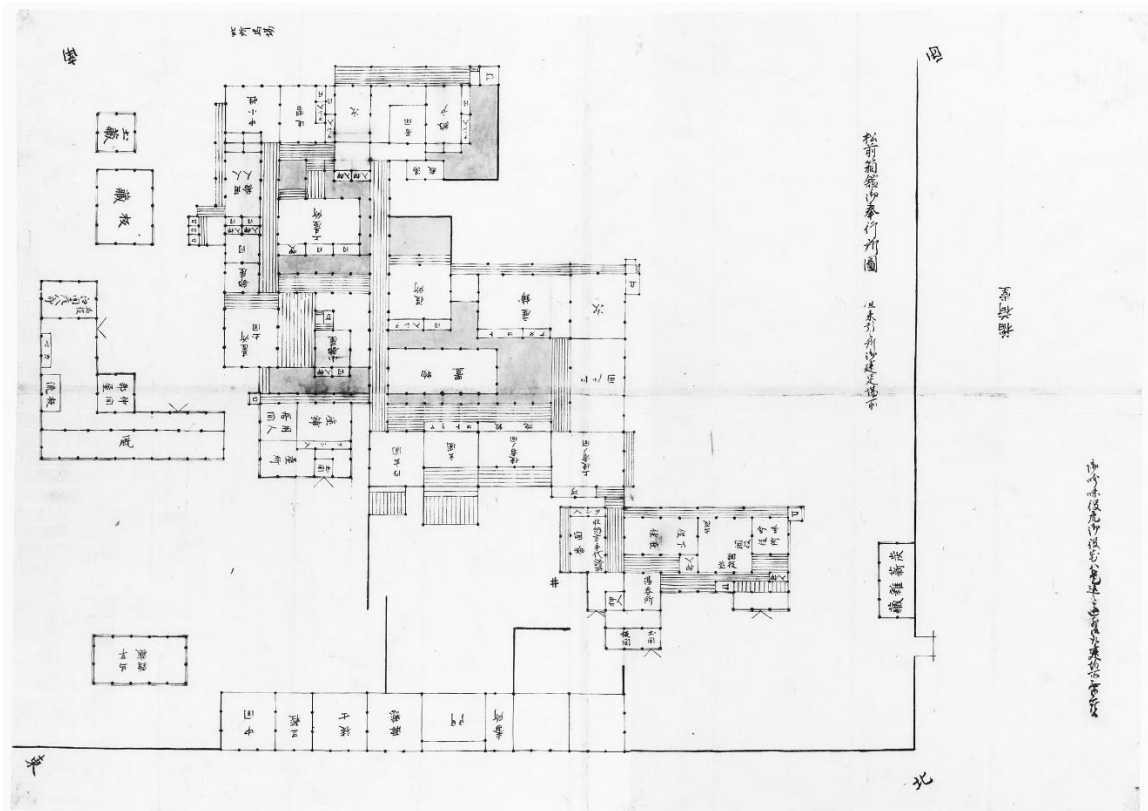


図4. 現元町公園内に所在した旧箱館奉行所建物（文化5年以降は松前箱館奉行所建物配置図）  
（国文学研究資料館デジタル収蔵歴史アーカイブズデータベースより）

# 函館市所蔵の石製・金属製装身具の 化学組成とその解釈

飯塚 義之・柳瀬 由佳

## 1. はじめに

石器は先史時代の文化を特徴づけるモノとして、形式や型式、それらの地域的、時期的な相違が広く研究されている。特に、玉器と称される装身具は、色や形の特徴が顕著で、また出土数も稀であることから、広域的な比較をする上で重要な遺物のひとつとされている。石器の材料物質（石材）たる岩石は、その種類ごとにそれぞれ物理的、化学的な特徴が異なる。すなわち石器の用途や製作技法を比較検討する上で、あるいは石材の地質学的な由来を知る上で、岩石の記載情報は基本的かつ重要といえる。考古学的な調査では、通例肉眼観察による石材分類がなされている。しかしながら肉眼による岩石の判別は、観察者の経験に頼ることが多いため、色相など肉眼的な特徴を捉えた分類がなされてはいるが、地質学的あるいは岩石学的には誤った記述が少なくない。そこで筆者らはエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（ED-XRF）や可搬型蛍光 X 線分析装置（ $p$ -XRF）を使用した埋蔵文化財の完全非破壊化学組成分析（non-invasive chemical analysis）から石材の岩石学的な再記載を行い、広域的な物質交流に関する情報の再構築を進めている。

このたび函館市教育委員会に収蔵されている石製・金属製装身具について  $p$ -XRF を用いた完全非破壊化学分析による材料物質の判別を試みた。本報告では、化学分析の結果とこれまでの類例を含め、石材からみた物質交流についての所見を述べる。

## 2. 分析した資料とその来歴

$p$ -XRF を用いた化学分析の対象資料を表 1、写真 1、図 1 に示す。今回調査した資料は、函館市合併前の旧南茅部町の八木 A 遺跡（#1）・ハマナス野遺跡（#2～4）、旧戸井町の浜町 A 遺跡（#5～6）から出土した縄文時代前期～中期に属する玦状耳飾 6 点、網走市モヨロ貝塚から出土したオホーツク文化に属する石製環飾 3 点（#7～9）、戦前に収集された樺太アイヌ民族の耳飾り 2 件 3 点（#10・11）である。以下に各資料の来歴等について述べる。文中の資料番号と、図表で示す番号は共通のものである。文中で準拠する玦状耳飾の類型分類を図 2 に、玦状耳飾の部位名称を図 3 に示す。

### 2-1. 資料#1

八木 A 遺跡出土の灰白色を呈する玦状耳飾で、縄文時代「前期前葉の包含層」から出土している（南茅部町埋蔵文化財調査団 1995）。柳瀬（2017）の ED-XRF による化学組成分析からネフライト製と確認されている。類型は平面形状が環状を呈する金環形で、外周が整っており正円に近い。孔側の断面形は三角形で、見通しで台形となる特徴的な形態を呈する。裏面は平坦。切目はやや蛇行しており、切目面には糸切技法の特徴とされる突出部と弧状の凹凸（藤田 2004、堀江 2009 など）が観察され、切目作出が糸切技法によることが確認できる（写真 1: #1 拡大写真）。現時点で道内唯一の糸切技法の確認例である（坂本他 2021）。裏面には中央孔の外側をめぐるよ

表 1. 調査対象資料一覧

資料番号	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9	#10	#11	
分析番号	HCM-1	HCM-2	HCM-3	HCM-4	HCM-5	HCM-6	HCM-7	HCM-8	HCM-9	HCM-10-1	HCM-10-2	HCM-11
遺跡名	八木 A						浜町 A		樺太アイヌ民俗資料			
所属時期	縄文時代 前期前葉	縄文時代 前期末葉～ 中期前葉?	縄文時代 前期後葉?	縄文時代 前期後半～ 中期?	縄文時代 中期前半?	縄文時代 前期後半～ 中期?	縄文時代 中期後半～ 中期?	オホーツク文化期	1930～1940年代収集			
形式・類型	块状耳飾 金環形	块状耳飾 三角形	块状耳飾 三角形	块状耳飾 三角形	块状耳飾 楕円形?	块状耳飾 楕円形	石製環飾	石製環飾 (鉄製補助具)	石製環飾	ニンカリ 耳飾り	ニンカリ 耳飾り	ニンカリ 耳飾り
引用元	南茅部町埋蔵 文化財調査団 1995 図275-83	南茅部町教育 委員会 1983 第141図4	南茅部町埋 蔵文化財調 査団1991 180頁HP- 200-11	報告書未掲 載(縄文文 化交流セン ター展示)	戸井町教育 委員会1991 図134-57	戸井町教育 委員会1991 図134-92	大場利夫 1957 第30図1120	大場利夫1957 第30図1119	河野廣道1958 第33図 名取武光・大場 利夫1964 別冊Fig.8-27	財団法人アイ ヌ文化振興・ 研究推進機構 2004 22ページ19左	財団法人アイ ヌ文化振興・ 研究推進機構 2004 22ページ19右	財団法人アイ ヌ文化振興・ 研究推進機構 2004 22ページ20
色調	灰白色	緑灰色	明緑灰色	オリーブ色	オリーブ色	暗青灰色	明緑灰色	明緑灰色	明緑灰色	(カリガラス)	(カリガラス)	(カリガラス)
石材	ネフライト	ネフライト	ネフライト	滑石	滑石	緑色片岩	ネフライト	ネフライト	曹長石岩(飯)	(カリガラス)	(カリガラス)	(カリガラス)
ネフライトの 原岩タイプ	D	S	S	-	-	-	D	D	-	-	-	-
縦軸長, cm	4.1	(3.3)	4.5	(2.8)	(2.4)	53	4.2	5.0	(6.3)	7.7	8.0	10.2
横軸長, cm	4.1	(2.9)	(3.8)	(3.5)	(3.2)	(2.2)	4.2	5.0	(13.1) 推定13.3	5.0	5.1	5.9
厚さ, cm	1.3	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.3	0.42/0.65・0.73※	0.7	-	-	-
孔縦軸長, cm	-	-	-	-	-	-	2.1	2.3	推定5.7	-	-	-
孔横軸長, cm	-	-	-	-	-	-	2.0	2.1	-	-	-	-
金属環(太さ, cm)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.20-0.27	0.25	0.23-0.29
金属環(材料)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	真鍮(Zn#36)・ニッケルメッキ	大小ともに銀
重さ, g	24.9	(6.7)	(9.9)	(72)	(4.8)	(8.9)	8.7	19.3※	(85.8)	28.6	21.5	15.7

ネフライトの原岩タイプ: D ドロマイト型, S 蛇紋岩型. 法量の ( ) は現存値, ※は金属補修部材を含む.



写真 1. 調査対象資料

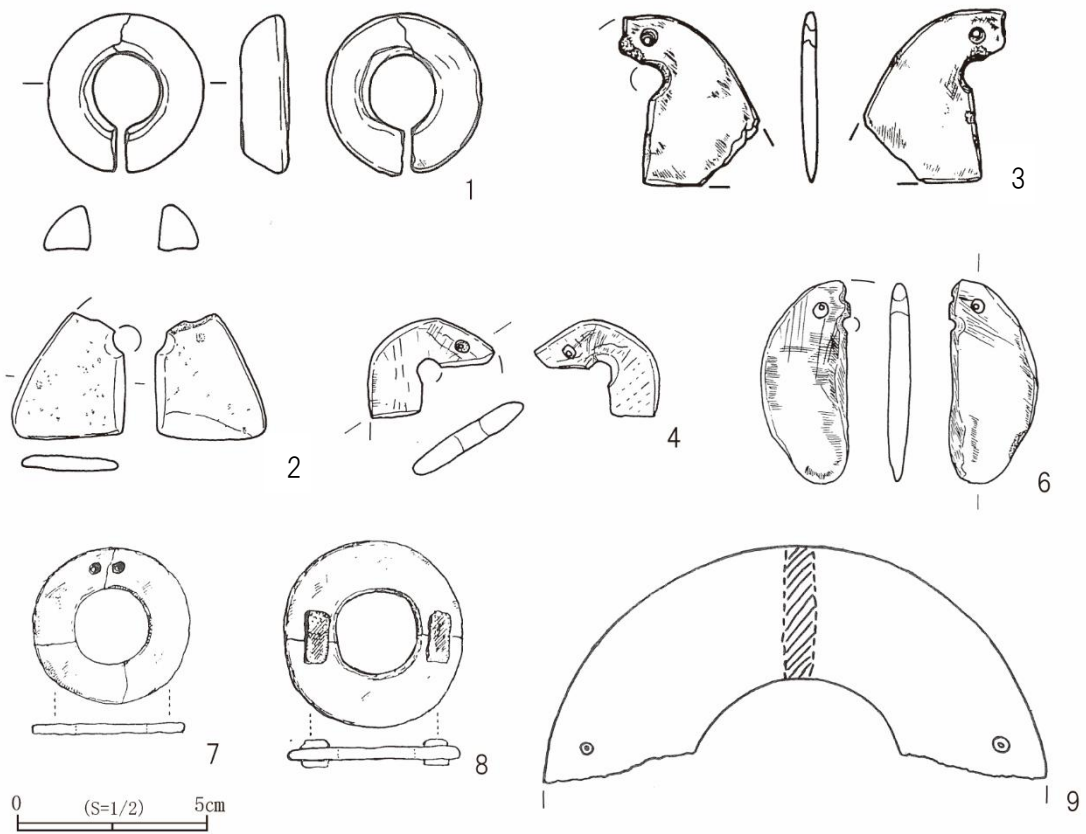


図1. 分析対象資料(各報告書から一部改変・転載)

類型	浮輪形	金環形	「有明山社」型	指貫形	円盤形・「缺状」	三角形	楕円形
	時期						
早期	後葉						
	末葉						
前期	初頭						
	中葉						
	後葉						
	末葉						
	末葉						
中期	初頭						
	中葉						

図2. 缺状耳飾の類型編年(川崎 2004 図2)

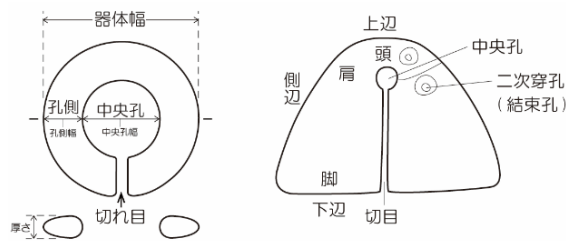


図3. 玦状耳飾の部位名称  
(坂本他 2021 図2・柳瀬 2017 図IV-180)

うに円弧状の凹凸が認められ、糸切技法によって素材を切り出した「製材」（堀江2009）・「連続切断」（鄧2019）の痕跡の可能性はある。石材の色調は灰白色（10YR9/1）で、斑状・脈状の半透明～褐色部が観察される。

## 2-2. 資料#2

ハマナス野遺跡の昭和57年調査で、縄文時代前期末葉（サイベ沢Ⅲ式：円筒下層d2式）の竪穴住居跡HP-113の「覆土中部層」であるX<sub>2</sub>層から出土（南茅部町教育委員会1983）。同一層からの出土として円筒下層d2式～円筒上層a式とみられる土器が掲載されており、所属時期は前期末葉～中期前葉の可能性が考えられる。類型は三角形。石材色調は緑灰色基調で、斑状～層状の黒色部が観察される。

## 2-3. 資料#3

ハマナス野遺跡の平成2年調査で、縄文時代前期後葉（サイベ沢Ⅱ式：円筒下層d1式）の竪穴住居跡HP-200の覆土から出土（南茅部町埋蔵文化財調査団1991）。覆土出土として円筒下層d式とみられる復元土器が掲載されており、所属時期としては前期後葉の可能性はある。石材については、ED-XRFによる化学組成分析から「透閃石-透緑閃石」、「いわゆるネフライト」と同定され、同質の石材は「茅部郡周辺では産出しないので、他の地域から運ばれたもの

と考えられる」とされている。類型は三角形。石材色調は明緑灰色基調。

## 2-4. 資料#4

ハマナス野遺跡出土の報告書未掲載の資料。所属時期は遺跡の存続期間である縄文時代前期後半～中期か。類型は三角形。石材色調はやや透明感のあるオリーブ色基調で、黒色の包有鉱物が散在する。表面には擦痕が観察される。

## 2-5. 資料#5

浜町A遺跡の縄文時代前期末葉（円筒下層d式）の竪穴住居跡HP-20の覆土から出土（戸井町教育委員会1991）。覆土出土の土器は「最も多いのは上層c・上層d式土器である」ことから、所属時期は中期前半の可能性はある。類型は楕円形と推定される。石材は#4と類似しており、明緑灰色基調で、同じく表面には擦痕が観察される。

## 2-6. 資料#6

浜町A遺跡のC区遺構外から出土（戸井町教育委員会1991）。C区遺構外の掲載土器としては中期前半～後期前葉が、C区から連続する斜面であるD区遺構外では前期後半円筒下層b式が多くある。所属時期としては前期後半～中期の可能性はある。類型は楕円形。石材色調は暗青灰色。

## 2-7. 資料#7 および#8

網走市モヨロ貝塚出土のオホーツク文化に属する石製環飾。1941・1942年に米村喜男衛・児玉作左衛門らによって行われた、海軍施設建設に先立つ緊急の発掘調査（米村2004）による資料として、1957年に大場利夫により報告されている（大場1957）。出土状況の詳細は明らかでないが、「軟玉製耳環は副葬品として五個出土した」「撥掘の際頭蓋の附近に現れた」（児玉1948、

下線は筆者注)とされる。石材は軟玉とされており、色調は明緑灰色で透明感がある。

2点はそれぞれに補修がなされている。ともに扁平でほぼ正円の環状を呈し、道立北方民族博物館展示のモヨロ貝塚出土資料(米村 1950・飯塚 2024)や枝幸町目梨泊遺跡出土資料(枝幸町教育委員会 1988・1994)と形態的特徴がよく類似する。

中央の孔は、#7では写真の上方向、#8では上下方向にやや突出し略楕円形となる。孔の縁辺は突出部周辺で光沢があり、断面形は丸みを帯びていることから、摩耗しているとみられる。石製環飾の孔の摩耗・突出は、網走市モヨロ貝塚から銀環との組み合わせで出土した資料にも確認されており(飯塚・柳瀬 2024)、製作時は円形であった孔が金属製耳飾と組み合わせた使用により摩耗し変形したものと推測される。#8については同様の指摘が児玉(1948)・大場(1957)でもなされている。また、道立北方民族博物館展示のモヨロ貝塚出土資料でも確認されている(飯塚 2024)。

#7は3つの破片に割れたものが接着されている。出土状況は明らかでないが、報告では「破損品で三個に破れているが、二箇所は粘着剤で密着し、一個所には両片から相対して直径0.2糎の小孔を穿つてこれを連結している」とされる(大場 1957)。左側小孔付近では、直線的な段差とそれに並行する擦痕が認められる(写真1:#7拡大写真)。類似した段差と擦痕は、旭川市博物館所蔵のモヨロ貝塚出土の金属環と組み合わせられた環飾でも確認されており(飯塚・柳瀬 2024)、製作痕跡の可能性のあるものとして留意したい。

#8は2つに割れた後に金属製とみられる材料により結合して補修されている。内部の構造は確認できないが、「モヨロに来る前に大陸で細工されたものである」(児玉 1948)、「銚を打って修理を行つている」

(大場 1957)とされる。

## 2-8. 資料#9

同じくモヨロ貝塚から、1947・48・51年に行われたモヨロ貝塚調査団による調査のうち昭和22年調査で出土した資料であり、伊藤他(1964)で報告されている。木槨のある第27号墓から出土しており、出土位置は「骨盤の尾方」(伊藤他 前掲)、「腐蝕した骨格の胸上」(児玉 1950)と記載に違いがあるが、いずれにしても頭部から離れた位置から出土しているようである。石材は「軟玉」と記載されている(伊藤他 前掲、大場 1957)。色調は透明感の強い明緑灰色基調で、部分的に明緑色部がみられる。

外周は整っており、ほぼ正円の円弧をなす。本来は環状であったとするとその半分よりやや小さい破片で、推定直径は13.3cmほどとなる。石製環飾の他の類例と比較して大型であり、出土位置が頭部ではないことと併せ、耳飾りとは異なる用途であることが推測される。

両破損部に近接して両面穿孔の小孔が1か所ずつ穿たれており、その位置から#7のような補修孔である可能性もあるが、単体で副葬されていることから装着用の孔であった可能性も考えられる。

## 2-9. 資料#10 および#11

樺太アイヌ民族の耳飾り(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2004)。函館出身の考古学・民族学者である馬場脩により、樺太西海岸の多蘭泊にて、1935年あるいは1941年に収集された資料である<sup>(1)</sup>。国指定重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に含まれる。金属棒を円環状とする形態がオホーツク文化期の出土資料(飯塚 2024・飯塚・柳瀬 2024 他)と共通することから、参考として分析を行った。

資料#10は2点一対で、端部に球状の装

表 2.  $\rho$ -XRF による石材化学分析結果

資料番号	#1	#2	#3	#7	#8	#4	#5	#9
分析番号	HCM-1	HCM-2	HCM-3	HCM-7	HCM-8	HCM-4	HCM-5	HCM-9
遺跡名	八木 A	ハマナス野		モヨロ貝塚		ハマナス野	浜町 A	モヨロ貝塚
石材	ネフライト	ネフライト	ネフライト	ネフライト	ネフライト	滑石	滑石	(曹長石岩)
ネフライトの 原岩タイプ	D	S	S	D	D	-	-	-
wt. %								
SiO <sub>2</sub>	56.418	53.97	55.61	58.25	57.17	58.64	59.80	72.21
TiO <sub>2</sub>	0.047	0.05	0.05	0.02				0.13
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2.701	6.05	2.19	1.61	2.16	2.51	1.71	21.17
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		0.27				0.05	0.20	
FeO	0.425	6.57	5.03	1.73	1.28	5.24	4.94	
MnO	0.045	0.21	0.16	0.11	0.04	0.03	0.03	
MgO	25.89	20.07	23.74	22.33	24.10	28.65	28.43	
NiO		0.15	0.04			0.24	0.23	
ZnO	0.006	0.01	0.01	0.01	0.02			
CaO	9.492	7.79	8.50	10.85	10.61	0.05		0.36
Na <sub>2</sub> O*								
K <sub>2</sub> O								1.24
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.168			1.27	0.16	0.15		0.65
Total	95.192	95.13	95.32	96.18	95.53	95.55	95.34	95.76
陽イオン比								
O =	23	23	23	23	23	11	11	12
Si	7.76	7.61	7.80	7.95	7.88	3.81	3.88	4.69
Ti	0.005	0.005	0.005	0.002				0.01
Al	0.44	1.01	0.36	0.26	0.35	0.19	0.13	1.62
Cr		0.03				0.002	0.01	
Fe	0.05	0.77	0.59	0.20	0.15	0.28	0.27	
Mn	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.002	0.002	
Mg	5.31	4.22	4.96	4.54	4.95	2.77	2.75	
Ni		0.02	0.004			0.01	0.01	
Zn	0.001	0.001	0.001	0.00	0.00			
Ca	1.40	1.18	1.28	1.59	1.57	0.003		0.03
Na*	-	-	-	-	-	-	-	-
K								0.10
P	0.02			0.15	0.02	0.01		0.04
cation total	14.98	14.86	15.02	14.70	14.92	7.08	7.05	6.49
Mg/(Mg+Fe)	0.991	0.84	0.89	0.96	0.97	0.91	0.91	-
(Mg+Fe)/Si	0.69	0.66	0.71	0.60	0.65	0.80	0.78	-
Si/Al	-	-	-	-	-	-	-	2.89

\* 大気下での $\rho$ -XRF分析では、ナトリウム(Na)が検出できないため、曹長石岩は仮の解釈とする。

空欄は測定限界 (0.05wt.%) 以下を示す。

飾のある金属棒を丸めて円環状とし、有孔の金属製装飾部品と環状製品を通すもの。#11 は大小の金属環と環状製品を連結したものである。

### 3. 材料物質同定のための化学分析手法

$\rho$ -XRF は、対象物を損傷させることなく化学分析 (完全非破壊分析) ができるため、発掘現場や収蔵施設での調査に利用価値が高い。大気中で分析を行うため、ナトリウム (Na) や酸素などの軽元素の分析はできないが、分析の確からしさを確認することで石器石材の判別に応用可能である (飯塚

2022)。

分析はオックスフォード・インストゥルメンツ (Oxford Instruments) 社製の X-MET7500 を使用し、函館市北方民族資料館内で行った。分析対象は分析用の試料台に置き、できるだけ平滑な面で、表面の傷や汚れの影響がないと判断した箇所に対して下方からの X 線照射を行った。

石材分析には、岩石・鉱物分析に対応した軽元素を含む鉱石分析用パラメータ (Mining LE-FP) 法を用い、結果は酸化物の重量パーセント (wt.%) として出力させた。分析対象ごとに両面の数箇所を分析し

た。石材のうち、カルシウム角閃石 ( $\text{Ca}_2[\text{Mg, Fe}]_5\text{Si}_8\text{O}_{22}[\text{OH}]_2$ ) および滑石 ( $[\text{Mg, Fe}]_3\text{Si}_4\text{O}_{10}[\text{OH}]_2$ ) からなる単鉱岩のネフライトと滑石岩については、それぞれの鉱物の理想科学式に基づいた陽イオン比、鉄-マグネシウム比 ( $\text{Mg}\# = \text{Mg}/[\text{Mg} + \text{Fe}]$ ) を計算し、測定結果の評価を行った。いずれも表面の傷や汚れの影響がないと判断し分析値を結果として示す(表2)。分析と石材判別の手順は飯塚・小野(2020)、飯塚(2022)を参照されたい。

ケイ酸塩ガラスの分析に関しては、本研究の  $\mu$ -XRF 分析では Na の分析ができないため、ソーダガラスの同定ができない。そのため出力された元素の相対濃度とルーペを用いた目視観察から「ガラス」と判別した。金属材料の分析には、合金分析用パラメータ (Alloy LE-FP) 法を用い、結果は元素の重量パーセント (wt. %) として出力させた。金属、合金の判別は検出された元素の存在度から判断した。分析の手順は飯塚(2025a) に準じている。

#### 4. 石材分析の結果と考察

##### 4-1. 玦状耳飾

資料#1~#6 の玦状耳飾のうち、類型分類が金環形の八木A遺跡出土の資料(#1)は、 $\text{Mg}\#0.99$  を示す鉄をほとんど含まない透閃石からなるDタイプのネフライト製であった。ハマナス野遺跡出土の三角形2点(#2、#3)は、 $\text{Mg}\#0.9$  以下の緑閃石からなるSタイプのネフライト、同じくハマナス野遺跡出土の三角形1点(#4)および浜町A遺跡出土の楕円形1点(#5)は、 $\text{SiO}_2$  (wt. %) 値と  $(\text{Mg} + \text{Fe})/\text{Si}$  比から滑石岩製と同定した。浜町A遺跡出土の楕円形1点(#6)は単鉱岩との判別ができず、緑色片岩とした。

これまでに分析によって確認されているDタイプネフライト製の白色を呈する玦状耳飾は、福井県桑野遺跡15点(飯塚

2025b)・同県鳥浜貝塚1点(飯塚・鯨本2023)・群馬県下鎌田遺跡1点(中村・飯塚2020)・栃木県根古谷台遺跡2点(飯塚2025b)がある。このうち前三者は類型が浮輪形の玦状耳飾であり、縄文時代早期末~前期初頭の最古のタイプに含まれる(川崎2004、藤田2002・2003・2013)。

このうち桑野遺跡資料(あわら市教育委員会2019)は、国内で類例の非常に少ない「白色材」(木下2013)として注目されてきた。白色材の玦状耳飾(玦飾)については、共伴する篋状垂飾や管玉とともに、藤田富士夫、川崎保、鄧聰らによって、中国東北部やロシア沿海州地方との強い関連や直接的な交流の可能性が指摘されている。その主な根拠として、藤田は、玦状耳飾や篋状垂飾の形態の類似(藤田1996・2002)、玦状耳飾の切目作出における糸切(糸鋸)技法の存在(藤田2004)を挙げる。川崎は、玦状耳飾・篋状垂飾・管玉の形態の類似と装身具セットとしての共通性などから、中国東北部から沿海州経由での波及を推測している(川崎2006・2008)。鄧はそれらに加えて、外周形態が規格的で正円に近いことから轆轤による製作が推測されることを挙げ、東アジア大陸からの舶来品である可能性を示す(鄧2019、鄧・李2019)。さらに石材については飯塚(2025b)による岩石学的な化学分析により、白色材が国内に地質学的な産地報告の事例のないDタイプの透閃石ネフライト製と確認されたことは、上記の見解と矛盾しない。

八木A遺跡の玦状耳飾の特徴を桑野遺跡の舶来品と指摘されている資料と比較すると、切目が糸切技法によること、平面形態が円形で外周が真円に近いこと、白色の透閃石ネフライト製であることは、大陸由来の根拠とされる特徴との共通点が認められる。類型は桑野遺跡の浮輪形に対し金環形であるが、中国査海遺跡では形態・大きさ

の類似する金環形の珉状耳飾が出土している（五十嵐 2005、鄧・李 2019：巻頭図版 31）。このことは、桑野遺跡例と同様に八木A遺跡例にも、大陸由来の可能性あることを示すと考えられる。ただし八木A遺跡では、篋状垂飾や管玉の出土が確認されていない点で桑野遺跡とは相違しており、慎重な検討が必要である。

類型が三角形の珉状耳飾の石材に滑石とネフライトがあることは、46点の珉状耳飾が出土した福島町館崎遺跡や津軽海峡を挟んだ青森県でも確認されており（柳瀬 2017、飯塚・杉野森 2020）、北海道南部から北東北地方広域の様相を示しているものと予見される。今後、集成と石材分析を通して検討していきたい。

#### 4-2. 石製環飾

網走市モヨロ貝塚出土の石製環飾3点のうち、2点（#7、#8）が透閃石からなるDタイプのネフライトから製作されていた。大型の環飾1点（#9）の化学分析結果は、Si/Al比において、ヒスイ岩を示す「2」を上廻るものの、有意な量のCa、Mg、Feが検出されず、一方でカリウム（K）を含有することから、大気下での $p$ -XRF分析では検出されないナトリウム（Na）を含む曹長石（albite）からなる石材である可能性があると推察した。石材の同定には、今後、SEM-EDSあるいはED-XRFなど実験室での分析装置による確認が必要である。

オホーツク文化に属する石製環飾の類例は、道内では網走市モヨロ貝塚（飯塚 2024、飯塚・柳瀬 2024 他）、枝幸町目梨泊遺跡（枝幸町教育委員会 1988・1994）からの出土例、また、並行する続縄文文化に属する小樽市蘭島遺跡D地点の出土例（小樽市教育委員会 1992、飯塚・柳瀬 2026）がある。さらに大陸では靺鞨系文化の遺跡からの出土例があり、形態および肉眼的な石材の特

徴の類似性から、北海道の石製環飾はこれら大陸の文化集団からもたらされたものと考えられてきた（菊池 1976、高島 1998）。

これまでの筆者らの石材分析により、モヨロ貝塚出土の3例（飯塚 2024、飯塚・柳瀬 2024）、目梨泊遺跡出土の2例（飯塚：発表準備中）、小樽市蘭島遺跡D地点の2例（飯塚・柳瀬 2026）が鉄をほとんど含まない透閃石を主体とするDタイプのネフライト製であることが明らかにされている。上述のとおり、地質学的な観点からDタイプの透閃石ネフライトは北海道を含む日本列島にその産地が確認されていないこと（飯塚 2025）や、日本国内における類例の希少さから、これら石製環飾が東部ユーラシアからの渡来品と推測するに矛盾がない。

石材の議論からは逸れるが、資料#7の補修痕の継ぎ目部分からは硫黄（S）成分とネフライト（透閃石）に比して過剰なカルシウム（Ca）成分が検出された。また、資料#8の茶色の継ぎ目部分からは、同じくネフライトに比して過剰な鉄（Fe）成分が検出された。したがって、それぞれの環飾は、石膏と鉄による補修が行われたものと推測される。

条件付きではあるが曹長石岩製とした石製環飾は今回が初めての確認例となる。大きさと出土状況から他の石製環飾とは異なる用途が推測される。オホーツク文化の環状の石製品には、いわゆる玉質の「玉環」とは石材や大きさの異なる例が他にもみられ、実験室でのより確からしい化学分析による石材の同定は必須であるが、考古学的な出土状況の精査や類例の確認、類型化による検討も必要である。

#### 4-3. 樺太アイヌ民俗資料の金属部品

資料#10の円環状の金属は、ニッケルメッキを施した真鍮製と判断した。真鍮の銅

-亜鉛比( $\#Zn=Zn/[Cu+Zn]$ )はいずれも 36%であった。資料#11 の円環は、大、小ともに銀製で、わずかに金 ( $Au/[Au+Ag]\leq 1\%$ ) を含む。これらの化学的な特徴は、北海道立北方民族博物館収蔵の伝来品(飯塚 2024)に類似している。

## 5. まとめ

北海道市立函館博物館所蔵の石製遺物について、携帯型蛍光 X 線分析装置 (*p*-XRF) を用いた完全非破壊化学分析調査を行った。装飾品のほとんどはいわゆる玉質で、透閃石からなる(ドロマイト型:Dタイプ)および緑閃石からなる(蛇紋岩型:Sタイプ)のネフライト、滑石および曹長石からなる単鉱岩から製作されている。縄文時代前期の八木 A 遺跡出土の白色 D タイプネフライト製の珧状耳飾は、考古学的な背景、特に製作技法や石材の化学組成において、桑野遺跡をはじめとする本州の縄文遺跡早期末から前期に属する白色を呈するネフライト遺物に類似している。さらに、北海道東部網走のオホーツク文化のモヨロ貝塚から出土した石製環飾(玉環)石材の化学的特徴も、これまでの分析結果と一致し、D タイプのネフライトで製作されていることが確認された。分析結果はこれらの遺跡の文化的背景が北東ユーラシア地域の文化と何らかのつながりを持っている可能性があることを支持する。また、北海道南部から北東北地方の縄文時代に出土例のある緑色の装飾品の類例が、S タイプのネフライト製および緑色の滑石岩製であることが確認できた。このことは今後の周辺地域の文化的物質的な交流を検討するうえで大変興味深い成果であるといえる。

## 謝辞

本調査を実施するにあたり、函館市教育委員会の福田裕二氏、奥野進氏、大矢京右

氏には資料準備、情報提供などで大変お世話になりました。特に分析当日には、調査対象資料を函館市北方民族資料館に集成していただきました。本研究は日本学術振興会 科 研 費 JP21K00987、JP20H05817、JP21K18378 の助成を受けたものです。関係各位に記して感謝いたします。

## (脚注)

(1) 函館市教育委員会大矢氏のご教示による。

## (参考文献)

あわら市教育委員会(編), 2019, 『あわら市埋蔵文化財調査報告第3集 桑野遺跡』, あわら市教育委員会, あわら市.

飯塚義之, 2022, 「石材・玉器」『科学分析はじめてガイドーサンプリングから解釈まで』, pp. 26-29, 科学研究費助成事業学術変革領域研究 (A)「中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ」計画研究 A02「考古遺物の材料分析と産地推定」.

飯塚義之, 2024, 「モヨロ貝塚出土のネフライト製玉環と銀環の化学分析とその考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』, 33:1-15.

飯塚義之, 2025a, 「可搬型蛍光 X 線分析装置を用いた金属器の非破壊化学分析」『和泉市久保惣記念文化財団東洋美術研究所紀要』, 23:54-58.

飯塚義之, 2025b, 「縄文時代前期の玉器石材-東部ユーラシアにおけるネフライトの利用と流通」『中国文明の起源と伝播』, 188-233, 吉川弘文館, 東京都.

飯塚義之・杉野森淳子, 2020, 「完全非破壊化学分析による石器石材研究-青森県立郷土館収蔵石製品の石材同定-」『青森県郷土館研究紀要』 44: 35-43.

飯塚義之・鯨本眞友美, 2023, 「非破壊化学分析による鳥浜貝塚出土の縄文石器石材研究:二種類のネフライト製石器の再発見」『鳥浜貝塚研究』, 7:23-35.

飯塚義之・小野章太郎, 2020, 「完全非破壊化学

- 分析による宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の石材研究」『宮城考古学』, 22:137-156.
- 飯塚義之・柳瀬由佳, 2024, 「旭川市博物館所蔵石製・金属製遺物の非破壊化学分析とその考察」『旭川市博物館研究報告』, 30/『旭川市科学館研究報告』, 19:8-13.
- 飯塚義之・柳瀬由佳, 2026, 「小樽市蘭島遺跡 D 地点出土ネフライト製品の非破壊化学分析とその考察」『小樽市総合博物館紀要』, 36:19-24.
- 五十嵐睦, 2005, 「第4節 玉器」『東アジアにおける新石器文化と日本』, II:273-276, 306-308.
- 伊藤昌一・駒井和愛・名取武光・大場利夫・斎藤忠・佐藤達夫・吉田章一郎, 1964, 「網走モヨロ貝塚」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』, 下巻別篇.
- 枝幸町教育委員会(編), 1988, 『目梨泊遺跡』, 枝幸町教育委員会, 枝幸町.
- 枝幸町教育委員会(編), 1994, 『目梨泊遺跡』, 枝幸町教育委員会, 枝幸町.
- 大場利夫, 1957, 「モヨロ貝塚出土の石器」『北方文化研究報告』, 12:167-221. (北海道大学北方文化研究室復刻 1987『北方文化研究報告』6)
- 小樽市教育委員会(編), 1992, 『蘭島遺跡 D 地点』, 小樽市教育委員会, 小樽市.
- 川崎保, 2004, 「玉の類型編年 塊状耳飾」『季刊考古学』, 89:17-20.
- 川崎保, 2006, 「第2節 中国東北・沿海州から見た縄文玉製品」『東アジアにおける新石器文化と日本』, III:95-104.
- 川崎保, 2008, 「縄文時代玉製品にみられる大陸文化の影響」『国際日本文化研究センター共同報告 古代東アジア交流の総合的研究』, 261-286.
- 菊池俊彦, 1976, 「オホーツク文化にみられる鞆鞆・女真系遺物」『北方文化研究』, 10:31-117.
- 木下哲夫, 2013, 「桑野遺跡出土石製装身具に用いられた白色材-対構成塊状品の形態と出土位置から-」『玉文化』, 10:171-179.
- (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(編), 2021, 「ポータブル型蛍光 X 線分析装置による石器石材の分析」『宿戸遺跡発掘調査報告書』, 第1分冊:416-418.
- 河野廣道, 1958, 「先史時代篇」『網走市史』, 上巻:1-280.
- 児玉作左衛門, 1948, 『モヨロ貝塚』, 北海道原始文化研究会出版部, 札幌市.
- 児玉作左衛門, 1950, 「モヨロ貝塚人の埋葬に就て」『考古学雑誌』, 36-4:22-24.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編), 2004, 『樺太アイヌ民族誌 工芸に見る技と匠』, 帯広百年記念館, 帯広市.
- 坂本尚史・柳瀬由佳・高島孝宗, 2021, 「『野幌原生林付近』出土の塊状耳飾と管玉 オホーツクミュージアムえさし所蔵新岡武彦コレクションから」『枝幸研究』, 12:31-41.
- 高島孝宗, 1998, 「オホーツク文化における大陸系遺物の分布について」『考古ジャーナル』, 436:11-15.
- 鄧聰, 2019, 「東北アジアの早期軟玉文化情報革命の伝播-日本桑野遺跡玉器の来源について-」『令和元年度秋季企画展開連フォーラム 桑野遺跡から見た縄文世界』, 3-14.
- 鄧聰・李有騫, 2019, 「北東アジアからみた桑野遺跡出土の玉塊」『桑野遺跡』, 207-211.
- 戸井町教育委員会(編), 1991, 『浜町A遺跡II』, 戸井町教育委員会, 戸井町.
- 中村由克・飯塚義之, 2020, 「下鎌田遺跡の塊状耳飾の蛍光 X 線分析とその再評価」『下仁田町自然史館研究報告』, 5:19-26.
- 名取武光・大場利夫, 1964, 「モヨロ貝塚出土の文化遺物」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』, 下巻別篇:42-63.
- 藤田富士夫, 1996, 「篋状垂飾についての一考察」『画龍点睛-山内清男先生没後 25 年記念論集-』, 173-180.
- 藤田富士夫, 2002, 「日本列島の塊状耳飾の始原に関する試論」『縄文時代の渡来文化 刻紋付有孔石斧とその周辺』, 173-180.
- 藤田富士夫, 2003, 「環状型塊状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿

記念論文集』，39-48.

藤田富士夫，2004，「大陸渡來說を考える」『季刊考古学』，89:72-75.

藤田富士夫，2013，「石製装身具論（始源期）-塊状耳飾研究の現在-」『公開シンポジウム縄文時代装身具の考古学-身体の装飾をどうとらえるか-予稿集』，69-74.

堀江武史，2009，「糸切り技法による塊状耳飾の製作」『塊状耳飾（塊飾）の製作技術からみた玉文化交流 発表予定稿集』，58-65.

南茅部町教育委員会（編），1983，『ハマナス野遺跡IX』，南茅部町教育委員会，南茅部町.

南茅部町埋蔵文化財調査団（編），1991，『後駒B遺跡・ハマナス野遺跡』，南茅部町埋蔵文化財調査団，南茅部町.

南茅部町埋蔵文化財調査団（編），1995，『八木A遺跡II・ハマナス野遺跡』，南茅部町埋蔵文化財調査団，南茅部町.

米村喜男衛，1950，『モヨロ貝塚資料集』，網走郷土博物館，網走市.

米村衛，2004，『シリーズ遺跡を学ぶ001 北辺の海の民 モヨロ貝塚』，新泉社，東京都.

柳瀬由佳，2017，『福島町館崎遺跡』第3分冊 石器編，公益財団法人北海道埋蔵文化財センター.

（中央研究院地球科学研究所研究技師／金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授／岡山大学文明動態学研究所客員研究員・公益財団法人北海道埋蔵文化財センター主査）

# サイベ沢遺跡出土骨角器の製作と利用

## —市立函館博物館所蔵資料に基づいた検討—

算用子 眞充

### 1. はじめに

本稿の対象となるサイベ沢遺跡では1949年の発掘調査で貝層から多くの骨角器が出土した<sup>(1)</sup>が、未報告資料が多く眠っていた。筆者は市立函館博物館の協力を得て、同館が所蔵する未報告の骨角器を整理した。そこで本稿では、既報告資料と筆者が整理を行った未報告資料の整理成果を総合し、現時点での器種組成・形態的特徴・製作技術などの基礎的な分析を通じて、遺跡における骨角器の利用と製作の実態を周辺遺跡と比較しながら考察する。

### 2. 資料の概要と整理方法

#### 2-1. 資料の概要と帰属時期

サイベ沢遺跡の発掘調査や土器編年の詳細については福田裕二の論考に詳しく、本稿における資料の帰属時期も同論考に則っている<sup>(2)</sup>。本稿では1949年の調査で出土した既報告資料と筆者が資料化した資料の合計55点を分析対象とする。なお、今回筆者が整理した未報告資料には出土層位が確定できないものがあるが、第1・2地点のいずれかの貝層から出土した可能性が高いと考えられる。したがって帰属時期を絞ることができない資料については第2地点第3貝層の円筒下層d式期を上限とし、第2地点第1貝層の円筒上層b式期を下限として幅を持たせざるを得なかった。判別できた注記など詳細情報は観察表(表1)に示した。

#### 2-2. 整理・図化の方法

今後の資料利用の便を考慮し、既報告資

料は報告書への掲載図番号をそのまま資料番号として用いた。一方で未報告資料は筆者が「サイベ沢遺跡骨角器1」～「サイベ沢遺跡骨角器37」まで番号を付した。資料は2024年6月に写真撮影、同年9月・10月に図化した。いずれも市立函館博物館において行った。原図はAdobe社Illustratorでトレースし、既報告資料はAdobe社Photoshopで加工し、版組を行った。版の縮尺は3分の2で統一した<sup>(3)</sup>。器種名については青谷上寺地遺跡の報告にしたがった<sup>(4)</sup>。

### 3. 資料の観察結果

#### 3-1. 釣針形骨角器(図1-1~3)

3点観察し、全て図示した。図1-1は鹿角製の無鏃の資料である。チモト部に溝がある。図1-2・3は結合式の針部である。とくに図1-3は結合式の軸部の未成品と考えられる。針部はいずれも内側への逆刺が1つつき、陸棲哺乳類骨製と思われる。

#### 3-2. 銛頭状骨角器(図1-4・5)

2点図示した。図1-4は報告書に実測図が記載されているものの資料の実見はできなかった。頭部を三角形に作出する開窩式で、尾部の形状は判然としないが、残存部位から判断する限り尾部が別れず、穿孔などの加工も持たない。図1-5は加工が完了していないと思われるが、銛頭状骨角器を指向している可能性が高いためここに分類した。表面の剥落が激しいが鹿角製と考えられ、ところどころに黒色の付着物がある。

板状の素材であったものを研磨で調整し、頭部を作出した状態と考えられる。このあとソケットを作出することが推定される。

### 3-3. 尖頭状骨角器(図 1-6~10・図 2-1~11)

尖頭状骨角器については定形的でない資料を単純尖頭状骨角器とし、先端が細くなる資料を錐形尖頭状骨角器と呼ぶ。

#### a. 単純尖頭状骨角器(図 1-6~10・図 2-1~9)

観察した 15 点のうち 14 点を図示した。図 1-6 は鹿角を使用している。基部に縦方向の回転穿孔による穿孔を持ち、先端部は欠損している。図 1-7 は細身の資料である。先端部と基部を欠損し、縦に擦痕が見える。図 1-8 は中手/中足骨と思われる管状骨を使用した細身の資料である。先端は比較的鈍い。図 1-9 は管状骨を打ち割った骨片の先端部を研磨したものである。図 1-10 は大型哺乳類の橈骨と考えられる。先端部は破損しているが研磨痕と思われる擦痕が観察できたため骨角器と認定し、ここに分類した。

素材不明の資料が図 2-1~5 である。図 2-1 は基部側が破損しており、比較的太く、断面は不正円形を呈する。図 2-2 は大部分が欠損していると思われる。長軸状にソケットのような溝があるため、銚頭状骨角器のような資料であったかもしれないが、断定ができないためここに分類した。図 2-3 は扁平な資料であり、胴部は比較的幅広である。管状骨を打ち割った骨片を研磨したものである。図 2-4 の基部は破損しており、器体はわずかに反る。先端部は摩耗している。図 2-5 は中央に細い溝が走り、鱗棘といった細身の魚骨を使用している可能性があるが、決定打に欠ける。図 2-6 は細身の資料であるが、横位に溝があり、糸などを巻いて使用した可能性がある。

魚骨製と考えられる資料は 3 点観察し、全て図示した。図 2-7 はエイ尾棘の先端部

と思われるが断定はできない。図 2-8・9 はいずれも部位は不明であるが、形状から同一部位を使用していると考えられる。魚骨製と思われるが、詳細な同定は不可能であった。

#### b. 錐形尖頭状骨角器(図 2-10・11)

錐形を呈する資料は図 2-10・11 の 2 点観察し、全て図示した。10 は鹿角製である。いずれも破損し、先端部のみが残る。

### 3-4. ヤス先状骨角器(図 2-12)

ヤス先状骨角器は図 2-12 の 1 点のみ確認した。エイの尾棘製である。なお、アスファルトの付着など明確な着柄痕跡は確認できない。

### 3-5. へら状骨角器(図 2-13)

へら状骨角器は図 2-13 の 1 点確認した。クマと思われる大型獣の尺骨製である。近位端を欠き、骨幹部から遠位端にかけて縦に半裁し、外側を取り除いている。

### 3-6. 針状骨角器(図 3-1~7)

針状骨角器は図 3-1~7 の 7 点確認し、全て図示した。基本的には基部に穿孔がある。図 3-1 は細く短い小型である。図 3-2・3 は図 3-1 に近い長さであるが、扁平であり、わずかに湾曲する。図 3-4 は中手/中足骨製の大型の資料であり、よく研磨される。図 3-5~7 は破損した資料である。図 3-5 は図 3-1 に、図 3-7 は図 3-4 にそれぞれ近い大きさであったと思われる。図 3-7 は基部が欠損しており、穿孔部が残存していない。なお、穿孔が確認できる資料は全て回転穿孔である。

### 3-7. 針入れ形骨角器(図 3-8)

図 3-8 の 1 点のみ確認した。鳥の管状骨を横方向に擦り切っている。また側面にはおそらく破損と思われる亀裂がある。

### 3-8. 鯨骨製品(図 3-9・10)

図 3-9・10 の 2 確認し、図示した。図 3-9 は頭部をうちわ形に作出し、キノコの軸のように下に伸びる。10 は片方の縁辺が鋭く作出される。縦断面形は三角形を呈する。

### 3-9. 装飾品(図 3-11~15)

装飾品と思われる資料は 7 点確認し、そのうち図 3-11~15 の 5 点図示した。

#### a. 歯牙製品(図 3-11)

図 3-11 はイノシシの上顎犬歯の歯根部側に回転穿孔しているが、穿孔部で破損している。垂飾と思われる。

#### b. 椎骨製品(図 3-12・13)

椎骨製品は 3 点確認し、そのうち図 3-12・13 の 2 点を図示した。3 点すべてがサメ類の椎骨の中心に回転穿孔している。

#### c. 管状品(図 3-14・15)

管状品は 3 点観察し、そのうち図 3-14・15 の 2 点を図示した。すべて鳥類の管状骨を横に擦り切りしている。いずれも破損はない。また、線刻と言った装飾も見られない。

### 3-10. 器種不明品・破損品(図 4-1~4)

ここまでの器種に分類できなかったもの、あるいは破損して全体形が不明の資料は図 4-1~4 の 4 点確認し、全て図示した。図 4-1 は骨柄として報告されている。管状骨に四角形の穴を開けている。大きな破損はない。図 4-2 は破損品である。扁平な針状骨角器の擦り切りで穿孔された穿孔部の破片の可能性があるが断定はできない。針状骨角器にしては面の研磨が荒い。海棲哺乳類骨製と思われる。図 4-3 は穿孔部を持つ尖頭状骨角器のような器種が穿孔部で破損したと思われるが、針状骨角器と比較すると穿孔部で急に太くなることなど、多少の差異が見られることから、穿孔を持つ髪針といった装飾品と考えられる。図 4-

4 も同様に穿孔を持つ装飾品と思われる。また、実際に貫通している部分以外にもう一箇所穿孔を試みたと考えられる盲穴がある。

### 3-11. 加工痕が残る資料(図 4-5~7・図 5-1~3・図 6-1~3)

加工痕が残る資料は 14 点確認し、うち図 4-5~7・図 5-1~3・図 6-1~3 の 9 点図示した。鹿角製の資料は 4 点確認したうち図 4-5~7 の 3 点図示した。図 4-5 は幹部を横位に分割後、さらに縦位に分割する。板状鹿角を作り出す途中であった可能性がある。図 4-6・7 は鹿角尖部である。図 4-6 は分割の際の刃ズレと考えられる線状痕が残る、加工途中であったことが伺える。図 4-7 は図 4-6 のような資料からさらに縦位に分割している。

シカ中手/中足骨の資料が図 5-1~3 の 3 点確認し、全て図示した。図 5-1 は中足骨を縦位に半裁している。遠位端の滑車は未癒合である。図 5-2 も同様に中足骨を縦位に半裁している。途中で折れており、遠位端のみ残存する。図 5-3 は遠位端の滑車部分に横から溝を入れている。

海獣骨製と思われる資料が図 6-1 である。全体として銛頭状骨角器のような形である。しかし、銛頭状骨角器の製作途上品だとすると全体的に薄く、ソケットといった銛頭状骨角器に特徴的な属性がみられないため、断定はできない。また、尾部に当たる部分に鉤状のひっかかりのようなものがあり、何かを引っ掛ける機能を持っている器種とも考えられる。

素材となった動物種・部位不明の資料が図 6-2・3 の 2 点である。図 6-2 は管状骨の骨片の割れ口が滑らかに研磨されている。図 6-3 は擦り切った後に残った骨片である。製作時に出た残滓であろう。

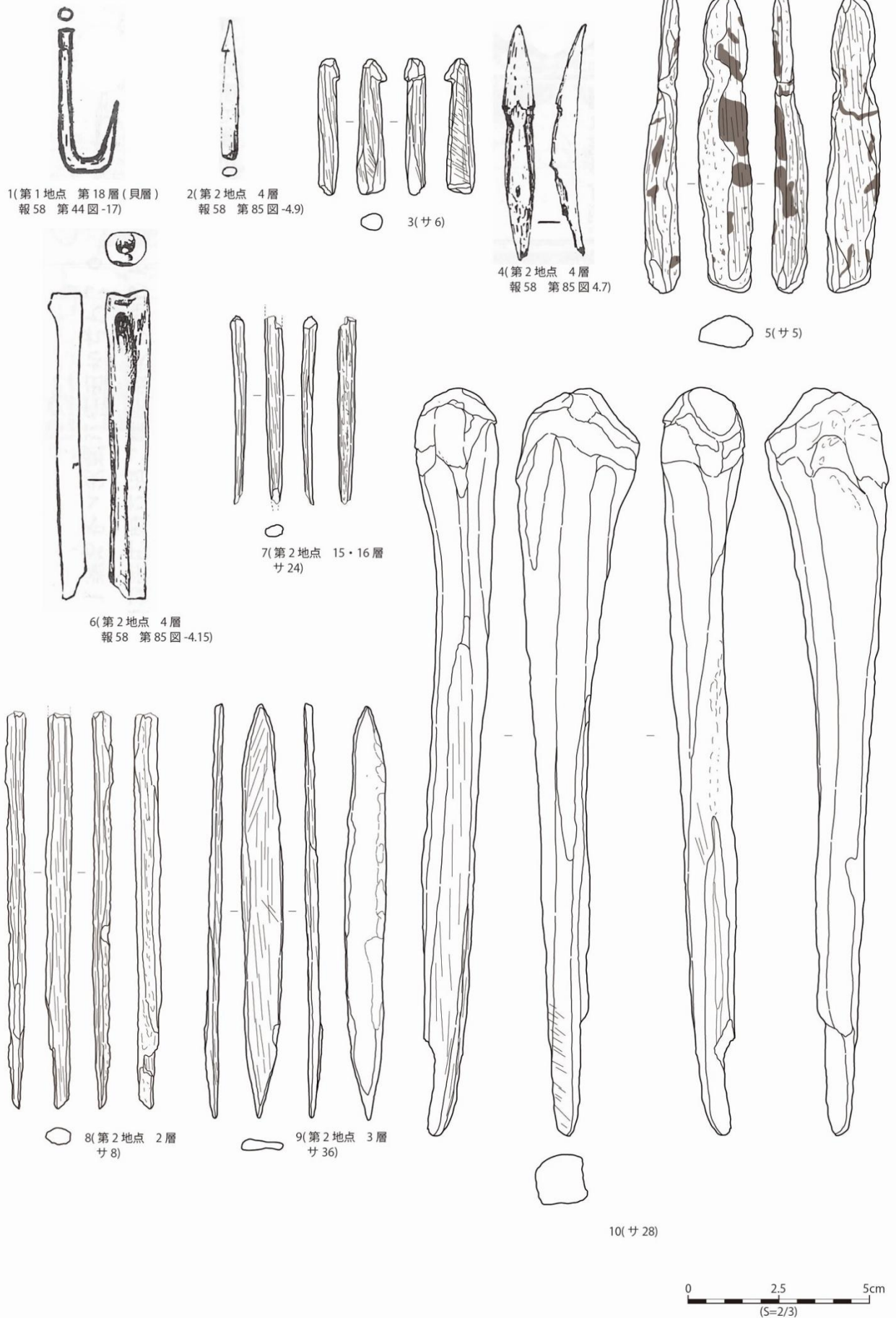


図1. サイベ沢遺跡出土釣針形骨角器・鉤頭状骨角器・尖頭状骨角器<sup>(5)</sup>

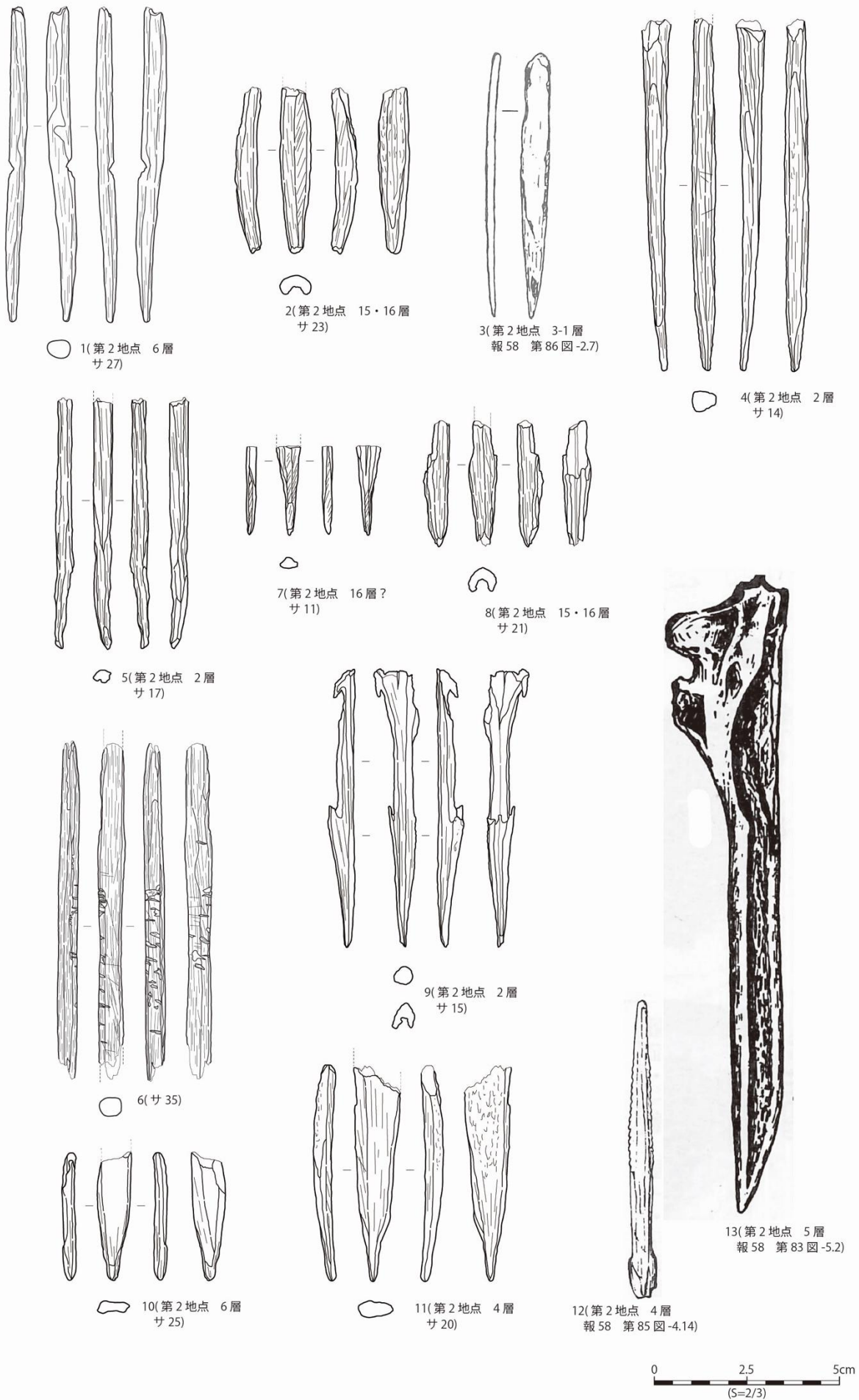


図2. サイベ沢遺跡出土尖頭状骨角器・ヤス先状骨角器・へら状骨角器<sup>(6)</sup>

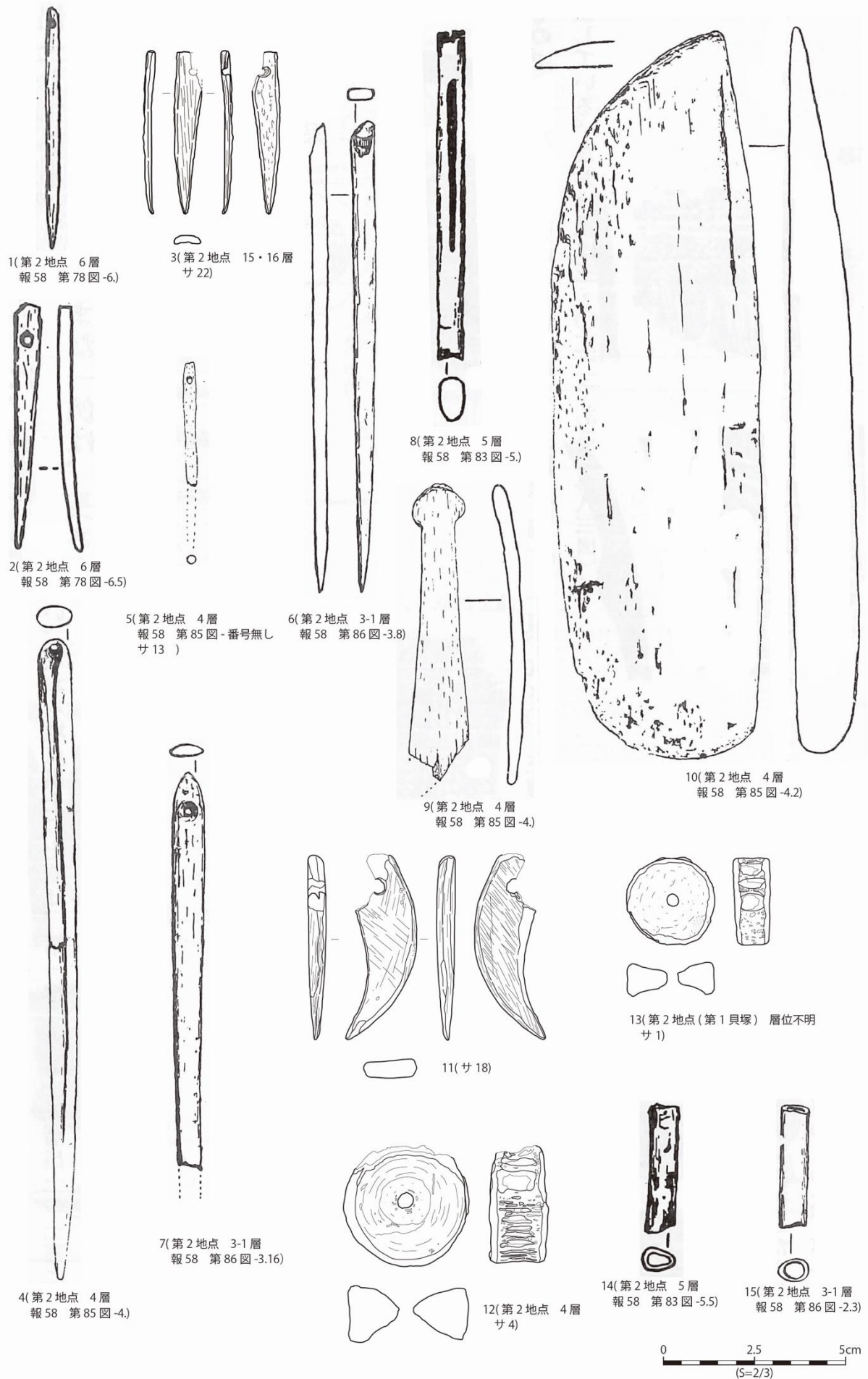
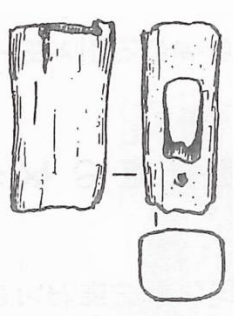
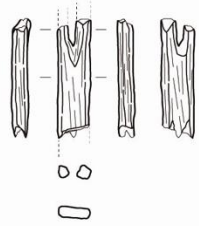


図3. サイベ沢遺跡出土針状骨角器・針入れ形骨角器・鯨骨製品・装飾品<sup>(7)</sup>



1(第2地点 7層  
報58 第72図-7.2)



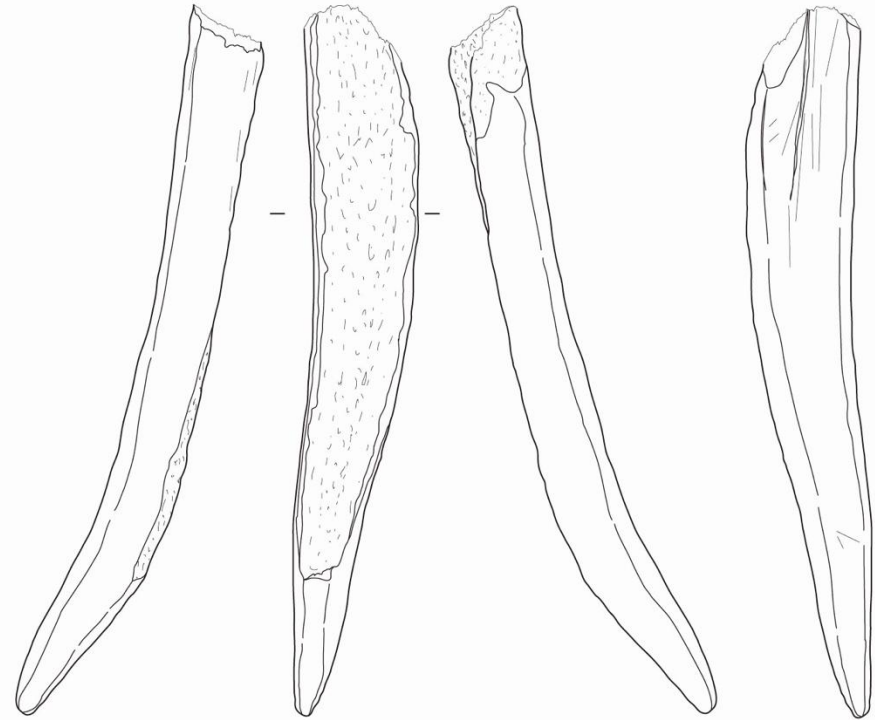
2(第2地点 6層  
サ26)



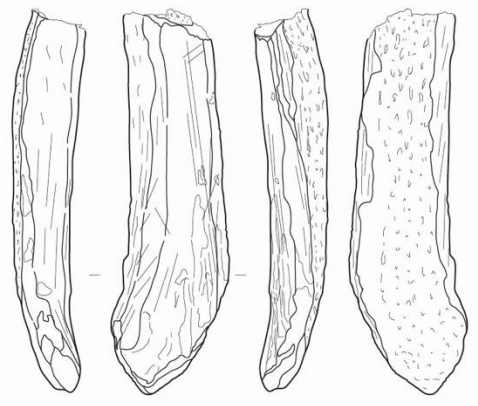
4(第1地点?  
サ32)



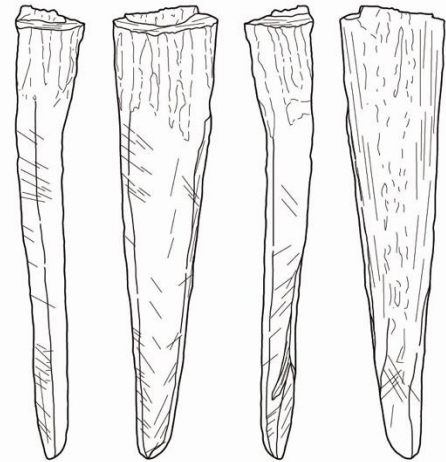
3(第2地点 5層  
報58 第83図-5.13)



6(出土地点 層位不明  
サ3)



5(第2地点 4層  
サ7)



7(出土地点 層位不明  
サ19)

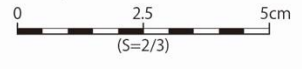


図4. サイベ沢遺跡出土破損品・器種不明品・加工痕が残る資料<sup>(8)</sup>

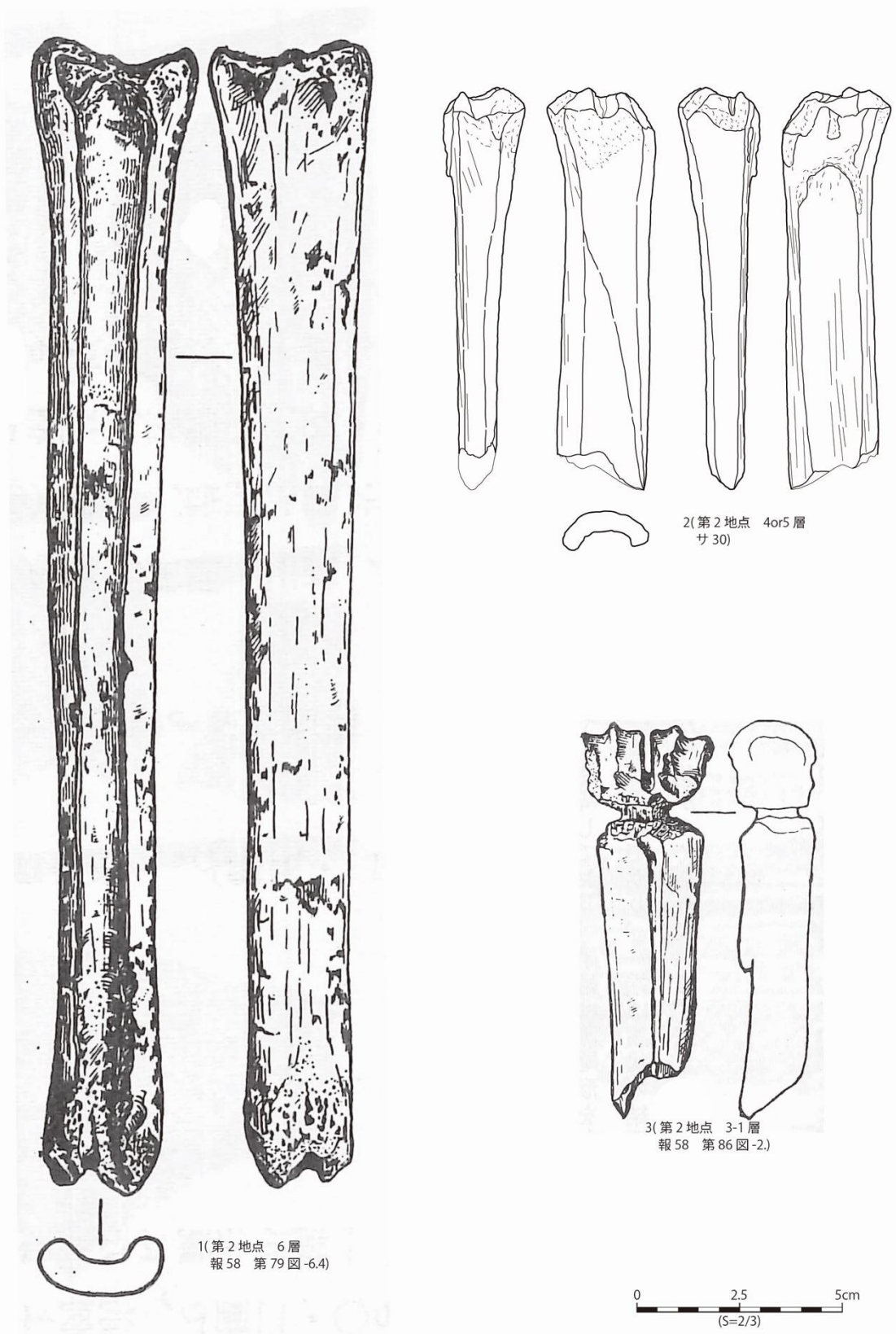


図5. サイベ沢遺跡出土加工痕が残る資料<sup>(9)</sup>

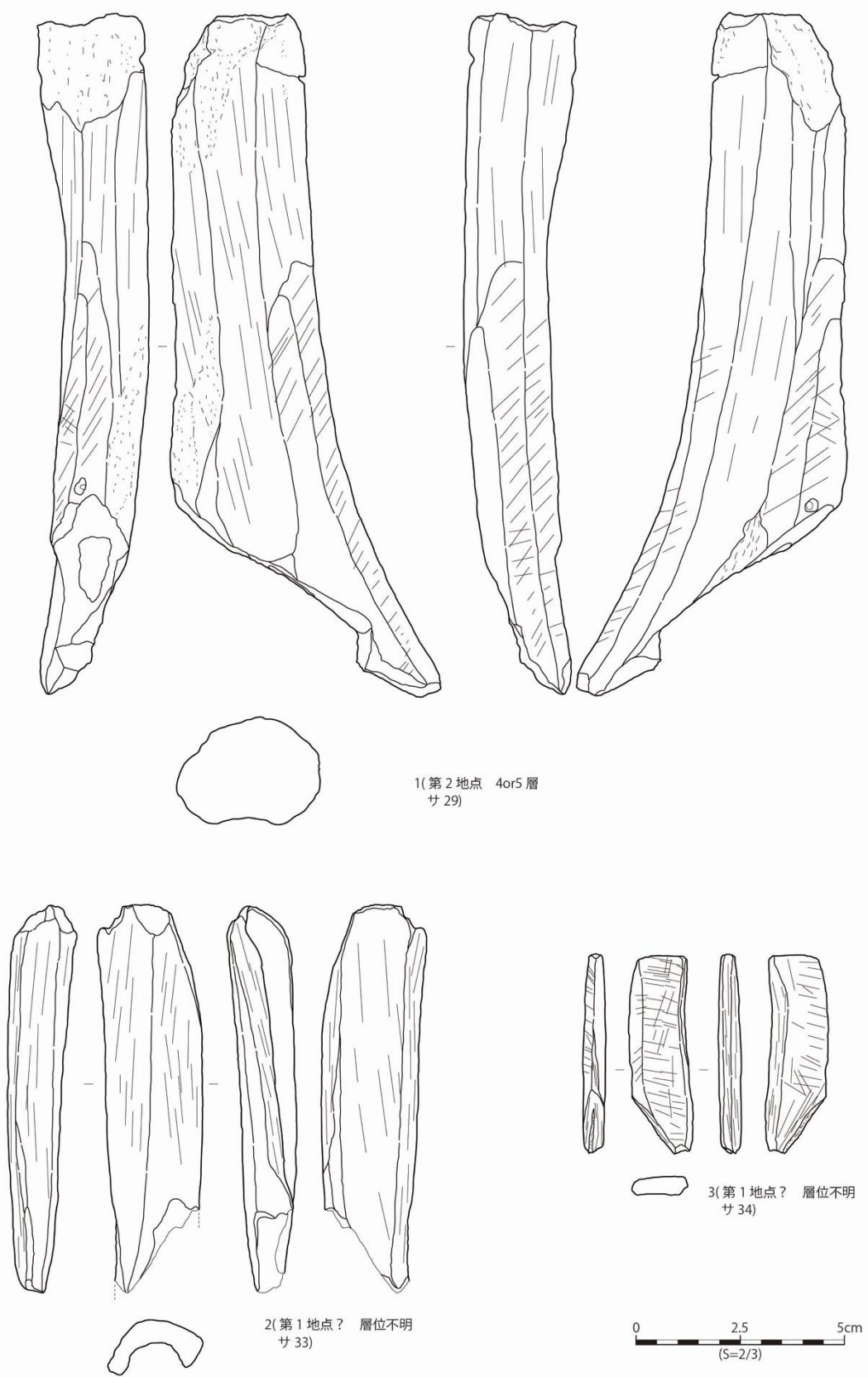


図6. サイベ沢遺跡出土加工痕が残る資料

表 1. サイベ沢遺跡出土骨角器観察表

図録番号	検体番号	種類	出土位置	層位	経緯	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形状	部位	検出番号	算出子数検体番号	注記
1	1	約目録内骨(針)	第1地点	第18層(内層)	前部土層(内層下層)式(1)	39.6	15.8	3.2	1.40	シカ	角	第85図-17	サイバ沢遺跡骨角器5	II・PPワイヤ・1 HCM556411-10-11 II・PPワイヤ・28
1	2	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	38.7	4.8	2.6	0.53	特殊骨角		第85図-4,9	サイバ沢遺跡骨角器6	ワイヤ43-2
1	3	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	65.9	9.3	9.0		特殊骨角		第85図-4,7		
1	4	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	85.6	13.8	9.5	8.45	シカ	角	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器5	II・PPワイヤ・26 II-4 II・PPワイヤ・31 II-4 II・PPワイヤ・41 II-15
1	5	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(85.2)	12.0	9.6	12.34	シカ	中手/中足骨	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器24	
1	6	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(91.5)	5.1	3.6	0.82	シカ	角	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器8	II-5
1	7	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(107.6)	7.5	5.7	3.35	シカ?	中手/中足骨?	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器36	
1	8	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	113.0	11.6	3.6	3.99	特殊骨角	骨	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器28	II・PPワイヤ・24 II-3,7 II・PPワイヤ・46
1	9	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	206.1	34.2	23.3	43.07	特殊骨角	骨	第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器27	II・PPワイヤ・37
1	10	約目録内骨(針)	第2地点(第一月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	(88.4)	6.2	4.8	1.28	特殊骨角		第85図-4,15	サイバ沢遺跡骨角器23	II・PPワイヤ・40
2	1	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	(44.9)	8.1	6.3	1.29	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器14	II・PPワイヤ・18 HCM556411-10-11 II・PPワイヤ・23 HCM556411-10-11
2	2	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(72.0)	8.0	2.1	2.41	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器17	II・PPワイヤ・21 HCM556411-10-11 II-2
2	3	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(91.9)	6.2	7.4	2.95	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器35	II-16
2	4	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(66.8)	5.4	4.5	1.28	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器11	II・PPワイヤ・20 HCM556411-10-11 II-2
2	5	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(24.2)	6.9	2.3	0.28	エィ	尾端	第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器21	II-5
2	6	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(74.3)	(8.1)	(6.9)	1.92	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器15	II-6, 4
2	7	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(34.7)	9.0	4.1	0.85	特殊骨角		第85図-2,7	サイバ沢遺跡骨角器20	II・PPワイヤ・27 II-4
2	8	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(58.4)	12.2	5.1	2.02	シカ	角	第85図-4,14	サイバ沢遺跡骨角器2	II・PPワイヤ・2 HCM556411-10-11
2	9	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	80.7	7.7	3.5	1.55	エィ	尾端	第85図-4,14	サイバ沢遺跡骨角器32	HCM556411-10-11
2	10	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	5層	前部土層(内層下層)式(1)	170.3	45.6	29.1	46.18	ヒョウ	尺骨	第85図-5,2	サイバ沢遺跡骨角器3	HCM556411-10-11
2	11	約目録内骨(針)	第2地点(第二月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	66.3	3.5	2.4	0.65	特殊骨角		第85図-5,2	サイバ沢遺跡骨角器4	HCM556411-10-11
3	1	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	67.4	7.7	3.9	1.74	特殊骨角		第85図-6,5	サイバ沢遺跡骨角器22	II・PPワイヤ・43 S・II-16
3	2	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	44.7	8.0	2.6	0.53	シカ	角	第85図-6,5	サイバ沢遺跡骨角器13	II・PPワイヤ・22
3	3	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	173.4	8.9	5.9	16.50	シカ	中手/中足骨	第85図-6,5	サイバ沢遺跡骨角器2	II・PPワイヤ・6 HCM557411-10-11
3	4	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(3.3)	3.5	2.0	0.35	トリ?		第85図-6,5	サイバ沢遺跡骨角器25	II・PPワイヤ・36 II-6, 4
3	5	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	(129.0)	7.1	4.8	5.11	シカ	中手/中足骨?	第85図-3,8	サイバ沢遺跡骨角器2	II・PPワイヤ・2 HCM557411-10-11
3	6	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	(108.2)	8.9	3.0	3.68	シカ	角	第85図-3,16	サイバ沢遺跡骨角器22	II・PPワイヤ・47 HCM556411-10-11 II・PPワイヤ・17 HCM556411-10-11(部分) II・PPワイヤ・30 HCM556411-10-11 II-4,7
3	7	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	5層	前部土層(内層下層)式(1)	90.2	11.1	6.5	5.58	トリ		第85図-3,16	サイバ沢遺跡骨角器18	II-2-4
3	8	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(80.7)	16.2	3.5	6.14	クジラ		第85図-4	サイバ沢遺跡骨角器4	II・PPワイヤ・25 II-4
3	9	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	199.5	56.0	17.4	162.38	クジラ		第85図-4,2	サイバ沢遺跡骨角器18	II・PPワイヤ・8 HCM562411-10-11 II・PPワイヤ・9 HCM572411-10-11 S,9
3	10	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	51.5	15.8	5.1	2.08	インシ	上唇/火傷	第85図-4,2	サイバ沢遺跡骨角器18	II-4
3	11	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(31.7)	-	16.1	4.94	骨	骨	第85図-4,2	サイバ沢遺跡骨角器1	注記なし
3	12	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	24.2	-	10.1	1.78	骨	骨	第85図-4,2	サイバ沢遺跡骨角器1	注記なし
3	13	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	5層	前部土層(内層下層)式(1)	34.7	9.5	6.3	1.49	トリ		第85図-5,5	サイバ沢遺跡骨角器1	II・PPワイヤ・33 HCM556411-10-11
3	14	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	33.6	7.4	6.0	1.80	トリ		第85図-2,3	サイバ沢遺跡骨角器5	II・PPワイヤ・5 HCM556411-10-11
3	15	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	38.6	15.5	13.4	9.82	トリ		第85図-2,3	サイバ沢遺跡骨角器6	II・PPワイヤ・39 HCM556411-10-11
4	1	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	(22.7)	6.6	3.3	0.44	特殊骨角		第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器26	II・PPワイヤ・34
4	2	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	5層	前部土層(内層下層)式(1)	(93.3)	1.0	3.9	2.57	特殊骨角		第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器26	II・PPワイヤ・35 HCM556411-10-11 II-5
4	3	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	5層	前部土層(内層下層)式(1)	(33.9)	16.1	7.4	1.34	特殊骨角	肋骨?	第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器29	II・PPワイヤ・16
4	4	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	(76.4)	21.0	12.9	8.31	シカ	角	第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器32	注記なし
4	5	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	142.1	21.8	12.9	17.19	シカ	角	第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器7	注記なし
4	6	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	90.0	19.8	14.0	14.56	シカ	角	第85図-5,13	サイバ沢遺跡骨角器19	II・PPワイヤ・19 HCM556411-10-11 II・PPワイヤ・44 HCM556411-10-11
4	7	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	6層	前部土層(内層下層)式(1)	27.1	39.6	13.8	65.71	シカ	中足骨	第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器30	II・PPワイヤ・15 II-3
5	1	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層e5層	前部土層(内層下層)式(1)	(95.7)	26.7	19.5	15.41	シカ	中足骨	第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器30	II・PPワイヤ・16
5	2	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	3-1層	前部土層(内層下層)式(1)	(95.7)	(31.5)	20.9	32.33	シカ	中手骨	第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器29	II・PPワイヤ・45
5	3	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層e5層	前部土層(内層下層)式(1)	163.5	22.3	26.4	68.09	特殊骨角		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器29	II・PPワイヤ・45
5	4	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	91.7	42.8	12.2		特殊骨角		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器33	II・PPワイヤ・11 S,1-2,4,4
5	5	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	4層	前部土層(内層下層)式(1)	47.4	13.5	5.4	3.76	特殊骨角		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器34	II・PPワイヤ・12 II-1,9
5	6	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(95.3)	5.0	6.5	2.43	特殊骨角		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器16	II・PPワイヤ・38 HCM556411-10-11
6	1	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(25.3)	-	(11.5)	1.43	特殊骨角		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器10	II-15
6	2	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	18.5	6.1	4.5	0.45	トリ		第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器31	II・PPワイヤ・14 S-2,17
6	3	約目録内骨(針)	第2地点(第三月層)	2層?	前部土層(内層下層)式(1)	(119.4)	15.0	12.1	11.92	シカ	角	第85図-6,4	サイバ沢遺跡骨角器2	注記なし

#### 4. 各器種の形態的分析

##### 4-1. 分析資料の概要

本稿の分析対象は55点で、全て目視で回収された資料である。出土器種は釣針形骨角器・銛頭状骨角器・尖頭状骨角器・ヤス先状骨角器・へら状骨角器・針状骨角器・針入形骨角器・鯨骨製品・装飾品・加工痕が残る資料が確認できた。以上の器種組成を図7に示す。

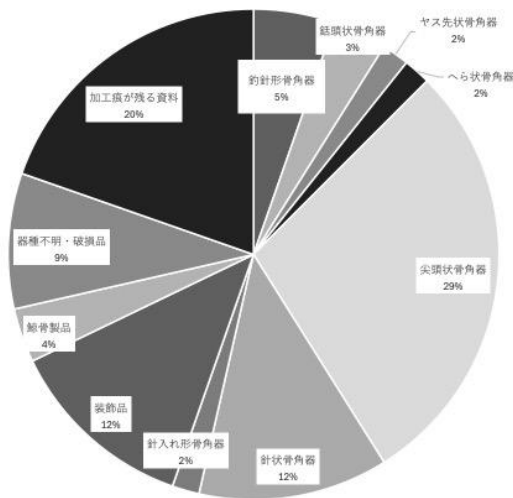


図7. サイベ沢遺跡における骨角器の器種組成

##### 4-2. 器種別の様相

###### a. 釣針形骨角器

単式の図1-1は破損が見られず、長軸は39.6mmであり、フトコロの横幅は15.8mmである。軸部の断面形態は円形である。結合式の資料の長さは図1-2が38.7mm、図2が37.5mmである。図1-3は未成品と思われるが針部が作出されかけていることを踏まえるとこれ以上著しく長さを減じる可能性は低い。幅・厚さは図1-3の方がやや大きい。今後研磨といった整形が施されることを踏まえると図1-2・3はおおよそ同じ法量になると考えられる。

###### b. 銛頭状骨角器

成品は図1-4の1点のみ確認できた。開窩式で、器体はくびれで頭部と胴部に分かれ、尾部には穿孔を持たず、二股にはならない。以上の形態的属性から一王寺型C類

a種に分類できる<sup>(10)</sup>。

実物を確認できなかったため、細かい破損や付着物、ソケットの断面形態など詳細に観察できなかった。頭部と胴部の割合はおおよそ4:6である。アスファルトなどの付着物は確認できない。

図1-5は銛頭状骨角器の未成品とすれば、頭部と胴部の割合はおおよそ3:7である。

法量は長さ・幅ともに図1-5が大きい。未成品とすれば今後の製作工程で研磨などで長さ・幅を減じるものと考えられる。

###### c. へら状骨角器

1点のみのため、統計的な検討は行えないが、刃角を測定すると61.0°である。先端部を肉眼および倍率20倍のルーペを用いて観察したところ、明瞭ではないものの長軸方向の線状痕が観察できた。

###### d. 針状骨角器

7点中6点が穿孔をもち、全て両面から回転穿孔されている。破損が見られる資料は4点であり、破損率は57.1%である。穿孔部での破損資料が1点、穿孔部以外での破損資料が3点である。穿孔部での破損よりも穿孔部以外での破損の割合が高い。

幅と厚さの散布図を素材別にドットで図8に示した。顕著なまとまりは見出せない。素材部位不明・鹿角製・シカ中手/中足骨製はそれぞれ2点であるが、同じ素材の点同士を結ぶと全て右肩上がりの直線となる。資料全点について相関係数を算出すると0.61となり正の相関関係を示す。

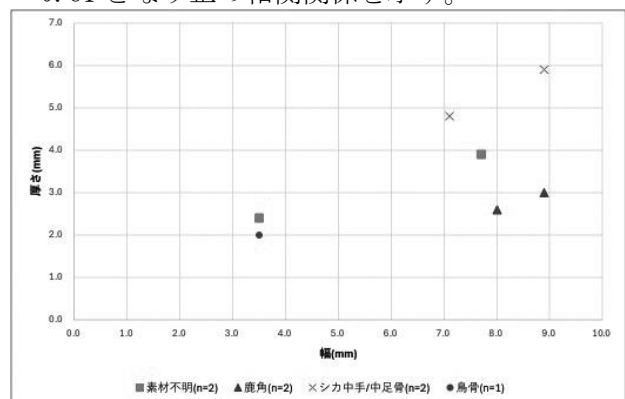


図8. 針状骨角器の法量散布図

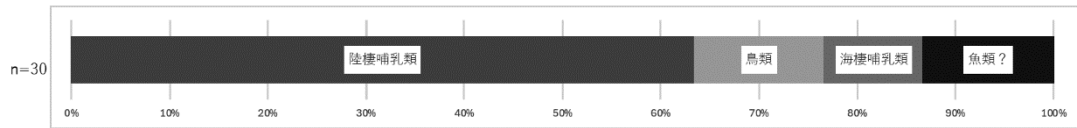


図 9. サイベ沢遺跡における骨角器素材の大別割合

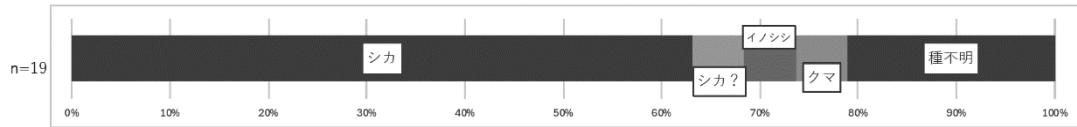


図 10. サイベ沢遺跡における骨角器素材の陸棲哺乳類の細別割合

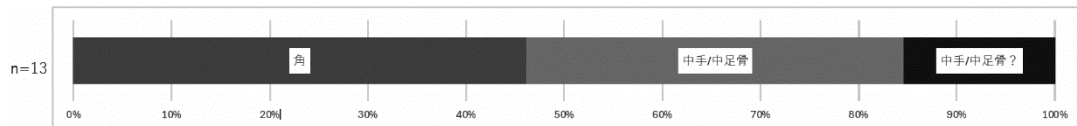


図 11. サイベ沢遺跡における骨角器素材のシカ部位の細別割合

### e. 尖頭状骨角器

尖頭状骨角器は 17 点観察し、単純形状の資料が 15 点、錐形の資料が 2 点である。

作りが丁寧な資料が 6 点、打ち割った骨片の尖頭部をそのまま利用するなどした資料は 2 点で残りの 9 点は判断できなかった。単純形状の資料のうち破損資料は 9 点、錐形の破損資料数は 2 点である。

図 1-6 の 1 点のみ穿孔がある。回転穿孔で基部に上方向からなされている。

錐形の資料の先端部の断面形態はいずれも円形である。また、先端部を肉眼および倍率 20 倍のルーペで観察したところどちらも先端部に摩耗が観察された。

## 5. 製作技術の分析

### 5-1. 素材

素材となった動物種の大別を図 9 に示し

た。陸棲哺乳類の割合が 60% を超え、最も高い。さらに陸棲哺乳類を細別した組成を図 10 に示した。シカの割合が 70% 近く、最も高い。さらにシカ素材の部位別の割合を示したものが図 11 である。すべて角・中手/中足骨が占める。以上の結果から、陸棲哺乳類の中でもシカ、さらにシカの角・中手/中足骨の集中的な利用があったといえる。なお、目視回収のため、小型獣骨製の資料が見逃された可能性は考えられる。

### 5-2. 骨角器製作に関わる用語の定義

骨角器の製作技術を分析するにあたって素材の分割の技術として「擦り切り」「打ち割り」、穿孔に関わる技術として尖頭状の道具での回転運動による「回転穿孔」と刃器類で溝を掘り、そのまま貫通させる「擦り切り穿孔」の 2 種をそれぞれ技術的用語

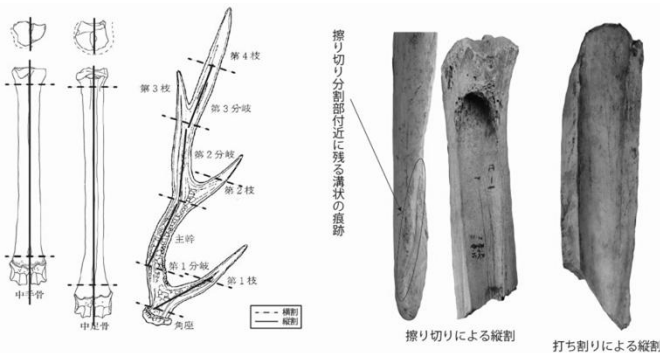


図 12. 縦割・横割の概念図と実際の資料<sup>(11・12)</sup>

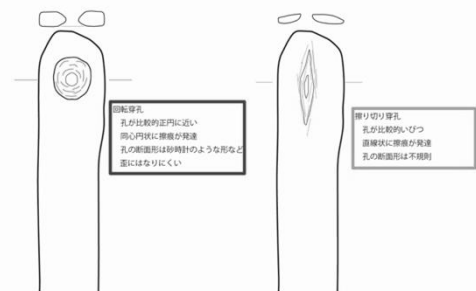


図 13. 穿孔技術の模式図

とする。また素材の分割方向については素材の長軸と直行方向での分割を「横割」、素材の長軸と並行方向での分割を「縦割」とする。以上の技術的な定義の概念図と実際の資料を図12・13に示した。なお、以上の加工具であるが打ち割りには敲石などの礫石器、擦り切りには刃器類、回転穿孔には石錐がそれぞれ考えられ、サイベ沢遺跡でも各器種が出土した。

### 5-3. 加工痕の観察結果と製作工程

まず、本遺跡における骨角器の素材を以下で言及する器種別に表2に示す。以下、加工痕が読み取り可能な器種について検討を行う。

#### a. 加工痕が残る資料

図4-5は下端の摩耗が激しいものの溝が観察できるため擦り切りで縦割されたと考えられる。図4-6は長軸方向に擦り切りの溝が残り、擦り切りで縦割されている。図4-7は横割・縦割ともに擦り切りで行われている。図5-1は骨端部を残したまま擦り切りで縦割される。図5-2は破損のため横割の技術は判断できないが、縦割は擦り切りで行われている。図6-2は上部の分割は打ち割りによるものと考えられる。また縦割も打ち割りで行われる。図6-3は擦り切りによって遠位端を分割する途中である。また縦割も擦り切りで行われる。

以上を小括すると擦り切りで行われる加工が多いものの、打ち割りによる加工も

見られる。

#### b. 釣針形骨角器

単式の資料についてはその形状と無鏝であることを踏まえると後期の石倉貝塚資料とは異なり、板状の資料から擦り切りで作出されたと考えられる。結合式針部については図1-3の下端には擦り切りで分割された痕跡が残る。

#### c. 銚頭状骨角器

図1-5がこの器種の未成品と考えると板状の資料から擦り切りで作出したことが指摘できる。したがって、板状鹿角から概形の作出、ソケットの作出という製作工程が想定できる。また、中期に出現するような鹿角尖部をそのまま使用するタイプは無い。

#### d. 尖頭状骨角器

図1-6・7・8・図2-2・4・6・7・8のように擦り切りによる加工と考えられる資料と図1-9・図2-3のように打ち割りによる加工と考えられる資料が混在する。また、回転穿孔を伴う資料がある。

#### e. 針状骨角器

分割痕を残す資料が少ないため穿孔方法に注目する。すべて回転穿孔で行われる。再利用と断定できる資料はない。

#### f. へら状骨角器

滑車切痕の反対側の面を擦り切りで縦割の要領で取り去り、刃部を作出する。

#### g. その他の機種

装飾品類では、すべて回転穿孔で穿孔が

表2. サイベ沢遺跡出土骨角器の器種別素材

加工痕が残る資料					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
シカ	7	70.0%	角	4	40.0%
			中手/中足骨	3	30.0%
海苔類	1	10.0%	部位不明	1	10.0%
陸棲哺乳類	2	20.0%	部位不明	2	20.0%
合計	10		合計	10	

尖頭状骨角器					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
シカ	4	23.5%	角	3	17.6%
			中手/中足骨?	1	5.9%
鳥類	4	23.5%	棘	1	5.9%
			部位不明	3	17.6%
陸棲哺乳類	4	23.5%	部位不明	4	23.5%
不明	5	29.4%	部位不明	5	29.4%
合計	17		合計	17	

釣針形骨角器					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
シカ	1	33.3%	角	1	33.3%
陸棲哺乳類	2	66.7%	部位不明	2	66.7%
合計	3		合計	3	

針状骨角器					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
シカ	4	57.1%	角	2	28.6%
			中手/中足骨	1	14.3%
			中手/中足骨?	1	14.3%
鳥類?	1	14.3%	部位不明	1	14.3%
陸棲哺乳類	2	28.6%	部位不明	2	28.6%
合計	7		合計	7	

銚頭状骨角器					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
シカ	1	50.0%	角	1	50.0%
陸棲哺乳類	1	50.0%	部位不明	1	50.0%
合計	2		合計	2	

へら状骨角器					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
クマ	1	100.0%	尺骨	1	100.0%
合計	1		合計	1	

装飾品					
大別	点数	割合	部位	点数	割合
イノシシ	1	14.3%	上顎犬歯	1	14.3%
サメ	3	42.9%	椎骨	3	42.9%
トリ	3	42.9%	部位不明	3	42.9%
合計	7		合計	7	

なされる。また、器種不明品・破損品では図 4-2 は擦り切り穿孔の可能性がある。一方で図 4-5 は回転穿孔がなされており、さらに回転穿孔を試みた痕がある。

#### 5-4. 製作技術の小結

ここまで主に分割技術・穿孔技術に注目して各器種の製作技術を考えてきた。まず、分割方法については打ち割りと擦り切りの両者が用いられたことがわかった。また、穿孔方法は回転穿孔が主だが、1 点だけ擦り切り穿孔の可能性がある資料があった。

### 6. 骨角器の利用に関する考察

#### 6-1. 釣針形骨角器の形態と使用

対象資料数が 3 点と少ないが、周辺遺跡を踏まえて利用に関する考察を試みる。道南部では表 3 に示すように同時期の東北地方に比して結合式の資料が高い割合で出土している。なお、結合式の資料のカウント方法であるが、軸部・針部両方が出土している場合、結合式資料の最小資料数を資料数として用いる。例えば、結合式軸部が 11 点、針部が 5 点出土している場合、結合式の資料の最小資料数は 11 点であり、これを出土点数とする。

表 3 からわかるように単式に比して結合式の資料の割合が高いのは福島町館崎遺跡(前期末葉～中期前葉)でも同様の傾向である<sup>(13)</sup>。この両遺跡は津軽海峡に面しているという点で漁撈環境が近いと考えられる。

したがって、結合式の割合が高いという両遺跡の傾向は、両遺跡の共通した漁撈形態を反映している可能性がある。そこで、以下で単式に加えて結合式を選択した理由を出土魚類を踏まえて考察していく。

前提として素材形状の制約を受けにくい点、使用の効率がよい点が結合式のメリットと考えられる。前者は幅のない管状骨からも作出できるため、後者は針部が破損しても付け替えての使用が可能であるためである。以上の前提を踏まえて対象魚類からの検討を行う。サイベ沢遺跡の魚類は目視による回収かつ定量的な報告がなされていないため、館崎遺跡の報告を参考に仮説的に考えてみたい。館崎遺跡において魚類ではアイナメが主体的に出土し、次いでフカカサゴが多く出土している<sup>(13)</sup>。これらの魚種は岩礁帯に生息する。岩礁帯ではよく根掛かりが発生し、釣針形骨角器を破損、損失しやすい環境であったことが推定できる。結合式であれば針部を補填するだけで再度使用が可能である。したがって、結合式の使用は根魚の漁獲と連動した現象であると解することができる。

ただし、サイベ沢遺跡についてはアイナメ・フカカサゴ等は報告されておらず、この仮説をそのまま当てはめることには疑問が残る。カレイ等の底性魚類が対象であったことは十分に考えられるものの、先述したようにサイベ沢遺跡の魚類は未整理であり、今後魚類遺体の整理を行いながら、こ

表 3. 道南・東北における釣針形骨角器の出土数と割合 (1・13・14・15・16・17・18・19 より筆者作成)

数量	館崎遺跡 n=38	サイベ沢遺跡 n=3	三内丸山遺跡 n=31	二ツ森貝塚 n=5	東道ノ上(3)遺跡 n=24	是川一王寺遺跡 n=6	崎山貝塚 n=60	波怒楽館遺跡 n=39
単式	1	1	29	4	24	6	59	39
結合式	37	2	2	1	0	0	1	0
合計	38	3	31	5	24	6	60	39
軸部	4	0	1	0	0	0	0	0
針部	37	2	2	1	0	0	1	0
割合	館崎遺跡 n=38	サイベ沢遺跡 n=3	三内丸山遺跡 n=31	二ツ森貝塚 n=5	東道ノ上(3)遺跡 n=24	是川一王寺遺跡 n=6	崎山貝塚 n=60	波怒楽館遺跡 n=39
単式	2.6	33.3	93.5	80.0	100.0	100.0	98.3	100.0
結合式	97.4	66.7	6.5	20.0	0.0	0.0	1.7	0.0

の仮説を検証する必要がある。

## 6-2. 銚頭状骨角器の形態

同時期の北海道島において銚頭状骨角器の出土数が多い道南部津軽海峡域から内浦湾沿岸にかけて刃溝を有する資料が出土する。一方、サイベ沢遺跡出土資料には刃溝がない。したがって、サイベ沢遺跡資料は図 14 に示すように北東北との共通性を指摘できる。

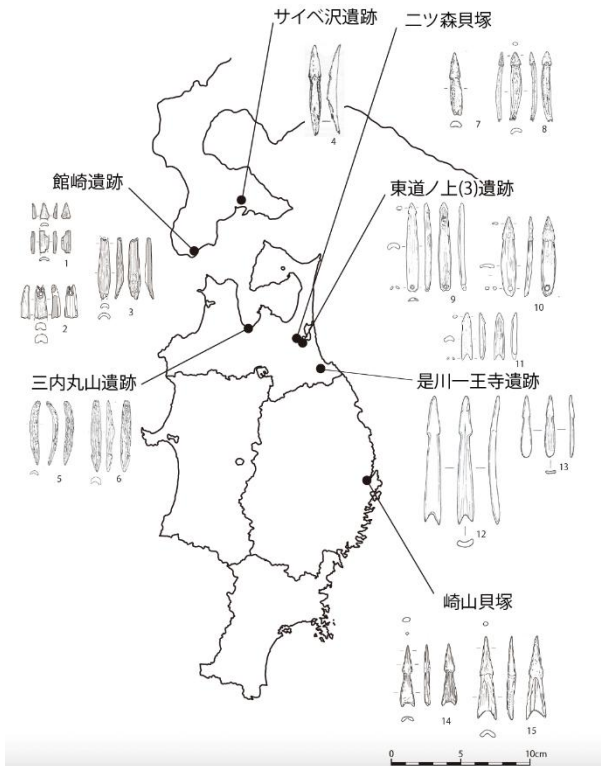


図 14. 道南・東北における銚頭状骨角器 (20・21・22・23・24・25・26)

## 6-3. 使用対象と骨角器の関係

サイベ沢遺跡で出土した魚類・海棲哺乳類は定量的な報告がなされていないが、判明している限りの情報とここまでの分析を踏まえて対象魚類を考える。サイベ沢遺跡で報告されている魚種はマグロ類の椎骨(第 2 貝塚で 12 個まとまって出土)、カジキ類の椎骨、カレイ類の頭骨、小型魚類の棘、大型海獣骨の肩甲骨・椎骨・大腿骨、イルカの椎骨である<sup>(1)</sup>。また骨角器からエイ・サメ類も漁獲された可能性が考えられ

る。しかし、マグロ・カジキといった大型の魚類の遺体は目につきやすく、目視回収によるバイアスが考えられる。

以上の魚類と骨角器の対応関係は先述の考察を踏まえると、釣針形骨角器の対象はマグロ類・カジキ類・カレイ類も含まれるであろうし、根魚にも対応する可能性がある。したがって釣針形骨角器は眼前の湾から津軽海峡まで幅広く利用されたことが伺える。また、結合式は針部の大きさから結合時には単式より大型であることが想定できる。したがって、釣針形骨角器は単式と結合式を併用し、小型のものから大型の魚まで幅広い魚種に対応していたと考えられる。

銚頭状骨角器の対象は東北地方との共通性を勘案すればマグロ類・カツオ類・カレイ等の魚類、北海道島という環境を勘案すれば海獣が考えられるが現段階で断定は難しい。ヤス先状骨角器はカレイ・タイ科が考えられる。

## 7. 骨角器の製作に関する考察

### 7-1. 製作技術と地域性

5 章で製作技術を検討した結果、分割の技術については擦り切りと打ち割りが併用される様相が明らかとなった。この地域の特徴を考察するため、周辺の遺跡との考察を試みる。

周辺域の遺跡を対象とした研究事例では斉藤慶吏によって内浦湾に面する虎杖浜 2 遺跡、青森湾に面する三内丸山遺跡、小川原湖沿岸の東道ノ上(3)遺跡、三陸沿岸の崎山貝塚を対象として骨角器の素材獲得の様相と製作技術の地域的な特徴が示されている<sup>(26)</sup>。その中で三内丸山遺跡・東道ノ上(3)遺跡では擦り切りが多用されることが指摘される。空間的には北東北に擦り切りを多用する遺跡が立地することがわかる。擦り切りによる加工は時間がかかる反面、不規

則な割れの抑制につながる。したがって、節約・管理的な要素が指摘できる。その反面、打ち割りによる加工は偶発的な割れが発生することから、素材にはある程度の余裕があったと考えられる。したがって各遺跡で採用された分割技術の違いは素材となる動物資源量に左右されるものと考えられる。本稿において確認した骨角器の素材としてシカ、さらにその角・中手/中足骨をよく利用するという傾向はおおよそ東北の遺跡でも同様である<sup>(27)</sup>。つまり、骨角器の製作技術を考える際にはシカという骨角器素材の資源量に注目することが必要である。そこで以下では、各遺跡における素材獲得と製作技術の関係性について考える。

## 7-2. 骨角器素材の動物種と地域差の関係

先行研究では三内丸山遺跡では擦り切りが多用される傾向、すなわち節約的な傾向の要因として多雪によるシカの個体数の少なさが指摘される<sup>(27)</sup>。東北地方の日本海側での縄文時代を通じた動物利用を検討した櫻庭陸央は、東北地方の日本海側を北上するに従って動物組成に占めるシカなど大型哺乳類の割合が低下する傾向を指摘する<sup>(28)</sup>。また時期的には少し異なるもののシカ用の陥し穴と考えられるTピットを分析した藤原秀樹は、表4のように本州の日本海側や下北半島など多雪地帯ではTピットの分布が少ないことを指摘する<sup>(29・30)</sup>。なお、藤原は前期中葉～中期前半まで陥し穴が欠落することも指摘している<sup>(30)</sup>。したがって本論で対象とする時期に直接的に当てはめることはできない。しかし、櫻庭の分析と併せて考えると動物遺体の分析結果として北東北の日本海側ではシカが少ない傾向があり、その捕獲用と考えられるTピットの分布も矛盾しない傾向を示すことから北東北の日本海側では縄文時代を通じてシカの生息数が少ないことが示唆され、先行研究

で指摘されるようにシカという素材の少なさから擦り切りを多用する節約的な製作技術を採用する遺跡が立地する、と理解できる。一方で、太平洋側ではシカが獲得可能であったために打ち割りを併用した製作技術が取られていたといえる。以上の結果から骨角器の製作技術はシカの生息数という自然条件に起因すると理解できる。

表4. 積雪深・日数と陥し穴の分布<sup>(33)</sup>

積雪深 /日数	北海道						青森県			
	札幌	浦河	苫小牧	八雲	函館	熊石	八戸	青森	むつ	深浦
～20cm	100.5	4.4	14.3	85.5	42.2	55.7	9.2	87.6	54.7	33.9
～50cm	62.0	0.0	0.2	41.8	5.5	12.5	0.5	54.2	17.6	9.7
前半期陥し穴	×	×	×	×	×	×	◎	△	×	×
後半期陥し穴	○	◎	◎	△	◎	×	◎	△	△	△

積雪深 /日数	岩手県					秋田県				
	久慈	宮古	二戸	盛岡	北上	鹿角	鷹栖	能代	秋田	横手
～20cm	8.0	6.4	22.8	26.6	17.4	72.2	69.3	28.3	22.7	82.0
～50cm	0.4	0.4	1.4	1.9	0.2	19.3	29.4	6.0	2.0	52.8
前半期陥し穴	○	◎	◎	△	◎	△	○	△	△	○
後半期陥し穴	○	◎	◎	○	◎	○	△	△	○	△

凡例 ◎：非常に多い ○：あり △：少ない ×：なし

サイベ沢遺跡の擦り切りと打ち割りを併用するという骨角器の製作技術は本州島の太平洋側の遺跡に類似しており、一見して本州島より北に位置する北海道島という立地と不整合に見える。そこで館崎遺跡、虎杖浜2遺跡の骨角器の素材となった動物種を考えると本州島の遺跡に比して、海棲哺乳類が素材として選択されている<sup>(13・27)</sup>。一方本州では海獣の利用は顕著ではない。また、シカに注目すると北海道島に生息するのはエゾシカである。エゾシカの食性を糞から分析した南野らによると、あくまで近年のデータであるが積雪量によって摂食する植物を変化させ、積雪が100cmを超える地域でも越冬していることが指摘される<sup>(31)</sup>。積雪が50cmを目処に足跡の発見率が下がると指摘されるホンシュウジカ<sup>(32)</sup>と比較して積雪に強いことが伺える。また、前掲の藤原の分析においても表4に示すように函館は道内では比較的積雪量が少なく、Tピットの分布も確認されていること<sup>(29)</sup>から、サイベ沢遺跡では本州より北に位

置していながらもエゾシカを獲得可能であったと考えられる。したがって北海道島においては素材の選択肢として海棲哺乳類があったため、また積雪に強いエゾシカを対象としていたために本州島より北に位置していても三内丸山遺跡ほど素材に困窮しづらく、打ち割りを併用した技術が取られたと考えられる。

## 8. おわりに

サイベ沢遺跡出土の出土資料を分析し、津軽海峡沿岸域を中心に周辺遺跡との比較を行った。結果として北海道島南部では北東北と比して結合式の資料の割合が多いことを指摘し、それが根魚という対象魚種による差異である可能性を指摘した。しかし、この仮説をサイベ沢遺跡でも適用できるかは今後の課題とする必要がある。一方で、銚頭状骨角器については開窩式で挟りで2分割する形態であり、東北地方と同様の属性を持ち、これらが寒流域で使用されたという渡辺の指摘<sup>(10)</sup>を追認する結果であった。また、イノシシの犬歯を素材とする骨角器の出土はかつて西本豊弘が指摘したように<sup>(34)</sup>本州島との交流を示唆するものであり、それが装飾品として出土することはイノシシに対する祭祀的要素も示唆する。

製作技術については擦り切り・打ち割りを併用する様相が見て取れ、海棲哺乳類・積雪に強いエゾシカという北海道島特有の素材選択性があったことがその背景と考察した。

円筒下層期における北海道島津軽海峡沿岸域では盛土遺構は知られるものの、貝塚出土の骨角器は少ない。貝塚出土の骨角器と盛土遺構出土の骨角器は被熱の有無など残存の過程が違うこともあり、厳密に言えば比較にあたっての条件は同一ではない。そのため、サイベ沢遺跡の貝塚出土の骨角器は、北東北で盛んに形成される貝塚出土

資料と出土条件が近く、それらとの比較に適した数少ない好資料であるといえる。したがって、本稿の内容は今後の北東北以北の骨角器研究の基礎資料となるものである。サイベ沢遺跡には未報告資料があり、今後も継続的な整理・報告を進めていく必要がある。また、本稿においては資料が少ないことから資料を一括して分析を行ったが、今後は資料の整理によって分析対象資料を増やし、サイベ沢遺跡内での骨角器の変遷といった時間的変化の解像度を上げ、本稿での知見の深化、仮説の検証を行う必要がある。

本稿は2024年度に弘前大学人文社会科学部研究科に提出した修士論文の一部である。指導教員である弘前大学人文社会科学部の上條信彦教授には在学時5年間にわたって大変丁寧なご指導を賜った。深く感謝申し上げる。資料調査には函館市教育委員会・市立函館博物館及び同館学芸員の福田裕二氏に大変お世話になった。千歳市埋蔵文化財センターの浅野溪氏にも有益な助言を賜った。また、骨角器素材の動物種の同定には櫻庭陸央氏(帝京大学文化財研究所)・高橋怜土氏(八戸市立博物館)・渡辺双葉氏(北海道教育庁)の協力を賜った。以上の機関・諸氏にも心から感謝申し上げる。なお、同定の責任はすべて筆者にある。

### (脚注)

- (1) 市立函館博物館1958『サイベ沢遺跡—函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書—』
- (2) 福田裕二2024「〈研究ノート〉サイベ沢遺跡出土の円筒土器を考える(1)」『市立函館博物館研究紀要』34. 市立函館博物館. pp. 105~109
- (3) 報告書から図を引用した場合は「報58」と報告書での図番号を、筆者が整理番号を付した資料は「サ」と整理番号を付した。
- (4) 鳥取県埋蔵文化財センター2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5 骨角器(1)』(鳥

- 取県埋蔵文化財センター調査報告 32)
- (5) 1・2・4・6：前掲(1)p26. 第 44 図-17・p60. 第 85 図-4.9・4.7・4.15
- (6) 3・12・13：前掲(1)p62. 第 86 図-2.7・p60. 第 85 図-4.14・p58. 第 83 図-5.2
- (7) 1・2・4・5・6・7・8・9・10・14・15：前掲(1)p56. 第 78 図-6・6.5・p60. 第 85 図-4.・p62. 第 86 図-3.8・3.16・p58. 第 83 図-5・p60. 第 85 図-4.・4.2・p58. 第 83 図-5.5・p62. 第 86 図-2.3
- (8) 1・3：前掲(1)p52. 第 72 図-7.2・p60. 第 85 図-5.13
- (9) 1・3：前掲(1)p56. 第 79 図-6.4・p62. 第 86 図-2
- (10) 渡辺誠 1973『考古学選書 7 縄文時代の漁業』雄山閣
- (11) 松井章編 2006『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター. p48 第 26・27・56・57 図に筆者が加筆
- (12) 會田容弘 2007「角器の技術論-里浜貝塚HS0 地点出土資料を例として-」『佐藤広史君追悼論文集一所懸命』佐藤広史君を偲ぶ会. p79. 第 1 図に筆者が加筆
- (13) (公財)北海道埋蔵文化財センター2017『福島町館崎遺跡』(北海道埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 333 集)
- (14) 青森県教育委員会 2018『三内丸山遺跡 44 総括報告書(第 1 分冊)』(青森県埋蔵文化財調査報告書第 588 集)
- (15) 七戸町教育委員会 2007『二ツ森貝塚一範圍確認調査報告書一』(七戸町埋蔵文化財調査報告書 71 集)
- (16) 青森県教育委員会 2006『東道ノ上(3)遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第 424 集)
- (17) 八戸市教育委員会 2018『史跡是川石器時代遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(八戸市埋蔵文化財調査報告書第 164 集)
- (18) 宮古市教育委員会 2009『崎山貝塚 第IV期内容確認調査概報(骨角器篇)』(宮古市埋蔵文化財宮古市埋蔵文化財調査報告書第 76 集)
- (19) 気仙沼市教育委員会 2022『波怒棄館遺跡』(気仙沼市文化財調査報告書第 26 集)
- (20) 1~3：前掲(13) p9. 第IV—1 図—1・5・9
- (21) 4：前掲(1)p60. 第 85 図-4.7
- (22) 5・6：前掲(14) p149. 図 30—3—2・4
- (23) 7・8：前掲(15) p119. 第 61 図—29・30
- (24) 9~10：前掲(16) p270. 第 197 図—10・p271. 第 198 図—1・3
- (25) 12・13：前掲(17) p54. 挿図 1—3・4
- (26) 14・15：前掲(18) p31. 第 16 図—001・002
- (27) 齊藤慶史 2016「津軽海峡圏の骨角器-円筒土器文化期の骨角器製作技術基盤を中心に-」『一社団法人日本考古学協会 2016 弘前大会第 I 分科会津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会. pp. 153~166
- (28) 櫻庭陸央 2024「東北地方日本海側における縄文時代の動物資源利用」『動物考古学』41. 日本動物考古学会. pp. 39~49
- (29) 藤原秀樹 2018「北海道・北東北の縄文時代前半の陥し穴」『北海道考古学』55. 北海道考古学会. pp. 1~20
- (30) 藤原秀樹 2019「北日本の動物相と陥し穴」『考古学ジャーナル』734. ニューサイエンス社. pp. 13~16
- (31) 南野一博・明石信廣 2011「北海道西部におけるエゾシカの冬期の食性と積雪の影響」『哺乳類科学』51(1). 日本哺乳類学会. pp. 19~26
- (32) 丸山直樹 1981「ニホンジカ *Cervus nippon Temminck* の季節的移動と集合様式に関する研究」『東京農工大学農学部学術報告』23. 東京農工大学農学部. pp. 1~85
- (33) 前掲(29)p14. 表 4 を転載
- (34) 西本豊弘 1984「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈—動物遺存体の分析を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』4. 国立歴史民俗博物館. pp1~15
- (その他主要な参考文献)
- 金子浩昌・忍沢成視, 1986, 『考古民俗叢書』(22)

骨角器の研究 縄文篇 I』，慶友社，東京都。  
二階堂清風編，1998，『釣りや魚のことわざ事  
典』，東京堂出版，東京都。  
公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（編），  
2002，『北海道埋蔵文化財センター発掘調査報  
告書第 172 集 白老町 虎杖浜 2 遺跡(2)』，北海  
道埋蔵文化財センター，江別市。

（北海道教育庁文化財保護主事）

## 〈資料紹介〉 蠣崎波響筆「牡丹睡猫図」考

高柳 美咲

当館が所蔵する「牡丹睡猫図」(図1)は、松前藩の家老にして花鳥画の名手として知られる蠣崎波響(本名 廣年、1764年(明和元年)~1826年(文政9年))が、使われている印章から最晩年に手がけたものとされている。大輪の花を咲かせる薄紅色の牡丹の花、その根元に眠りこける猫と花の周りを飛びまわる蝶が彩色で描かれ、絵の中から暖かな空気が伝わってくるようである。

一見のどかな魅力を持つこの作品だが、しかし、描かれたモチーフを読み解いていくと、本作品は花鳥画としてだけではなく、中国の伝統的な画題に由来する吉祥画としての側面を読み取ることができるのだ。

まずは「猫」と「蝶」についてである。中国には「耄耋図」という「長寿」を意味する伝統的な画題がある。これは「猫」(mao)が「耄」(80、90歳の高齢者を指す)、「蝶」(die)が「耋」(70、80歳の高齢者を指す)と音が通じること由来し、これらの「長寿」に通ずるモチーフが組み合わせることにより、並外れた長寿をあらわす吉祥画となるのである。耄耋図がいつ頃成立したかについては明らかではないが、現存する早期の作品とされているのが、文人皇帝として名高い北宋の徽宗(1082年~1135年)の手によるものと伝わる「宋徽宗真蹟耄耋図卷」で、台湾の故宮博物院に所蔵されている。

次に「牡丹」についてである。牡丹は他と比べても一際大きな花をつけ、色彩も華麗を極めることから「百花の王」とされた



図1. 蠣崎波響筆「牡丹睡猫図」

植物である。百花の王たる牡丹の特別性を表す故事として、中国史上、唯一の女帝として君臨した唐の則天武后(624年～705年)にまつわる伝説を紹介したい。ある冬の日、雪の景色に満足できなくなった武后は、花々に花を咲かせるよう聖旨を下す。するとあたりはあらゆる季節の花で一斉に埋め尽くされた。しかし、よく見ると唯一花の王たる牡丹だけが咲いていない。これに怒った武后は当時の都・長安の牡丹をすべて抜いて焼き払い、追放してしまった。この話に歴史的な根拠はないが、武後の専横を象徴するものとして、清代の小説『鏡花縁』など文芸作品の中に取り入れられている。美しさと風格を併せ持つ牡丹は、唐代以来、「富貴」の象徴として尊ばれてきた。先ほど説明した猫と蝶の毫盞図に、この牡丹が加わることで、長寿だけではなく、豊かさをも願う「毫盞富貴図」が完成するのである。

波響はなぜ中国の伝統的な吉祥画題に共通するモチーフの作品を描いたのであろうか。これにはやはり、彼が初期に師と仰いだ武部凌岱(1719年(享保4年)～1774年(安永3年))と宋紫石(1715年(正徳5年)～1786年(天明6年))が南蘋派に属する画家であったことが大きいと考えられる。南蘋派は1731年(享保16年)に長崎に渡来した清の画家・沈南蘋の影響を受けた、中国の伝統的な花鳥画に洋風写生画が加味された緻密な線と鮮やかな色彩を特徴とする画派である。当館には沈南蘋筆と伝わる作品「牡丹に猫」(図2)が所蔵されており、筆致については沈南蘋が描いたにしては細密さに欠けて平坦な感があり、真贋の程は定かではないが、絵の内容について見比べるとうずくまる猫の姿など、波響の「牡丹睡猫図」と類似した点が見られる。波響が絵を学ぶ際に、師やその関係者の持つ作品、画稿、粉本を通じて中国の伝統的



図2. 伝衡齋沈(沈南蘋)筆「牡丹に猫」

な画題に触れる機会があったことは容易に推察される。また「牡丹+猫」「牡丹+蝶」という画題が南蘋流画に多く見出されることも研究者から指摘されている。(今橋2017:69-79) 本作品もそうした南蘋流の継承の結果、生まれたものではないだろうか。

ここで筆者が個人的に気になったのは、他の同様のモチーフが描かれた作品中の猫が覚醒している状態のものが多いように感じるのに対し、この作品の中の猫は眠っているという点である。牡丹の花と猫が共に

描かれる「正午牡丹」という吉祥画題から説明すると、太陽の光の強さが最高潮に達する正午に、牡丹の花は一番盛んに咲き、猫の瞳孔は最も収縮することから、富貴全盛であることを表す。また、吉祥画とは離れてしまうが中国や日本で猫の図像を屋内に貼ったり掛けたりして、養蚕の蚕を食い荒らすねずみ避けの護符とする場合も、猫は起きている状態で描かれる。つまり、猫は起きている状態の方がパワーを増すのである。

そんな猫が眠っている状態である「眠り猫」というモチーフは、かの有名な日光東照宮の彫刻や、禅の公案の「牡丹花下睡猫児」にも取り入れられているが、その意味については諸説あり、さらなる考察が必要となると考えられる。今回は中国の伝統的な画題に通じる吉祥画としての観点から「牡丹睡猫図」を見てきたが、この点についても追求することで、この作品にさらに違った魅力を与えてくれるのではないかと思う。今後の課題としたい。

#### (参考文献)

- 今橋理子, 2017, 『江戸の花鳥画 博物学をめぐる文化とその表象』, 講談社, 東京都.
- 公益財団法人日本習字教育財団観峰館(編), 2020, 『開館 25 周年記念秋季企画展 毫筆つてニャンだ! ? —吉祥の願い—』, 日本習字教育財団観峰館, 滋賀県.
- 小島瓊礼, 2024, 『角川文庫 24147 猫の王 猫伝承とその源流』, 株式会社 KADOKAWA, 東京都.
- 王敏・梅本重一(編), 2006, 『中国シンボル・イメージ図典』, 東京堂出版, 東京都.
- 中村公一, 2002, 『中国の愛の花ことば』, 草思社, 東京都.
- 杉原たく哉, 2006, 『中国ハッピー図像入門 しあわせ絵あわせ音あわせ』, 日本放送出版協会, 東京都.

永田富智, 1988, 『道新選書 9 松前絵師 蠣崎波響伝』, 北海道新聞社, 札幌市.

藤原重雄, 2014, 『日本史リブレット 79 史料としての猫絵』, 山川出版社, 東京都.

八岩まどか, 2005, 『猫神様の散歩道』, 青弓社, 東京都.

渋谷申博, 2022, 『猫の日本史 みんな猫が好きだった』, 株式会社出版芸術社, 東京都.

王敏, 1998, 『中公新書 1417 花が語る中国の心』, 中央公論社, 東京都.

(市立函館博物館学芸員)

市立函館博物館 研究紀要 第36号

編集・発行 市立函館博物館

040-0044 函館市青柳町17-1

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

U R L <http://hakohaku.com>

E - m a i l [hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp](mailto:hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp)

発行日 令和8（2026）年3月31日